

# 女原遺跡 4

—第1次調査報告書—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1053集

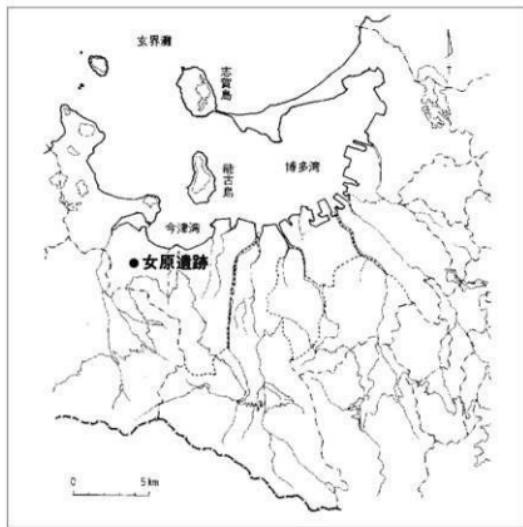
2009

福岡市教育委員会

# 女原遺跡 4

—第1次調査報告書—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1053集



調査番号：8517  
遺跡略号：MBR1

2009

福岡市教育委員会



1. 女原遺跡調査区遠景（南から、矢印地点）



2. 391-1 地区遺構出土状況全景（西から）



1. 7号支線 SC06 住居跡出土状況（南西から）



2. 7号支線 SC06 住居跡カマド出土状況（南西から）

## 序

福岡市の西郊に位置する今宿平野は、中国の史書「魏志倭人伝」に記載された「怡土国」の東辺にあたり、弥生時代～古墳時代を通じて多くの集落遺跡や前方後円墳群がよく残されている地域です。

しかしながら、この地域ではJR筑肥線の複線化や大規模区画整理事業の計画などが進行しており、豊かな歴史遺産の保存にも影響を与えつつあります。

福岡市では、このような開発によって失われる埋蔵文化財については記録保存のための発掘調査を実施し、その保護に努めて参りました。

さて本書に収録しましたのは、昭和60年度に「女原地区圃場整備事業」に伴って発掘調査を行いました女原遺跡の1次調査の報告です。

調査から刊行までに長い時間を要しましたが、これも関係各位より頂いた多くのご理解とご協力の賜物であり、心からお礼を申し上げる次第です。

なお、最後になりますが、本書が地域の歴史を理解する上の資料として、また学術報告書として十分に活用していただけましたら幸甚に存じます。

平成21年3月31日

福岡市教育委員会  
教育長 山田 裕嗣

## 例　　言

1. 本書は、昭和60年5月27日から同年8月12日に女原地区圃場整備事業に伴い、発掘調査を行った女原遺跡（西区女原）の第1次調査報告書である。
2. 本書に使用した遺構実測図の作成は、下村　智（現別府大学教授）・横山邦継が行った。また、遺物実測図の作成は、職員の他に調査員 平川敬治が行った。
3. 本書に使用した遺構には記号を付し、竪穴住居跡（SC）・掘立柱建物（SB）・土坑（SK）・溝状遺構（SD）とした。
4. 本書に使用した遺構及び遺物の整図・トレースは、調査員の他、副田則子が行った。
5. 本書で使用した遺構写真は下村が撮影を行った。
6. 本書の編集・執筆は横山が行った。
7. 本書で使用した方位は、磁北である。
8. 本書にかかる図面・写真・出土遺物などの資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵される予定である。
9. 表紙題字は、地元女原在住の三島聖明氏にお願いした。記して感謝いたします。

## 本文目次

|                     |    |
|---------------------|----|
| 第一章 はじめに .....      | 1  |
| 1. 調査に至る経過 .....    | 1  |
| 2. 調査の組織 .....      | 1  |
| 第二章 遺跡の立地と環境 .....  | 3  |
| 第三章 調査の記録 .....     | 5  |
| -概要-                |    |
| 1. 竪穴住居跡 .....      | 6  |
| 2. 堀立柱建物 .....      | 45 |
| 3. 土坑 .....         | 45 |
| 4. 溝状遺構 .....       | 74 |
| 5. 柱穴出土遺物 .....     | 78 |
| 6. 遺構検出面他出土遺物 ..... | 81 |
| 第四章 おわりに .....      | 89 |

## 挿図目次

|  |        |
|--|--------|
| Fig. 1 女原遺跡周辺の遺跡分布図 .....                                  | 3      |
| Fig. 2 女原遺跡調査地点図 (1/5000) .....                            | 5      |
| Fig. 3 女原遺跡第1・2・3次調査遺構全体図 (1/2000) .....                   | (折り込み) |
| Fig. 4 2号支線道路1~3区、6号支線道路1~2区遺構全体図 (1/250) .....            | (折り込み) |
| Fig. 5 2号支線道路4・5区、7号支線道路、8号支線道路、391-1地区遺構全体図(1/250) (折り込み) |        |
| Fig. 6 SC01竪穴住居跡出土状況実測図 (1/50) .....                       | 6      |
| Fig. 7 SC01・04竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3) .....                     | 6      |
| Fig. 8 SC02竪穴住居跡出土状況実測図 (1/50) .....                       | 7      |
| Fig. 9 SC02竪穴住居跡出土遺物実測図 (1) (1/3) .....                    | 7      |
| Fig. 10 SC02竪穴住居跡出土遺物実測図 (2) (1/1) .....                   | 8      |
| Fig. 11 SC03竪穴住居跡出土状況実測図 (1/50) .....                      | 9      |
| Fig. 12 SC03竪穴住居跡出土遺物実測図 (1) (1/3) .....                   | 9      |
| Fig. 13 SC03竪穴住居跡出土遺物実測図 (2) (1/1) .....                   | 10     |

|        |                              |    |
|--------|------------------------------|----|
| Fig.14 | SC04豎穴住居跡出土状況実測図（1/50）       | 10 |
| Fig.15 | SC 04豎穴住居カマド出土状況実測図（1/20）    | 11 |
| Fig.16 | SC 04豎穴住居跡出土遺物実測図（1/2）       | 11 |
| Fig.17 | SC 05豎穴住居跡出土状況実測図（1/50）      | 12 |
| Fig.18 | SC 05豎穴住居カマド出土状況実測図（1/20）    | 13 |
| Fig.19 | SC 05豎穴住居跡出土遺物実測図（1）（1/3）    | 14 |
| Fig.20 | SC05豎穴住居跡出土遺物実測図（2）（1/2・1/1） | 15 |
| Fig.21 | SC06豎穴住居跡出土状況実測図（1/50）       | 16 |
| Fig.22 | SC06豎穴住居カマド出土状況実測図（1/20）     | 17 |
| Fig.23 | SC06豎穴住居跡出土遺物実測図（1）（1/3）     | 18 |
| Fig.24 | SC06豎穴住居跡出土遺物実測図（2）（1/2）     | 19 |
| Fig.25 | SC07豎穴住居跡出土状況実測図（1/50）       | 20 |
| Fig.26 | SC07豎穴住居跡出土遺物実測図（1）（1/3）     | 21 |
| Fig.27 | SC07豎穴住居跡出土遺物実測図（2）（1/3）     | 22 |
| Fig.28 | SC08豎穴住居跡出土状況実測図（1/50）       | 23 |
| Fig.29 | SC08豎穴住居跡出土遺物実測図（1/3）        | 23 |
| Fig.30 | SC09豎穴住居跡出土状況実測図（1/50）       | 24 |
| Fig.31 | SC09豎穴住居跡出土遺物実測図（1/3）        | 25 |
| Fig.32 | SC11豎穴住居跡出土状況実測図（1/50）       | 26 |
| Fig.33 | SC11豎穴住居跡出土遺物実測図（1/3）        | 26 |
| Fig.34 | SC12豎穴住居跡出土状況実測図（1/50）       | 27 |
| Fig.35 | SC12豎穴住居跡出土遺物実測図（1/3）        | 28 |
| Fig.36 | SC13豎穴住居跡出土状況実測図（1/50）       | 28 |
| Fig.37 | SC13豎穴住居跡出土遺物実測図（1/3）        | 28 |
| Fig.38 | SC14豎穴住居跡出土状況実測図（1/50）       | 29 |
| Fig.39 | SC14豎穴住居跡出土遺物実測図（1）（1/3）     | 29 |
| Fig.40 | SC14豎穴住居跡出土遺物実測図（2）（1/2）     | 30 |
| Fig.41 | SC15豎穴住居跡出土状況実測図（1/50）       | 31 |
| Fig.42 | SC15豎穴住居カマド出土状況実測図（1/20）     | 32 |
| Fig.43 | SC15豎穴住居跡出土遺物実測図（1）（1/3）     | 33 |
| Fig.44 | SC15豎穴住居跡出土遺物実測図（2）（1/3）     | 34 |
| Fig.45 | SC15豎穴住居跡出土遺物実測図（3）（1/2）     | 35 |
| Fig.46 | SC16豎穴住居跡出土状況実測図（1/50）       | 36 |
| Fig.47 | SC16豎穴住居カマド出土状況実測図（1/20）     | 36 |
| Fig.48 | SC16豎穴住居跡出土遺物実測図（1/3）        | 36 |
| Fig.49 | SC17豎穴住居跡出土状況実測図（1/50）       | 37 |
| Fig.50 | SC17豎穴住居跡出土遺物実測図（1/3・1/2）    | 37 |
| Fig.51 | SC18豎穴住居跡出土状況実測図（1/50）       | 38 |
| Fig.52 | SC18豎穴住居跡出土遺物実測図（1/3）        | 38 |
| Fig.53 | SC19豎穴住居跡出土状況実測図（1/50）       | 39 |

|        |  |    |
|--------|--|----|
| Fig.54 | SC19竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）                        | 39 |
| Fig.55 | SC20竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）                       | 40 |
| Fig.56 | SC20竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）                        | 40 |
| Fig.57 | SB01掘立柱建物出土状況実測図（1/50）                       | 41 |
| Fig.58 | SB01掘立柱建物出土遺物実測図（1/1）                        | 41 |
| Fig.59 | SK01土坑出土状況実測図（1/40）                          | 42 |
| Fig.60 | SK01土坑出土遺物実測図（1/3・1/2）                       | 43 |
| Fig.61 | SK02・03・04・06・07・08土坑出土状況実測図（1/30）           | 44 |
| Fig.62 | SK02・04・11・12・13土坑出土遺物実測図（1/3・1/2）           | 46 |
| Fig.63 | SK05土坑出土状況実測図（1/30）                          | 47 |
| Fig.64 | SK09・10・11・12土坑出土状況実測図（1/30）                 | 48 |
| Fig.65 | SK13・14・18・19・20・23土坑出土状況実測図（1/30）           | 49 |
| Fig.66 | SK15土坑出土状況実測図（1/30）                          | 50 |
| Fig.67 | SK15・16・17・18・20・21土坑出土遺物実測図（1/3・1/2・1/1）    | 52 |
| Fig.68 | SK16土坑出土状況実測図（1/50）                          | 53 |
| Fig.69 | SK17土坑出土状況実測図（1/40）                          | 54 |
| Fig.70 | SK21・22・26土坑出土状況実測図（1/30）                    | 55 |
| Fig.71 | SK19・22・23・25・29土坑出土遺物実測図（1/3・1/2・1/1）       | 56 |
| Fig.72 | SK24土坑出土状況実測図（1/40）                          | 57 |
| Fig.73 | SK25土坑出土状況実測図（1/30）                          | 58 |
| Fig.74 | SK27・28土坑出土状況実測図（1/30）                       | 59 |
| Fig.75 | SK29土坑出土遺物実測図（1/40）                          | 60 |
| Fig.76 | SK30土坑出土状況実測図（1/30）                          | 61 |
| Fig.77 | SK30土坑出土遺物実測図（1）（1/3）                        | 62 |
| Fig.78 | SK30土坑出土遺物実測図（2）（1/3）                        | 63 |
| Fig.79 | SK30土坑出土遺物実測図（3）（1/1）                        | 64 |
| Fig.80 | SK31土坑出土状況実測図（1/40）                          | 65 |
| Fig.81 | SK32・36・42土坑出土状況実測図（1/30）                    | 66 |
| Fig.82 | SK33土坑出土状況実測図（1/40）                          | 67 |
| Fig.83 | SK31・32・33土坑出土遺物実測図（1/3・1/2・1/1）             | 68 |
| Fig.84 | SK34・35土坑出土状況実測図（1/30）                       | 69 |
| Fig.85 | SK37・38土坑出土状況実測図（1/30・1/40）                  | 70 |
| Fig.86 | SK39・40・41土坑出土状況実測図（1/30）                    | 71 |
| Fig.87 | SK35・36・37・40・41土坑出土遺物実測図（1/3・1/2）           | 72 |
| Fig.88 | SK42土坑出土遺物実測図（1/3・1/2）                       | 73 |
| Fig.89 | SD01溝東壁土層断面図（1/20）                           | 74 |
| Fig.90 | SD01～03・07・08・10～14溝出土遺物実測図（1/3・1/2）         | 75 |
| Fig.91 | 2号支線道路・6号支線道路・7号支線道路・SP出土遺物実測図（1）（1/3・1/2）   | 77 |
| Fig.92 | 7号支線道路・391-1地区SP出土遺物実測図（2）（1/3・1/1）          | 78 |
| Fig.93 | 2号支線道路・6号支線道路・7号支線道路・391-1地区遺構確認面他出土遺物実測図（1） |    |

|   |    |
|---|----|
| (1/3・1/2) .....                         | 79 |
| Fig.94 遺構確認面他出土遺物実測図(2) (1/3・1/2) ..... | 80 |
| Fig.95 各区遺構確認面出土遺物実測図(3) (1/1) .....    | 82 |
| Fig.96 各区遺構確認面出土遺物実測図(4) (1/2) .....    | 83 |

## 図版目次

PL. 1 女原遺跡遠望（南から）

PL. 2

1. 2号支線1区全景（北から）
2. 2号支線3区全景（北から）

PL. 3

1. 2号支線4区全景（南から）
2. 2号支線5区全景（北から）

PL. 4

1. 7号支線全景（西から）
2. 391-1地区全景（西から）

PL. 5

1. SC01住居跡出土状況（2号支線3区）（北から）
2. SC02住居跡出土状況（2号支線3区）（北東から）
3. SC02住居跡出土状況（2号支線3区）（北西から）
4. SC03住居跡、SD07溝、SK20土坑出土状況（2号支線3区）（南から）
5. SC04・05住居跡出土状況（7号支線）（南から）
6. SC04・05住居跡出土状況（7号支線）（北西から）

PL. 6

1. SC04住居跡カマド出土状況（7号支線）（南から）
2. SC05住居跡カマド出土状況（7号支線）（南から）
3. SC06住居跡出土状況（7号支線）（北西から）
4. SC06住居跡出土状況（7号支線）（南西から）
5. SC06住居跡カマド出土状況（7号支線）（南西から）
6. SC07住居跡出土状況（7号支線）（北西から）

PL. 7

1. SC07・12住居跡出土状況（7号支線）（南西から）
2. SC07住居跡遺物出土状況（7号支線）（北西から）
3. SC08住居跡出土状況（7号支線）（北東から）
4. SC09住居跡遺物出土状況（7号支線）（北から）
5. SC09住居跡出土状況（7号支線）（西から）

6. SC09住居跡出土状況（7号支線）（北から）

PL.8

1. SC12住居跡出土状況（7号支線）（北東から）
2. SC13住居跡出土状況（2号支線4区）（南東から）
3. SC14住居跡出土状況（2号支線4区）（東から）
4. SC15住居跡出土状況（2号支線4区）（東から）
5. SC15住居跡カマド出土状況（2号支線4区）（南から）
6. SC16住居跡出土状況（2号支線4区）（南東から）

PL.9

1. SC16住居跡カマド出土状況（2号支線4区）（南西から）
2. SC17住居跡出土状況（2号支線4区）（南東から）
3. SC18住居跡出土状況（2号支線4区）（南から）
4. SC19住居跡出土状況（2号支線5区）（北東から）
5. SC20住居跡出土状況（391-1地区）（東から）
6. SC20住居跡出土状況（391-1地区）（南から）

PL.10

1. SK01土坑出土状況（2号支線1区）（南西から）
2. SK05土坑出土状況（2号支線1区）（南から）
3. SK07土坑出土状況（2号支線1区）（北東から）
4. SK08土坑出土状況（2号支線1区）（南から）
5. SK09土坑出土状況（2号支線1区）（西から）
6. SK10土坑出土状況（2号支線1区）（北から）

PL.11

1. SK11土坑出土状況（2号支線2区）（西から）
2. SK13土坑出土状況（2号支線2区）（西から）
3. SK21土坑出土状況（2号支線3区）（南から）
4. SK22土坑出土状況（2号支線3区）（北から）
5. SK23土坑出土状況（2号支線3区）（北から）
6. SK32土坑出土状況（391-1地区）（南から）

PL.12

1. SK37土坑出土状況（6号支線1区）（西から）
2. SK41土坑出土状況（6号支線2区）（北から）
3. SP08小土坑出土状況（2号支線1区）（北東から）
4. SP04・05小土坑出土状況（2号支線1区）（東から）
5. SK24土坑・SD07溝出土状況（2号支線3区）（南から）

PL.13

1. SK01土坑・SD01溝出土状況（2号支線1区）（南から）
2. SD01溝東壁土層断面（2号支線1区）（西から）

PL.14

1. 6号支線2区全景（南から）

2. 8号支線全景（東から）

## 表 目 次

Tab.1 女原遺跡調査一覧

Tab.2 検出遺構一覧

# 第一章 はじめに

## 1. 調査に至る経過

昭和 59 年 4 月 1 日付で教育委員会文化部文化課に農林水産局農業振興課より西区大字今宿女原地区的圃場整備計画についての事前審査願いが提出され、同対象地について埋蔵文化財の有無について協議を重ねた。その結果、対象地は文化財分布地図には周知の遺跡として登録はされていないが、周辺の遺跡分布状況から試掘調査を行い判断する事が必要とされた。

これに基づき、昭和 59 年 12 月 17・19 日の両日に試掘調査を実施し、全域の遺跡の有無について把握に努めた。なお、対象地は高祖山系から北側に派生する低丘陵に挟まれた谷部であり、南側から北側へ緩く傾斜する地形にあり、水田が棚田となっている。また、南・北地点の比高差は約 20m を測る。試掘調査は、対象地に試掘溝を設けて遺構の探査にあたった。最も低い北端部（第 1・2 トレンチ）と中部（第 3～6 トレンチ）及び最も高い南端部（第 7 トレンチ）の 7 本のトレンチである。以下簡単に成果を記す。第 1 トレンチでは、深さ 0.5 ～ 1m で砂礫層が現れ、東から西へ傾斜する。遺構・遺物の検出は無い。層位は、耕作土一床土一暗灰色土一黒色粘質土一砂礫層となる。

また、第 2 トレンチは、第 1 トレンチの状況とほぼ同じである。中央部が窪み、谷部を形成する。

次に第 3 トレンチは、深さ 0.4 ～ 0.5m で径 30 ～ 40cm の柱穴 2 個が検出された。地山は黄灰色粘質土である。古墳時代～古代の所産と考えられるが、出土遺物が無く、時期は不明である。層位は、耕作土一床土一黄灰色砂層一黄灰色粘質土となる。

次に第 4 トレンチでは、トレンチ全面より柱穴・土坑・住居跡が多く検出された。柱穴は、径 20 ～ 40cm で、土坑は径 1m を超えるものもある。土師器・須恵器が出土し、古墳時代と考えられる。深さ 55 ～ 75cm で検出される。基盤層は、黄褐色砂質土である。層位は、耕作土一床土一茶褐色砂質土一黄褐色砂質土となる。

次に第 5 トレンチでは、全域より柱穴・土坑・溝・住居跡等の遺構が多く検出された。深さ 43cm で遺構は検出される。第 4 トレンチと同一時期と考えられる。

次に第 6 トレンチでは、東寄りに柱穴・土坑が検出される。東から西へ傾斜し、西端では深さ 1m を測る。

次に最南端の第 7 トレンチでは、全体に少數の柱穴が検出された。深さ約 80cm で遺構が検出される。第 3 ～ 6 トレンチの遺構とは理上がりが異なり、黄褐色粘質土である。出土遺物は無いが、中世の遺構と考えられる。層位は、耕作土一床土一黄褐色土一黒褐色砂質土一灰白色砂層一黄褐色粘質土となる。

以上のような試掘成果から、対象地には古墳～中世期にかけての遺構が主に中部～南端部付近に遺存することが明らかとなった。このため事業の実施にあたって失われるこれらの文化財の保存について担当部局及び圃場整備組合と協議を行った結果、新設道路及び一部圃場部分約 3,000 m<sup>2</sup>について本格調査を実施し、記録保存を行うこととなった。

なお、本格調査は、昭和 60 年 5 月 27 日から開始し、途中、梅雨も活発であり、調査に難渋することもあったが、同 8 月 12 日に無事に終了した。

## 2. 調査の組織

調査委託 農林水産局農地整備課

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 佐藤善郎

**調査総括** 埋蔵文化財課長 柳田純孝  
 埋蔵文化財第一係長 折尾 學  
**調査庶務** 埋蔵文化財第一係 岸田 隆  
**調査担当** 試掘調査担当 松村道博、山崎能雄、調査担当 横山邦継、下村 智  
**調査補助** 大庭友子  
**調査作業** 池田由美、鬼尾喜代子、鬼丸邦宏、平田信吉、池 弘子、柴田シズノ、柴田タエ子、  
 清水文代、杉村文子、瀧良子、筒井ひとみ、富永順子、中島栄子、中牟田サカエ、  
 西嶋タミエ、西嶋初子、能美八重子、野坂三恵子、原 早苗、平田政子、藤野ふじ子、  
 古井モモエ、松本愛子、松本マサ子、宮原富代、森友ナカ、柳井順子、山下サノエ、  
 吉岡アヤ子、吉岡タケ子、吉積ミエ子  
**整理調査員** 平川敬治  
**整理作業員** 副田則子、松田弘子、花田友美子

Tab. 1 女原遺跡調査一覧

| 次 数 | 調査番号 | 所 在 地          | 調査面積(m) | 調査期間            | 概 要     | 報告書  |
|-----|------|----------------|---------|-----------------|---------|------|
| 1   | 8517 | 西区女原 395 他     | 3,000   | 850527 ~ 850812 | 古墳・中世集落 | 1053 |
| 2   | 8626 | 西区女原           | 2,270   | 860714 ~ 860904 | 古墳集落    | 未刊   |
| 3   | 8660 | 西区大字女原         | 5,550   | 861110 ~ 871031 | 古墳・中世集落 | 224  |
| 4   | 8720 | 西区女原           | 8,000   | 870701 ~ 870710 | 古墳集落    | 224  |
| 5   | 9746 | 西区女原ムロ 279 - 1 | 250     | 971008 ~ 971027 | 弥生・古墳集落 | 616  |
| 6   | 0625 | 西区大字女原         | 2,580   | 060614 ~ 061101 | 古墳集落    | 1010 |

## 第二章 遺跡の立地と環境

女原遺跡は、福岡市西郊から前原市にかけて東西に延びる高祖山山麓の北側一帯に広がる今宿平野の西端近くに位置する。(Fig.1)

この今宿平野は、南部の裾部を高祖山から北側に派生する小支脈に区切られた多くの谷地形を形成し、また北部の今津湾沿岸には砂丘が発達しており、近世期以前では砂丘の南側は山麓近くまで湿地がしめる地形であったが、弥生時代以降の多くの遺跡群が残されている。

今宿平野は歴史的には広義の糸島平野の東部を占める位置にあり、弥生時代から伊都国領域であったと理解される。分布する各時期の遺跡を見てみよう。

弥生時代では、遺跡の北側 3.5km に前期末～中期にわたって九州北部を中心に玄武岩製の太形船刃石斧を製作・移出し続けた今山遺跡（17）がある。本遺跡は、標高 80m 余を測る独立丘陵に立地し、全山玄武岩である。その製作素材には剥落母岩や転疊を利用し、打削整形→敲打→研磨の製作工程を丘陵の斜面や裾部に多くのアトリエを設けて行っている。従って当該期の周辺弥生時代集落から出土する磨製石斧の殆どを今山産が占めると言える。

また、製作活動に対してもたらされたものか遺跡東南側に広がる砂丘上のいくつかの墓地の中には細形銅劍を副葬した墳墓も知られる。

また、北東側 2km には今宿五郎江遺跡（12）がある。最近の調査では微高地上に弥生時代後期の環濠集落の存在が明らかとなった。内部には掘立柱建物を中心とする建物群やガラス・青銅器の鋳造を示す遺物が出土し、以前調査でも小銅鐸の出土が知られており、後期の伊都国集落構成の一端を



Fig.1 女原遺跡周辺の遺跡分布図

示すものとして興味深い。また、最近、JR筑肥線複線化に伴う発掘調査では、東部の長垂丘陵の西側七寺川左岸の砂丘上で供獻の小壺を伴う弥生時代前期の木棺墓主体の墓地が知られる。

次に古墳時代の今宿平野では、伊都国の大奥津城とも言う事の出来るほど多くの古墳群が顯著に造営される。特に東端部は長垂丘陵の南麓に当たる錦崎古墳（15）から最西端に位置し、古墳群中で最大の丸隈山古墳（5）までの間の前方後円墳は消滅を含めて計13基を数える。この中、前～中期では、派生する低丘陵上に築かれた舟形木棺を主体とし、三角縁神獸鏡・短甲を伴う若八幡宮古墳（9）、その北側に位置する山ノ鼻1号墳（9）、削石積みの竪穴系横口式石室に箱式石棺を埋置する丸隈山古墳、内部主体は未調査であるが、埴輪列や周堤帶が特徴的な大塚古墳、九州では最古とされる竪穴系横口式石室をもつ鈴崎古墳等がある。そして山腹近くのには谷上古墳など横穴式石室を内部主体とする小型の前方後円墳が知られる。また、これに続く後期には、13～15群からなる群集墳約350基以上が形成されており、これらは4世紀後半から6世紀後半までの連続する大古墳群となっている。

また、この古墳群に対応する集落も古墳時代後期を主に狹隘な谷に沿って検出される。

次に古代～中世では、太宰府政府の船舶を所管する機関の主船司が置かれたとされる周船寺周辺で、徳永A遺跡（6）や徳永B遺跡（8）などで越州青磁などの出土が知られるほか、五郎江遺跡では古代掘立柱建物が検出されている。また、青木遺跡（14）で中世の掘立柱建物・土塙墓、五郎江遺跡でも11世紀中頃～13世紀中頃の柱穴・井戸跡・土塙墓などが見つかっており、有力な集落が点在していたことが知られる。

#### （関係遺跡既刊報告書）

- (5)「丸隈山古墳」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第10・142・479集」1970・1986・1996年 福岡市教育委員会
- (6)「徳永A遺跡」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第306・479・583集」1992・1996・1998年 福岡市教育委員会
- (9)「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第2集」1971年 福岡県教育委員会
- (12)「今宿五郎江遺跡」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第132・238・479・737・872・924・1009集」1986・1991・1996・2003・2006・2007・2008年 福岡市教育委員会
- (14)「青木遺跡」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第169・350・583・734集」1987・1993・1998・2003年 福岡市教育委員会
- (15)「鈴崎古墳」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第112・506・697集」1984・1997・2001年 福岡市教育委員会
- (17)中山平次郎「今山の石斧製作址」福岡県史跡名勝天然記念物調査報告書第6集 1969年  
浜田昌治「今山遺跡第5・6地点発掘調査を終えて」1980年  
下條信行「今山遺跡」「福岡市歴史史料館調査研究報告」（市埋文報告22集）1973年  
「今山遺跡」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第75・534・835集」1981・1997・2005年  
福岡市教育委員会

### 第三章 調査の記録

**一概要一** 今回調査は、女原遺跡の南西側を調査したこととなるが、時代的には弥生時代から中世期にかけてであり、遺構では方形～長方形竪穴住居跡 19 軒、掘立柱建物 1 棟、不整形土坑 42 基、溝状遺構 14 条、柱穴群等である。住居跡の分布は遺構全体図 (Fig.5) に見る如く南西側の 2 号・7 号支線道路の調査区に集中している。一部に 5 世紀代のものが混じるが、大半が 6 世紀後半の古墳時代後期の集落である。また、建物などの明らかな遺構は検出出来ないが、廃棄土坑や溝状構及び相伴する輸入陶磁器から 12 ～ 13 世紀の有力集落の存在が明らかである。

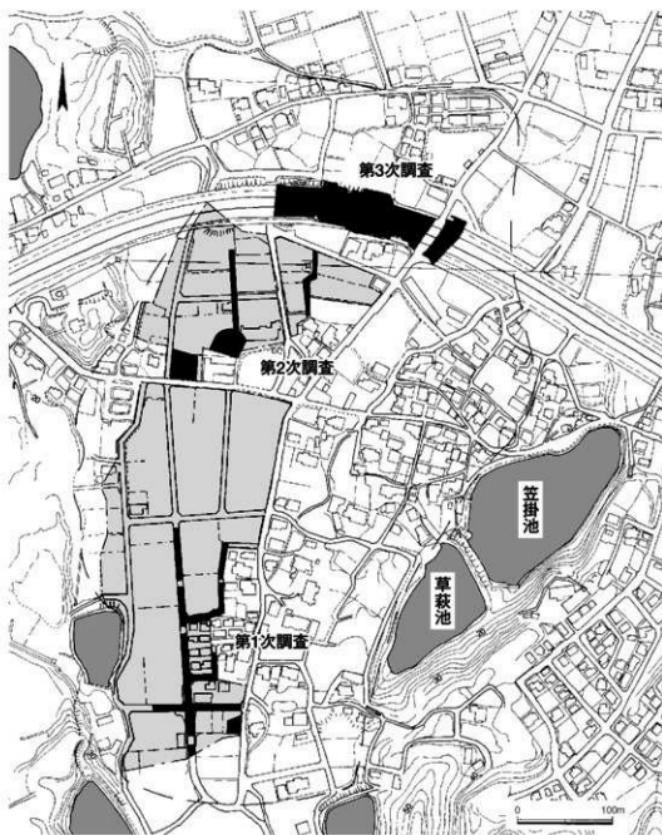


Fig.2 女原遺跡調査地点図 (1/5000)

## 1. 壁穴住居跡 (Fig.4 ~ 56、PL.2 ~ 9)

**概要** 壁穴住居跡は、調査区の南端部にあたる7号支線道路・2号支線道路の調査区を中心に計19軒が検出された。2号支線道路3区で3軒(SC01~03)、同4区で6軒(SC13~18)、同5区で1軒(SC19)の計10軒である。また、7号支線道路で8軒(SC04~12)、391-1地区で1軒(SC20)である。住居の平面形は、長方形～不整形をなし、カマドは北壁に集中して付設されている。また、時期的には、須恵器を伴う6世紀後半代のものが多く知られる。

### SC01 住居跡 (Fig.4・6・7、PL.5)

本住居跡は、2号支線道路3区の南端近くで検出された方形～長方形プランの住居と考えられる。壁面及び床面を後世の耕作による畝溝によって削平されている。コーナーは明瞭ではないが、西辺長

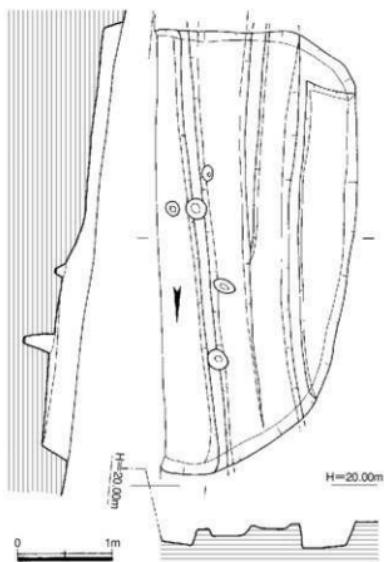


Fig.6 SC01 壁穴住居跡出土状況実測図 (1/50)

4.5m前後、南辺長2.1m以上を測る。壁高は、良く残る中央部で0.2~0.3mである。埋土内からは多数の土師器甕片と共に土師器高壺、須恵器杯身などの遺物が出土した。

### 出土遺物 (Fig.7)

00001は、小形の須恵器杯身である。受け部の立ち上がりは低く、内傾している。器面調整は、底部の下半部に回転ヘラケズリを施す。他はヨコナデである。器色は、外面が暗灰色で、内面は青色を呈する。胎土には石英・長石粒を若干混入し、焼成は堅緻である。復原受け部径は14cmを測る。

00002は、土師器高壺の杯部破片である。杯部は浅く、口縁部は緩く外方に伸びる。器面調整は、荒れのために不明である。器色は、内外面共にぶい橙色を呈する。胎土には石英・長石粒を多量に混入する。焼成は、堅緻である。復原口径13cm、残存高3cmを測る。00003は、大型の土師器甕である。胴部以下を失う。器面調整は、荒れのために詳細は不詳であるが、内外面共に荒いハケメ調整を施す。器色は、内外面共にぶい橙色を呈する。胎土は、密であり、

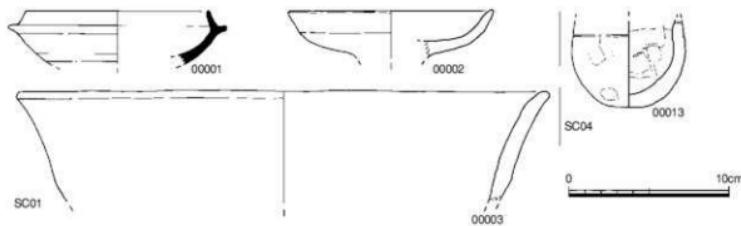


Fig.7 SC01・04 壁穴住居跡出土遺物実測図 (1/3)

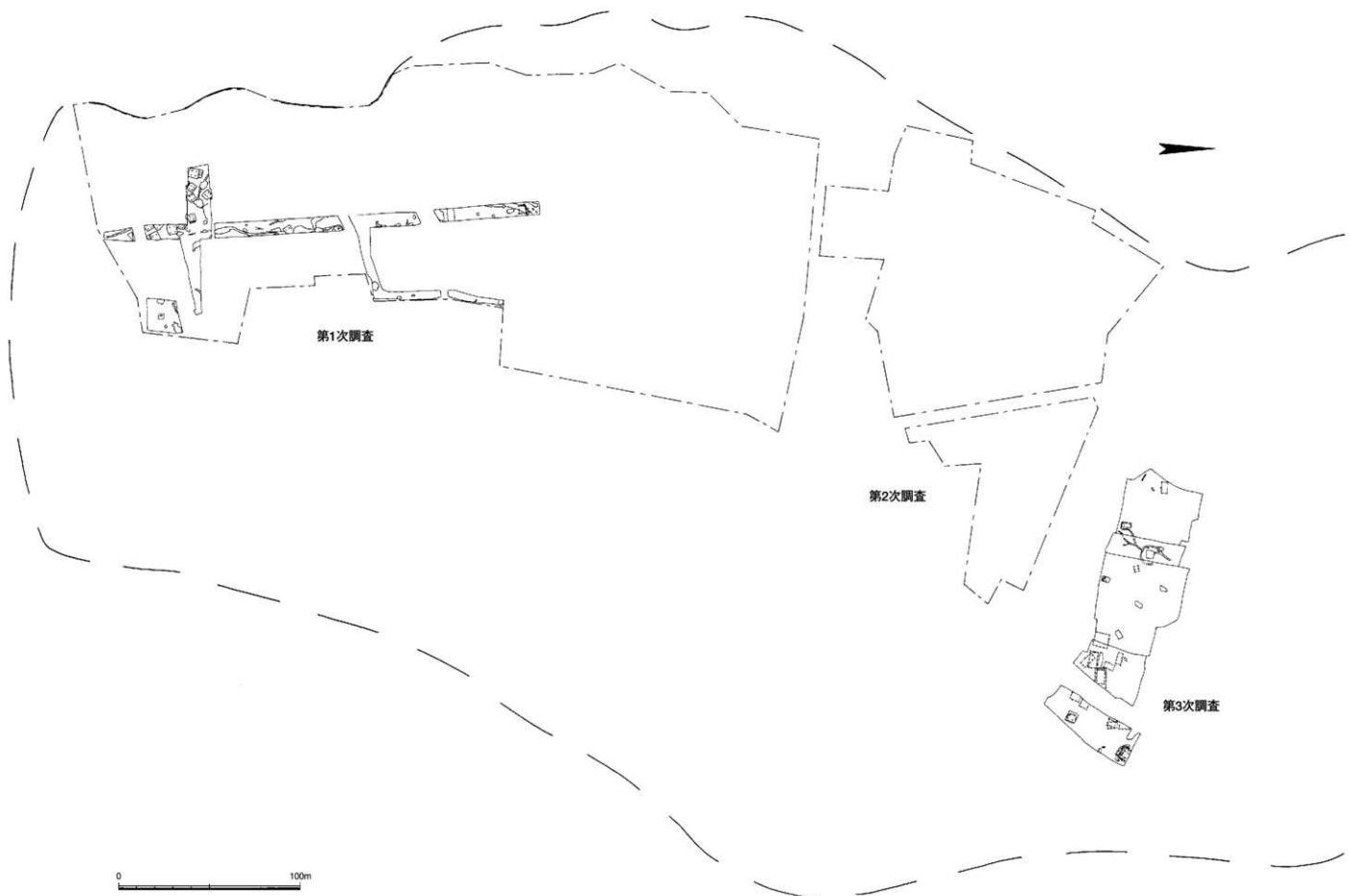
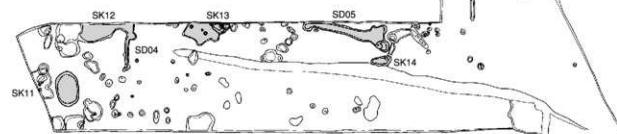
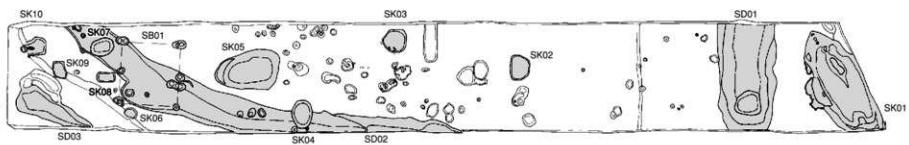
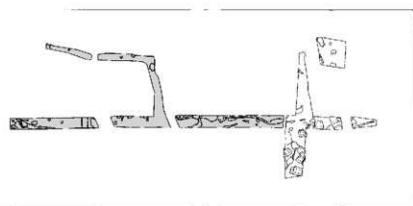
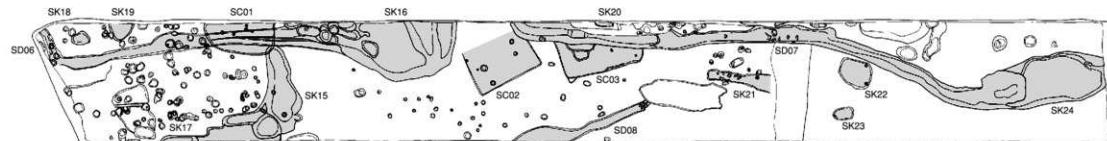


Fig.3 女原遺跡第1・2・3次調査遺構全体図 (1/2000)



2号支線道路3区



0 10m

Fig.4 2号支線道路1~3区、6号支線道路1~2区遭構全体図 (1/250)



Fig.5 2号支線道路4・5区、7号支線道路、8号支線道路、391—1地区遺構全体図(1/250)

焼成も堅緻である。復原口径は34cmを測る。本住居はこれらの出土遺物から6世紀後半の時期と考えられる。

#### SC02 住居跡 (Fig.8 ~ 10、PL.5)

本住居跡は、2号支線道路3区の中程で検出された長方形プランの住居跡である。東半部壁を失うが、西壁長4.6m、北壁長3m以上、南壁長1.8m以上を残す。また、壁高も残りが悪く、西壁0.3m・北壁0.15m・南壁0.25mを測る。住居跡床面には北壁寄りに2ヶ所に炭化物の集中する部分が見られる。また、

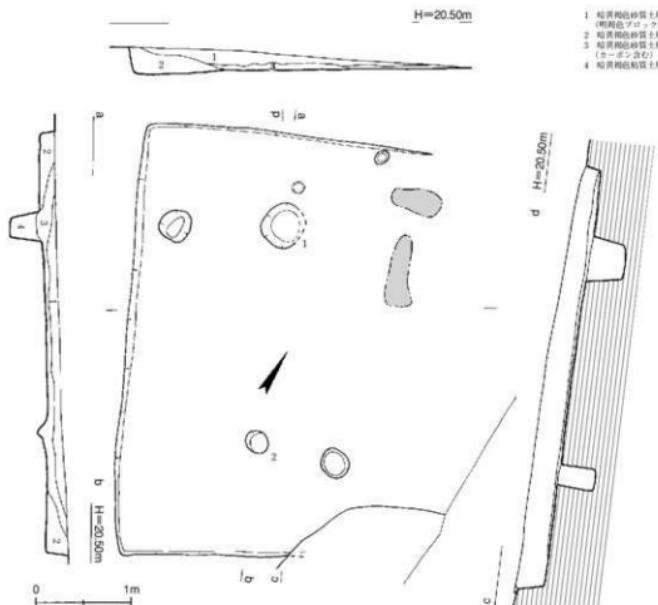


Fig.8 SC02 墓穴住居跡出土状況実測図 (1/50)

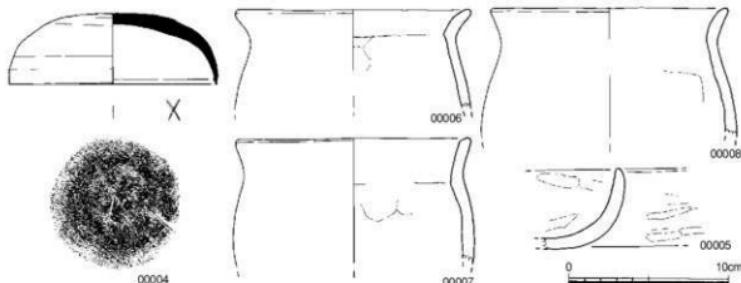


Fig.9 SC02 墓穴住居跡出土遺物実測図 (1) (1/3)

埋土は3層に区別出来るが、床面直上の第3層はカーボン混じりの暗黄褐色砂質土が全面に広がる。また、主柱穴は西壁に並行する2本が認められる。主柱穴1は $0.45 \times 0.4m$ の不整円形をなし、深さ0.40mを測る。主柱穴2は径0.28mの円形をなし、深さ0.40mを測るサイズである。両柱穴間は心身で2.35mを測り、西壁端からはほぼ1.5m、北壁からは0.95m、南壁からは1.15mの位置に配置されている。

住居跡の埋土中からは多数の土師器甕類の破片が多く出土したほか、土師器盤や須恵器搗杯蓋、混入遺物に磨製石斧・二次加工のある剥片が見られる。

#### 出土遺物 (Fig.9・10)

00004は、須恵器杯蓋である。半球状の天井部をなし、細い口縁部の内側に小さい段を有する。調整は、天井部の上端付近に回転ヘラケズリを施し、他はヨコナデ調整である。ロクロは時計回りである。天井部の内面に「×」印のヘラ記号を残す。器色は、内外面共に暗青灰色～青灰色を呈する。胎土には石英・長石粒を少量混入する。焼成は堅緻である。復原口径は15.2cm、器高4.5cmを測る。

00005は、土師器盤小破片である。口縁部は内湾気味に立ちあがる。器面調整は、荒れのために

明瞭ではないが、内外面共にヨコ・ナナメ方向のヘラナデと考えられる。器色は、外面が橙色で、内面はにぶい橙色を呈する。胎土は密で、石英・長石と僅かに雲母を混入する。焼成は堅緻である。

00006は、口縁部が短く「く」字形に屈曲する土師器の小形甕である。器面調整は、荒れのために外面および口縁部内面は不明であるが、胴部内面にナナメ方向のヘラケズリが残る。器色は、外面が淡赤褐色、内面で黒褐色を呈する。また、胎土には石英・長石粒を若干混入する。焼成は堅緻である。00007も土師器甕破片である。差々直線的に立ちあがる口縁部を有し、胴部のふくらみは小さい。器面調整は、荒れのために外面及び口縁部内面が不詳であるが、胴部内面の口縁との境に指オサエが認められる。器色は、外面が灰褐色で、内面灰白色を呈する。また、胎土には石英・長石粒を多量に混入する。焼成は堅緻である。復原口径は15cmを測る。00008も土師器甕破片である。口縁と胴部の境が不明瞭な甕である。器面調整は、外面と口縁部内面が荒れのために不詳であるが、胴部内面にヨコ方向のヘラケズリを加える。器色は、外面が赤橙色で、内面は褐色を呈する。また、

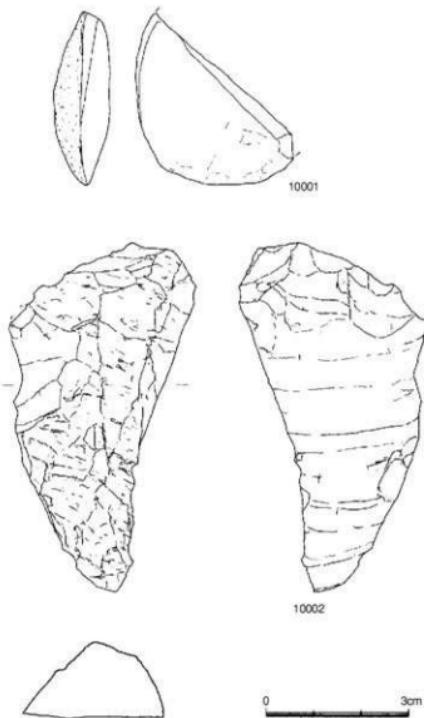


Fig.10 SC02 穫穴住居跡出土遺物実測図 (2) (1/1)

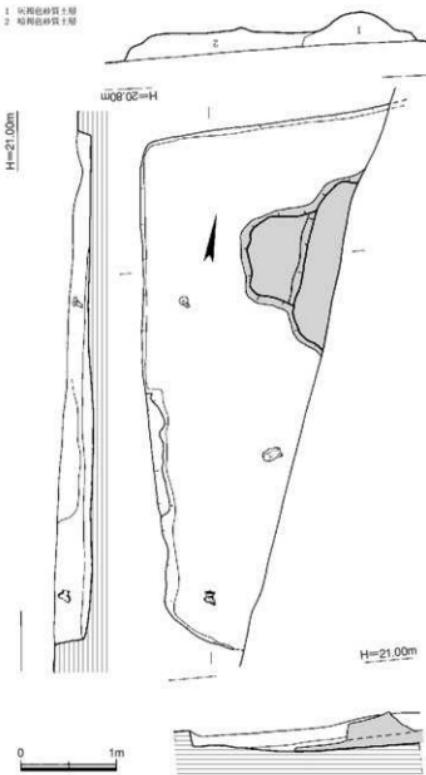


Fig.11 SC03 穫穴住居跡出土状況実測図 (1/50)

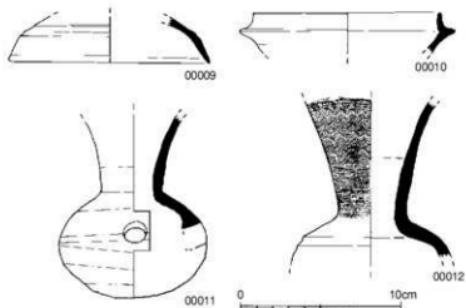


Fig.12 SC03 穫穴住居跡出土遺物実測図 (1) (1/3)

胎土には石英・長石粒を若干混入する。焼成も堅緻である。復原口径は 15.2cm を測る。

次に 10001 は、太形蛤刃石斧の刃部付近の小破片と考えられる。敲打痕を残す。玄武岩製。

10002 は、縦長剥片の打瘤付近や側辺部及び裏面の頭部・側辺部に荒いリタッチを加える。法量は、長さ・幅・厚さが  $7.3 \times 4 \times 1.7$  cm、重さ 36.87g を測る。サスカイト製。

これらの出土遺物から本住居跡は 6 世紀後半の時期と考えられる。

#### SC03 住居跡 (Fig.4・11～13, PL.5)

本住居跡は、2号支線道路 3 区のほぼ中央で検出された長方形プランの住居跡である。住居の東半部は、中世溝 SD07 によって切られており、壁を失っている。壁は、西壁が残り、辺長 5m を測る。また、北壁は 2.6m、南壁 1m が残る。壁高は、南壁が 0.35m、北壁・西壁 0.15m を残す。床面では主柱穴は確認出来ない。北壁近くには東西 1m 以上・南北 2m の範囲に粘土塊が残る。

住居跡の埋土中からは上師器甕破片や須恵器杯蓋や身、ハソウ、磨製石斧破片などが出土した。

#### 出土遺物 (Fig.12・13)

00009 は、天井部の低い須恵器杯蓋である。外方に広がる口縁部をもち、天井部との境には浅い横沈線を巡らす。器面調整は、内外面共にヨコナデを施す。器色は、内外面共に青色を呈する。胎土には石英微粒子を少量混入する。焼成は堅緻である。復原口径は 12.8cm を測る。

00010 は、須恵器杯身である。全体に細造りで、受け部の立ちあがりは低く、反転気味に立ちあがる。器面の調整は、内外面共にヨコナデを施す。ま

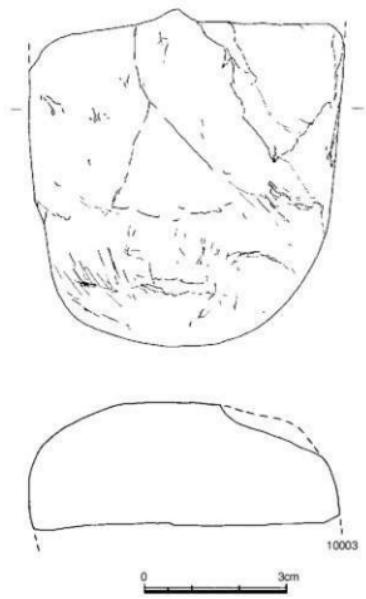


Fig.13 SC03 竪穴住居跡  
出土遺物実測図 (2) (1/1)

居跡と重複し、これに先行する時期の所産である。全体の 1/2 以上を失い、南壁は完全に窓えない。北壁のコーナーはしっかりとおり、中央部に作り付けのカマドを配置する。

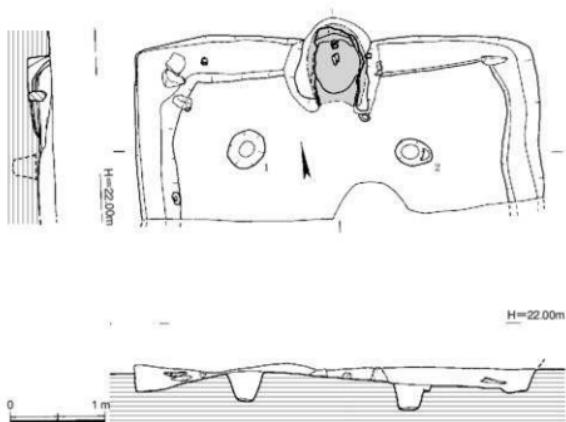


Fig.14 SC04 竪穴住居跡出土状況実測図 (1/50)

- 10 -

た、器色は、内外面共に灰白色を呈する。胎土には黒色微粒子・石英・長石粒を少量混入する。焼成は堅緻である。復原口径は、13.8cm を測る。00011は、半球状の胴部をもつ須恵器ハソウである。口縁端部を失う。胴部は肉厚で、下半部に回転ヘラケズリを加える。他は内外面共にヨコナデを施す。器色は、外面が暗灰色で、内面が青灰色を呈する。胎土には石英・長石粒を少量混入する。胴部最大径は 9.4cm、残存高 11.6cm を測る。00012は、頸部に波状文をもつ須恵器ハソウ破片である。胴部は、下半を失うが、肩部に浅く、幅広の横沈線を巡らす。頸部は上端を欠失するが口縁に向かってラッパ状に開く形態である。また、器面の調整は、内外面共にヨコナデであるが、頸部外面には荒いカキ目調整後に緩い波状文が描かれる。器色は、外面が紫灰～灰色で、内面で灰～灰白色を呈する。胎土は密で、黒色微粒子を含む。焼成は堅緻である。頸部径は 4.4cm を測る。10003は、太形蛤刃石斧の刃部破片である。使用によるものか片面が破損している。玄武岩製。以上の出土品から本住居の時期は、6世紀後半と考えられる。

#### SC04 住居跡 (Fig.5・7・14～16, PL5・6)

本住居跡は、7号支線道路西端で検出された長方形プランの住居跡である。南側に隣接するSC05 住

居跡の規模は、北壁が 4.2m で完存し、東壁 1.65m 以上・西壁 1.7m 以上を測る。また、壁高は、ほぼ 0.2m 程度を残す。

また、壁直下には幅 0.4m 程度で、浅い壁溝が巡らされる。床面では、北壁に並行して 2 本の主柱穴が認められる。主柱穴 1 は、0.4 × 0.35m、深さ 0.35m 規模の長円形掘方をもつ。主柱穴 2 は、0.4

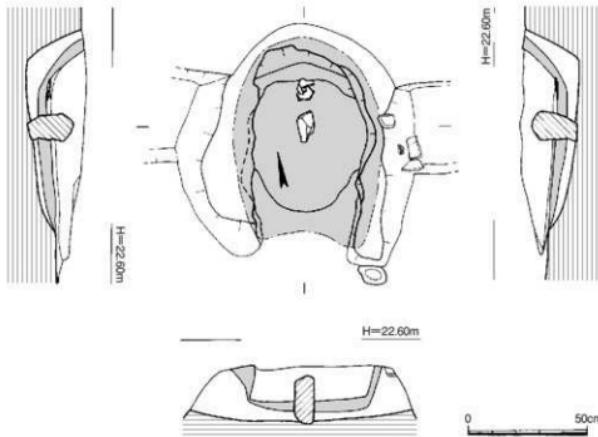


Fig.15 SC04 穫穴住居カマド出土状況実測図 (1/20)

× 0.25m、深さ 0.25m 規模の長円形掘方をもつもので、両柱の心身間の距離は 1.7m を測る。また、北壁端からは 1.2m で、東・西壁からも同様な距離に配置されている。

#### カマド (Fig.15)

北壁の中央にしつらえられたカマドは、製作にあたって壁の延長線上から更に 0.25m

程北側に食い込んだ掘方を行い、全体軸長 0.8m、幅 0.5m 規模の長円形をなす。これに粘土塊をもって袖部をつくっており、全体で焚き口から奥壁まで約 1m、最大幅 0.8m 規模となる。更に燃焼部は、長さ 0.7m・幅 0.5m の規模で、その中央に花崗岩角砾を垂直に立てて煮沸壺の支脚としている。燃焼部とカマド周辺には二次焼成を受けた少量の土師器破片が出土したが、原位置を保つものは無かった。

#### 出土遺物 (Fig.7・16)

住居跡に伴う遺物類で団化の可能なものは少なく、土師器 1 点とカマドの支脚に使用された花崗岩角柱のみである。00013 は、土師器の鉢形手捏ね土器である。口縁端部を失う。器面の調整は、荒れのために不明瞭であるが、内外面共に指痕痕が痕跡的に残される。器色は、外面が褐灰～明灰褐色で、内面が明褐灰色を呈する。胎土には石英・長石粒を多量に混入する。焼成は堅緻である。復原胴部径は 7.2cm を測る。

10004 は、カマドの支脚として火床に据えられた花崗岩の角柱である。細くとがった方が下部で、頭部の幅広い部分には側面に打削を加えて整形を行っている。頭部付近には差々摩滅部分が見られる。

その法量は、長さ・幅・厚さが  $21 \times 10.3 \times 5.9\text{cm}$  を測り、重量は 1.535kg である。

このように本住居跡では共伴する遺物は少ないが、そ

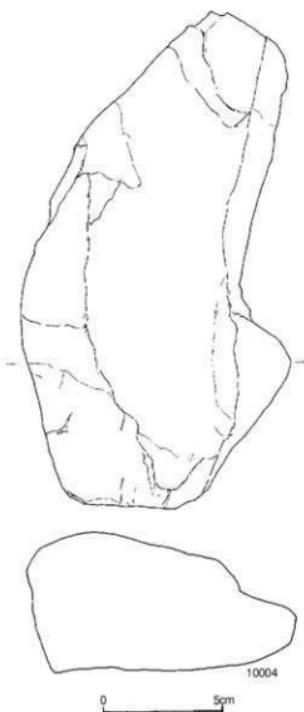


Fig.16 SC04 穫穴住居跡出土遺物実測図 (1/2) - 11 -

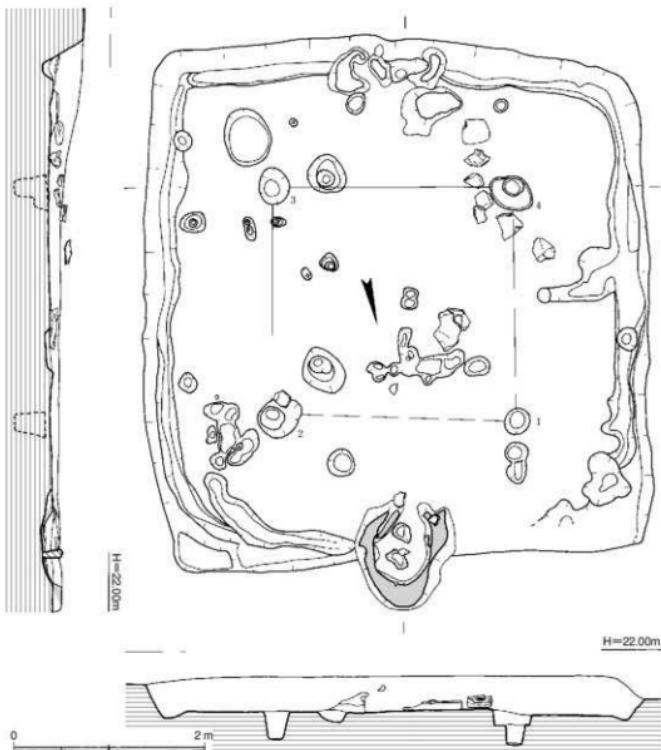


Fig.17 SC05 積穴住居跡出土状況実測図（1/50）

の仕様から6世紀後半と考えられよう。

#### SC05 住居跡 (Fig.5・17～20, PL5・6)

本住居跡は、7号支線道路の西端部で検出された長方形プランの住居跡である。平面プランを全面調査できた数少ない例である。北側で重複するSC04住居より後出の所産である。北壁中央に作り付けのカマドを配置する。

住居規模は、東壁長5.5m、西壁長5.2m、南壁長4.85m、北壁長4.85mを測り、最も残りの良い南壁では壁高約0.4m程度が残る。

また、各壁の直下の全周に幅0.1～0.3m程度の不整な、浅い壁溝を巡らす。住居床面には4本の主柱穴が認められる。主柱穴1は、径0.25m、深さ0.3mの円形掘方である。主柱穴2は、径0.4×0.45m、深さ0.3m弱の長円形掘方で、柱痕は径0.25m程度か。また、主柱穴3は、径0.35×0.3m、深さ0.3mを測る円形掘方である。主柱穴4は、径0.5×0.35m、深さ0.35mを測る長円形掘方で、柱痕跡は径0.2m程度と考えられる。また、北壁のカマドと対向する南壁中央には粘土塊が集積されたように出土して

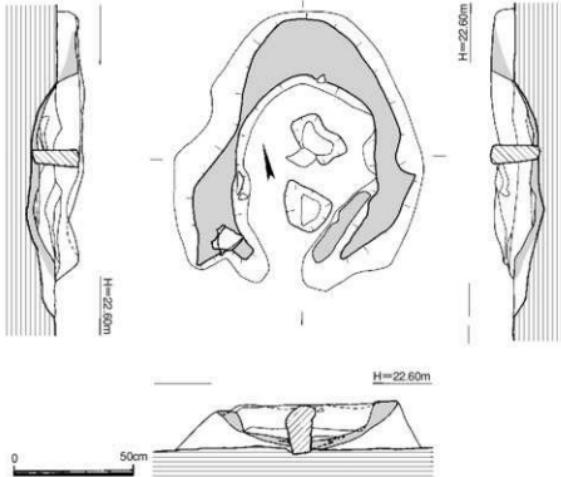


Fig.18 SC05 積穴住居カマド出土状況実測図 (1/20)

住居内埋土からは須恵器杯蓋、土師器甕・丸底壺、高坏・瓶等の遺物が出土しているが、その殆どが床面にほぼ密着して出土したものである。

#### 出土遺物 (Fig.19・20)

00014は、器高の低い須恵器杯蓋である。口縁部から天井部へは緩く移行し、その境には緩い稜線を有する。器面調整は、荒れが著しく不詳である。器色は、外面が灰色で、内面で灰白色を呈する。胎土は密で、焼成は軟質である。復原口径 14.3cm、器高 3.6cm を測る。00015も須恵器杯蓋である。口縁部と天井部との境は小さな段をなす。器面調整は、天井部の上半部に回転ヘラケズリを加え、他はヨコナデである。また、ロクロは、時計回りである。天井部の外面には「×」字のヘラ記号を付す。口径は 14.5cm、器高 4.7cm を測る。00016も須恵器杯蓋である。小さい口縁部を有し、天井部との境には低い段を巡らす。また、器面調整は、天井部の上半に回転ヘラケズリを加え、上端部は平坦となっており、他はヨコナデ調整である。器色は、内外面共に灰~灰白色を呈する。また、胎土には石英・長石粒を若干含み、焼成は堅緻である。復原口径は 14.2cm、器高 3.7cm を測る。00017は、器高の低い須恵器杯蓋で、カエリは細く反転する。器面調整は、荒れのために不詳である。器色は、内外面共に灰白色を呈する。胎土には石英・長石粒を少量含み、焼成はやや軟質である。受け部復原径 15.6cm を測る。00018も器高の低い須恵器杯蓋である。口縁内端は低い段をなし、天井部との境は細い沈線 1 条を巡らす。また、天井部の全面に回転ヘラケズリを施し、他はヨコナデである。器色は、青色を呈する。胎土に石英・長石を含み、焼成は堅緻である。復原口径 13cm を測る。

00019～00029は土師器である。00019は、底部と口縁端部を欠く丸底壺である。頭部のしまりが少なく、器形のシャープさに欠ける。器面調整は、外面頭部～胴部下半の一部にナナメハケが残り、口縁部内面ではハケメ調整後にヨコナデを施す。また、内面頭部ではヨコ方向のヘラケズリが一部に見られる。器色は、外面が灰褐色で、内面はにぶい橙色を呈する。胎土には石英・長石粒を少量混入する。焼成は堅緻である。復原胴部最大径 10.8cm を測る。

いる。

#### カマド (Fig.18)

北壁の中央部に配置されたカマドは、壁延長上から更に 0.5m 程北側にはみ出して掘方を行い、軸線で約 1m、幅 0.8m 規模の長円形をなす。これに粘土塊をもって袖部及び燃焼部を作り出している。その現存する内壁の規模は、焚き口から奥壁まで 0.8m、幅 0.6m 程度である。また、燃焼部中央には花崗岩角礫を直立に据えて煮沸甕の支脚としている。

00020は、鉢の小破片である。底部は分厚い丸底で、肥厚する口縁部は緩く外方に引き出されている。器面調整は、摩滅のために不詳である。器色は、外面が褐色で、内面は灰白色を呈する。また、胎土には石英・長石粒を多量に混入する。焼成は堅級である。復原口径は14.8cmを測る。

00021は、高環脚部破片である。円筒部は差々中位が膨らみ、脚裾は強く屈曲する。器面調整は、荒れのために不明である。器色は、内外面共に橙色を呈する。また、胎土には石英・長石粒を少量含み、

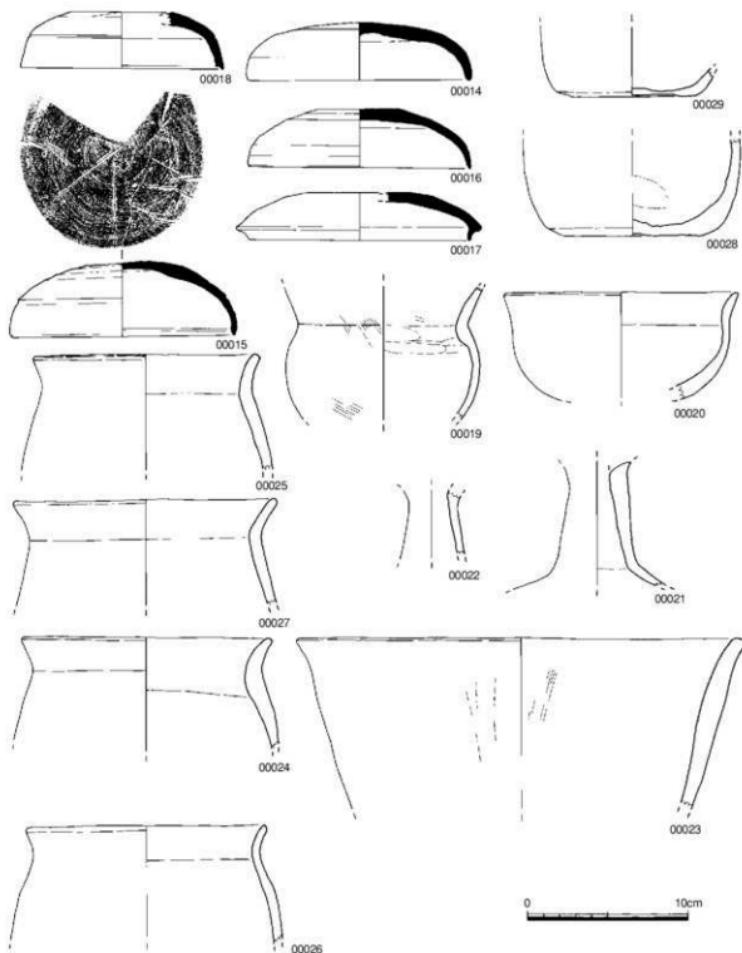


Fig.19 SC05 積穴住居跡出土遺物実測図 (1) (1/3)

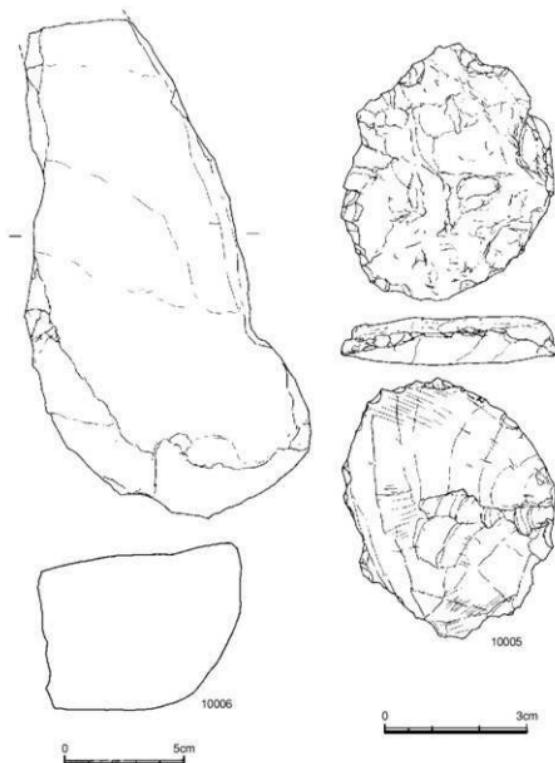


Fig.20 SC05 穫穴住居跡出土遺物実測図（2）(1/2・1/1)

る。口縁部は短く、緩く外開する。器面の荒れのために調整は不明である。器色は、外面が明褐色で、内面は褐灰～褐色を呈する。胎土には石英・長石粒を少量含み、焼成は堅緻である。

00025 も短い口縁部が緩やかに外開する甕である。器面調整は、荒れのために不明である。器色は、外面が褐色で、内面は褐灰色を呈する。また、胎土には石英・長石粒を少量含み、焼成は堅緻である。復原口径 14.4cm を測る。

00026 は、非常に薄造りの甕で、頸部との境を感じさせない程に口縁部が緩やかに立ちあがる。器面の調整は、荒れのために不明である。器色は、外面が褐灰～黒褐色で、内面は褐灰色を呈する。また、胎土には石英・長石を大量に含み、焼成は堅緻である。復原口径は 15.3cm を測る。

00027 は、口縁部が明瞭に「く」字形に屈曲する甕である。頸部内面には弱い稜が撫く。器面の荒れのために調整は不明である。器色は、外面がにぶい橙色で、内面は褐色を呈する。また、胎土には

焼成は堅緻である。

00022 も小形高坏の脚部破片である。器面調整は、荒れで不明である。器色は、内外面ともに淡赤橙色を呈する。また、胎土は密で、焼成も堅緻である。

00023 は、甕の口縁部破片である。胴部下半を失う。素直に外開する口縁は端部近くで肥厚し、上端は平坦におさめる。器面調整は、荒れのために明瞭ではないが、内外面共にタテ方向のハケメが痕跡的に見られる。器色は、外面が黒色で、内面はにぶい橙色を呈する。また、胎土には石英・長石粒を少量混入する。焼成は堅緻である。復原口径 28.8cm を測る。

00024 は、頸部が肥厚する甕破片である。

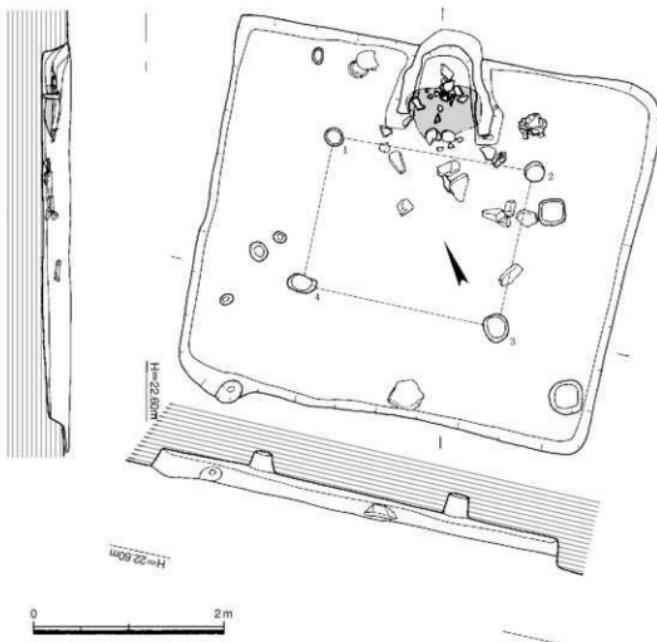


Fig.21 SC06 穫穴住居跡出土状況実測図 (1/50)

石英・長石粒を多量に含み、焼成は堅緻密である。復原口径は 16.8cm を測る。

00028 は、平底の小型甕底部破片である。外底部端は丸みをもって上部へつながっている。また、外面中央は上げ底状に窪む。器面の荒れのために調整は不明である。器色は、外面が褐灰色で、内面は灰褐色を呈する。また、胎土には石英・長石粒を少量含み、焼成は堅緻である。復原底部径 9cm を測る。

00029 は、小型の甕底部破片である。薄造りで、外端部は丸みをもって立ちあがる。また、外面はやや上げ底気味に浅く窪む。器面は、荒れのために調整が不明である。器色は、内外面共に褐灰色を呈する。また、胎土には石英・長石粒を少量含み、焼成は堅緻である。底部径 7.8cm を測る。

次に 10005 は、バルブを残す寸詰まりの円形剥片の側辺に両面からリタッチを加えている。主要剥離面側では主に側辺に、また自然面を残す裏面では剥片端に二次加工を施している。スクレイパーとしての形状を備えている。黒曜石製。

10006 は、カマドの支脚に使用された花崗岩角柱で、細くとがった方を火床に突き刺しており、頭部の側辺に打刻を加えて整形を行っている。その法量は、長さ・幅・厚さが  $21 \times 12 \times 7.3\text{cm}$  を測り、重量は 2080g である。

以上の出土遺物から、本住居跡の時期は、6世紀後半～木頃と考えられる。

#### SC06 住居跡 (Fig.5・21～24, PL6)

本住居跡は、7号支線道路西端部近くで検出された長方形プランの小形住居跡である。こちらも平

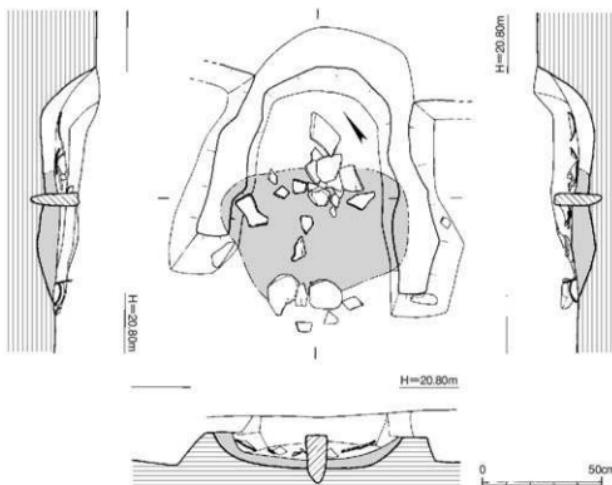


Fig.22 SC06 穫穴住居カマド出土状況実測図 (1/20)

4本の主柱穴が整然と配置されている。主柱穴はいずれも小形の円形掘方をなしている。主柱穴1は、径0.20m、主柱穴2も径が0.20m、主柱穴3は径が0.25m・深さ0.25m、主柱穴4は径が0.3×0.15mで、深さ0.2mを測る。また、床面直上には団化した土器類の殆どが密着して出土した。

#### カマド (Fig.22)

北壁中央に付設されたカマドは、壁延長上から約0.25mはみ出して掘方を行い、軸線上で1m、幅0.8mの長円形をなしている。この周辺に粘土塊による袖部や火床の製作を行っている。また、火床の中央には花崗岩の角礫を使用した煮沸甕のための支脚が立てられている。また、カマド内からは二次焼成を受けた土器器窪などが出土した。

#### 出土遺物 (Fig.23・24)

00030は、須恵器杯蓋である。口縁部と天井部との境には低い段を巡らす。また、口縁内端部は斜めに面取りして綺い稜をなす。器面調整は、天井部の上半部に回転ヘラケズリを加え、他は内外面共にヨコナデである。器色は、外面が暗青灰色で、内面は青灰色を呈する。また、胎土には石英・長石粒を少量含み、焼成は堅緻である。復原口径は、4.3cmを測る。

00031も須恵器杯蓋である。口縁部は小さく外側に引き出され、天井部との境は鈍い稜となる。天井部のヘラケズリは、上端に近い約1/3程度に止まる。ロクロは、時計回りである。器色は、内外面共に青色を呈する。また、胎土には白色微砂粒を若干含み、焼成は堅緻である。復原口径は12.6cm、同器高3.6cmを測る。

00032は、口縁部と胴部下半を欠失する提瓶破片である。器面調整は、胴部で荒い平行タタキ調整後にロクロ回転による同心円状のカキメ調整を加える。また、頭部の内外面はヨコナデを施す。更に胴部内面はあて具の痕跡である比較的細かい青海波文やその端部が移動した痕跡が顕著に残り、後にこれらにヨコナデ調整を加えている。器色は、内外面共に青色を呈する。また、胎土には石英・長石

面プランの全体を調査できた数少ない例である。住居は、北壁の中央に作り付けのカマドを配置する。住居の各壁の規模は、東壁長3.9m、西壁長3.8m、南壁長4.3m、北壁長4.5mで、東西に長いプランとなる。

また、壁の残存は、最も良く残る東・西壁でも0.3m程度である。各壁下には壁溝は見られない。床面には

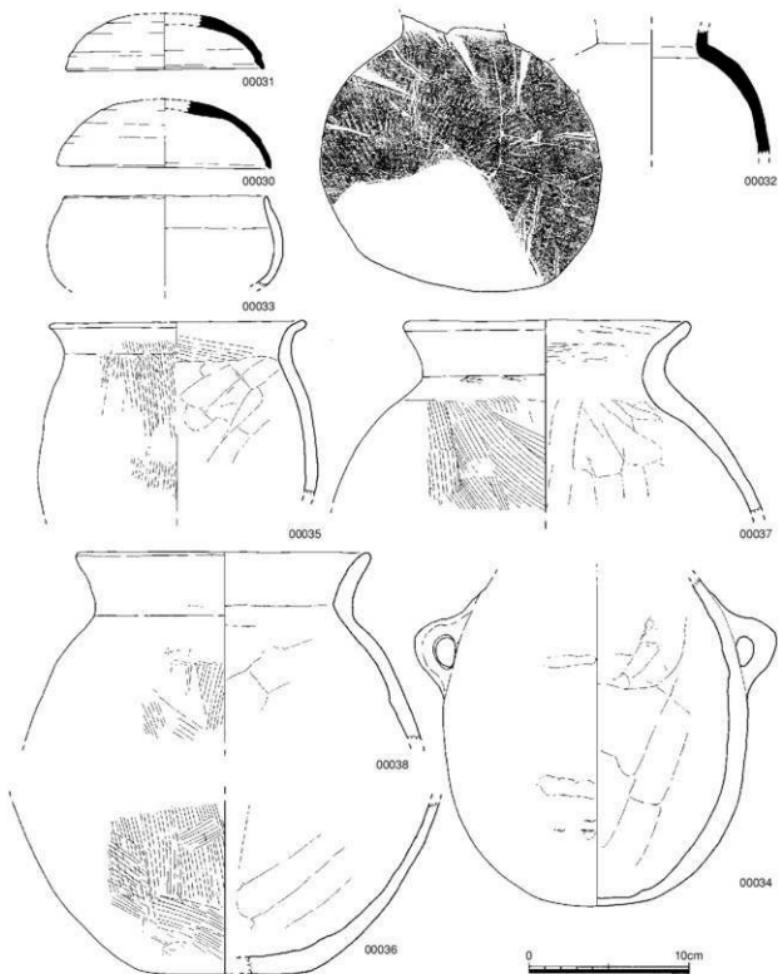


Fig.23 SC06 穫穴住居跡出土遺物実測図 (1) (1/3)

粒を少量含み、焼成は堅級である。復原頭部径は7cm弱である。

00033～00037は土師器である。00033は、底部をくたくちである。扁球状の胴部から立ちあがり、口縁端部を小さく外方に引き出す。器面調整は、剥落のために不明である。器色は、外面が赤褐色で、内面は灰褐色～橙色を呈する。また、胎土には石英・長石粒を少量含み、焼成は堅級である。復原口

径 12.8cm を測る。

00034 は、胴上部に耳状の把手を付す甕破片である。口縁部を欠く。扁球状の胴部は器壁が厚く、底部へラケズリによる調整で薄く仕上げられている。把手は整形後に貼り付けられる。器面調整は、胴部下半にヨコナデが残り、内面は荒いナナメ方向のヘラケズリを施す。器色は、外面が灰白～明褐色で、内面は明褐色を呈する。また、胎土には石英・長石粒を多量に混入する。焼成は堅緻である。復原胴部的最大径は 19.4cm を測る。

00035 は、緩く外反する短い口縁をなす甕破片である。器面調整は、外面が荒いタテハケメ調整で、口縁部付近はこの後にヨコナデを加える。また、内面は、口縁部で荒いヨコハケメ調整後にナデを加え、胴部にはナナメ方向の荒いヘラケズリが残る。器色は、外面がにぶい橙色で、内面は灰赤色を呈する。また、胎土には石英・長石粒を多量に混入する。焼成は堅緻である。復原口径は 16.3cm を測る。

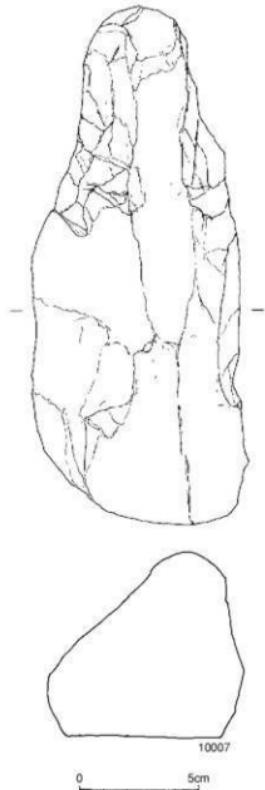


Fig.24 SC06 竪穴住居跡出土遺物実測図 (2) (1/2)

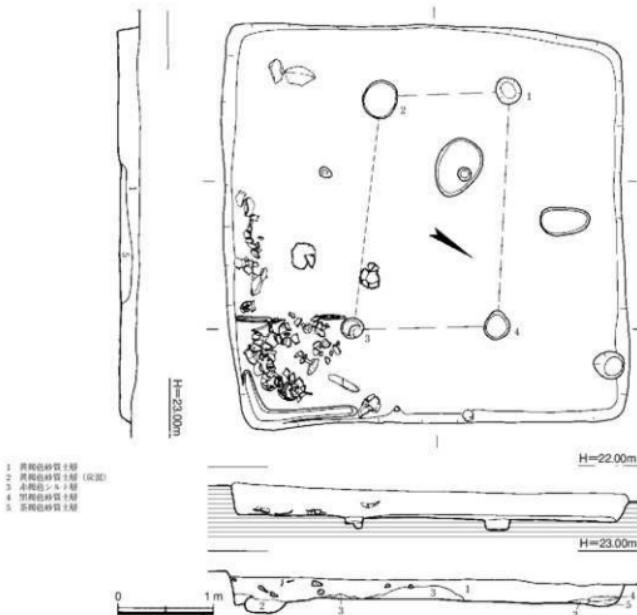


Fig.25 SC07 竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

#### SC07 住居跡 (Fig.5・25～27, PL.6・7)

本住居跡は、7号支線道路西端部近くで検出された方形プランの住居跡である。プランとしては完形で、カマドなどの施設は見られない。東側コーナーには僅かに浅い壁溝が見られ、これと対向する約1mの位置に細い切れ切れの小溝が知られる。壁長規模は、4.1m、壁高0.2～0.3mを測り、残りは良好ではない。床面の主柱穴は4本で、長方形に配置される。主柱穴1は、径が0.3mの円形掘方である。同2は、径が0.4mの長円形掘方をなす。また、同3は、径が0.2mの円形2段掘方で、深さ0.1m・柱底は0.1m規模か。同4は、径が0.3×0.25mの円形で、深さ0.1mを測る。また、主柱穴間の心身の距離は、1→2が1.4m・2→3が2.45m・3→4が1.5m・4→1が2.5mを測る。

また、住居に伴う遺物類は、平面図に見るように東コーナーから南壁付近の床面近くで縦まって出土した。

#### 出土遺物 (Fig.26・27)

図示した遺物は全て土師器である。**00039**は、小型の手捏ね鉢である。器色は、橙～褐色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。底部径3.4cmを測る。**00040**も手捏ね甕である。器色は、褐灰色を呈する。胎土に石英・長石粒を若干混入する。焼成は堅緻である。口径6.6cm・器高7.7cmを測る。**00041**は、手捏ねの小型鉢である。内面に指オサエが残る。器色は、にぶい橙色を呈する。胎土に石英・長石粒を若干含み。焼成も堅緻である。口径9cm強・器高4cmを測る。**00042**は、手捏ねのマリ形土器である。外面はヘラナデで、内面にヘラケズリを残す。器色は、にぶい橙色～灰色を呈する。

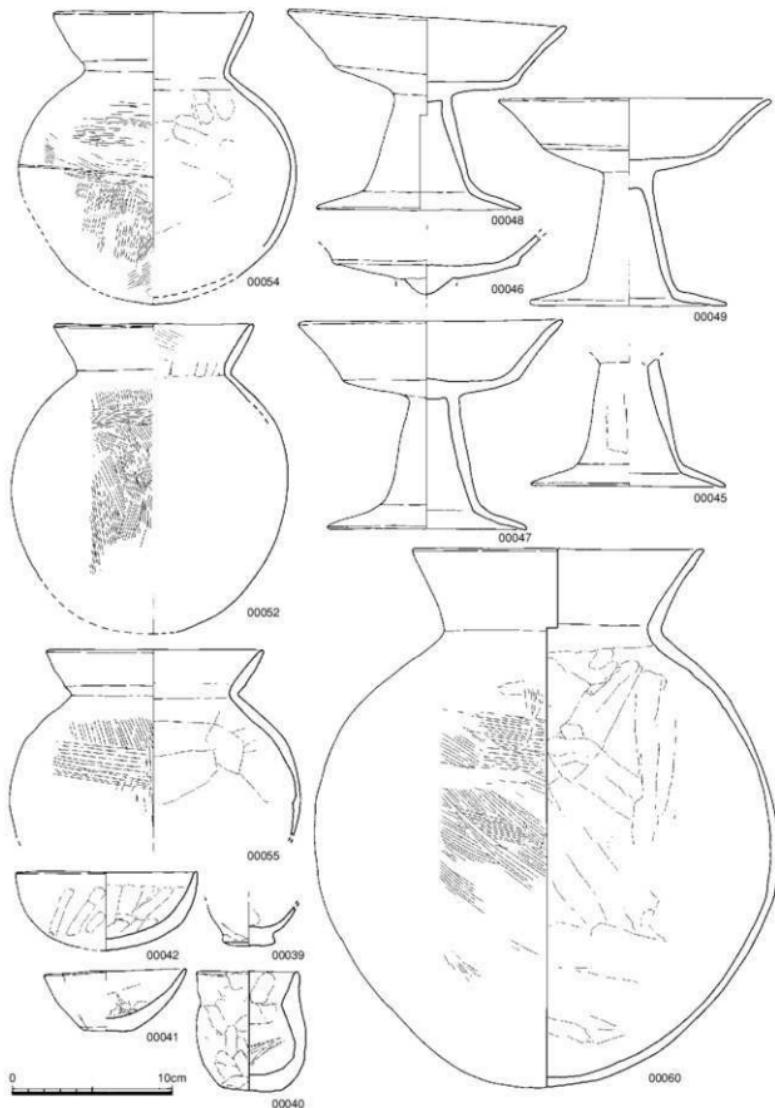


Fig.26 SC07 竪穴住居跡出土遺物実測図 (1) (1/3)

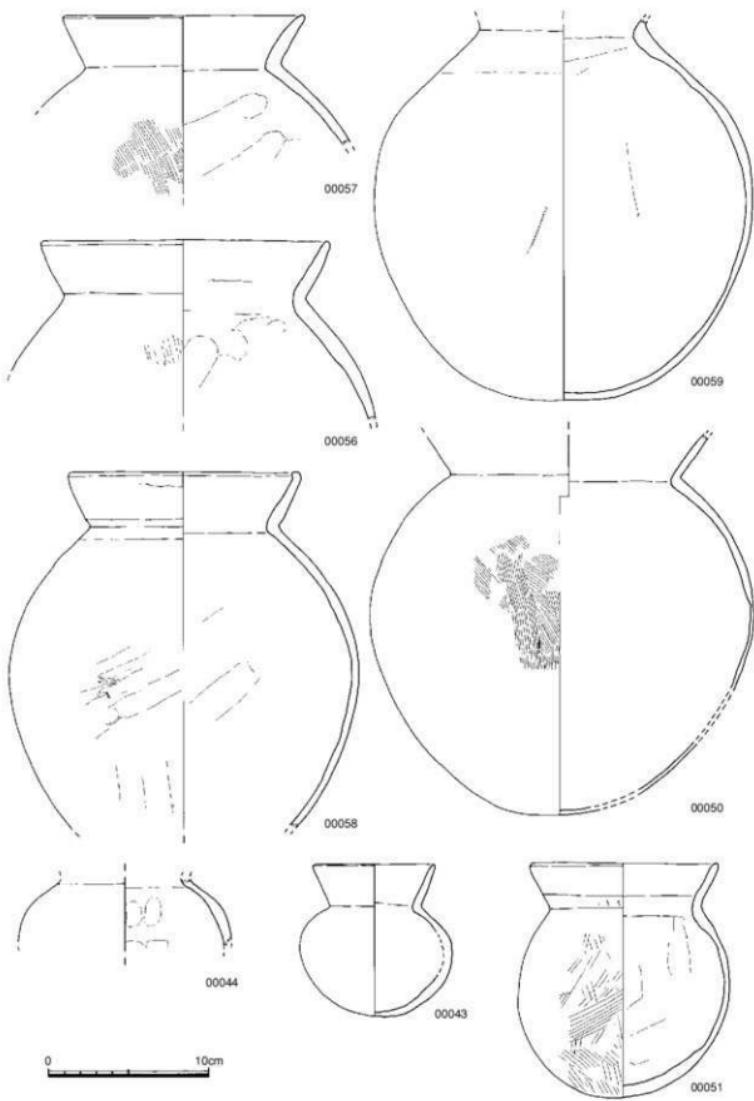


Fig.27 SC07 積穴住居跡出土遺物実測図 (2) (1/3)

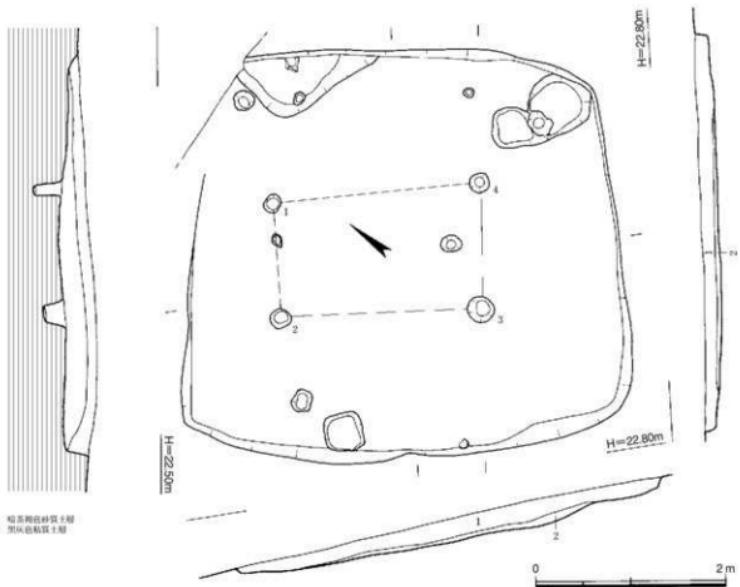


Fig.28 SC08 壁穴住居跡出土状況実測図 (1/50)

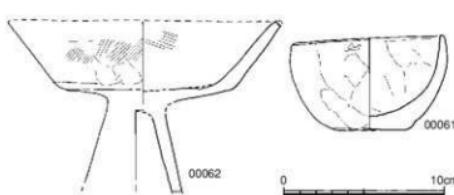


Fig.29 SC08 壁穴住居跡出土遺物実測図 (1/3)

胎土には石英・長石粒を少量含み、焼成は堅緻である。口径 11.5 ~ 12.24cm、器高 5cm を測る。00043 は、小型丸底壺である。整った扁球形の胴部に内湾気味に立ちあがる口縁部を有する。器色は、明褐～にぶい橙色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。口径 7.8cm、器高 9.7cm を測る。

00044 は、中型の丸底壺である。口径と胴部下半を欠く。外面調整は不明で、内面には指オサエが残る。器色は、赤褐～暗赤褐色を呈する。胎土に石英・長石を多量に含み、焼成は検知である。00045 は、高環々部破片である。裾部は急激に外側に開く。調整は、外面がヘラナデで、内面筒部はケズリを加える。器色は、明褐灰～灰黄色を呈する。胎土は密で、焼成も検知である。底部径 12.4cm を測る。00046 は、高環々底部破片である。口縁部との境は明瞭な段をなす。脚部に挿入する膚突起が残る。器色は、黄橙～明褐色を呈する。胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。00047 は、口縁部が長く外開する杯部にやや中膨らみの中空脚部をもつ高环である。器面の荒れで調整は不明である。器色は、にぶい橙色を呈する。また、胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。口径 16.8cm、器高 13.4cm を測る。00048 も浅い杯部に中空の脚を有する高环である。器面調整は、荒れのために不明である。器色は、内外面共ににぶい橙色を呈する。胎土はやや粗で、石英・長石・赤色粒を含み、焼成は堅緻である。口径は 17.8cm、器高 12.8cm を測る。

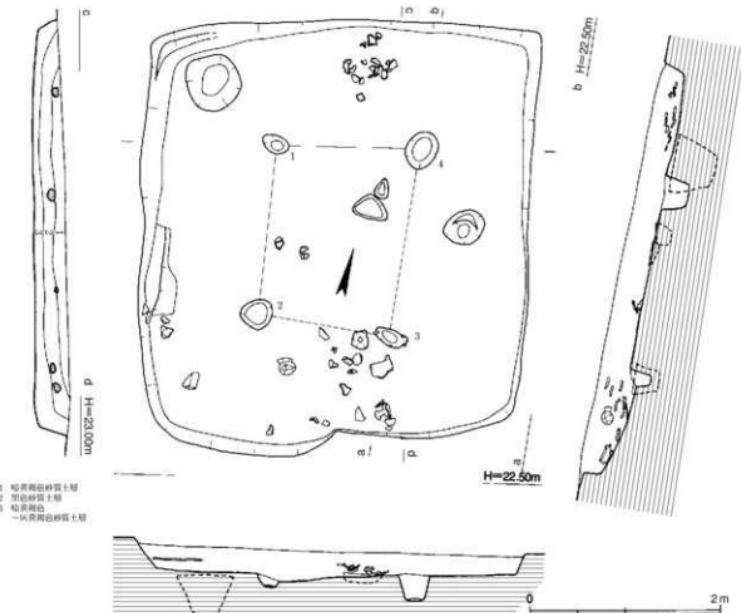


Fig.30 SC09 積穴住居跡出土状況実測図 (1/50)

00049も同様の高壇である。調整は、脚筒部の内部にヘラケズリを加える以外は荒れのために不明である。器色は、黄橙色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。口径は17.3cm、器高13.2cmを測る。

00050は、口縁部を欠くが、倒卵形の胴部をもつ壺である。胴部の中位以下は丁寧なヘラケズリ調整で器壁厚さ2~2.5mmまでに仕上げている。器面調整は、外面胴部の中位にハナメ調整・頭部~口縁付近はヨコナデが残る。内面胴部は全面ヘラケズリで、使用時の焼けこげが見える。器色は、褐灰~黒褐色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。頭部径は14.6cm、胴部最大径24.2cmを測る。

00051は、中型の丸底壺で、口縁は内湾気味に立ちあがる。調整は、口縁部内外面がヨコナデ・胴部外面荒いナナメ方向のハナメ・胴部内面はナナメタテ方向のヘラケズリである。器色は、黒褐~褐灰色を呈する。胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。口径12cm・器高15cmを測る。00052は、球状の胴部に直線的に外開する口縁を有する中型壺である。調整は、胴部外面がタテ・ヨコ方向の荒いナデで、胴部内面はヘラケズリが残る。器色は、灰白~褐灰色を呈する。胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。口径14.6cm・器高19.8cmを測る。00054は、半球状の胴部に内湾気味の口縁部を付す中型壺である。胴部中位には1条の沈線を巡らす。調整は、口縁部の内外面でヨコナデ・胴部外面の上半はヨコハナメ・下半はタテハナメを施し、内面はヘラケズリである。器色は、暗青灰~灰褐色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。口径12.7cm・器高13.6cmを測る。00055も半球状胴部に直線的に外開する口縁部を付す中型壺である。胴部下半を欠く。調整は、胴部外面にタテ・ヨコ方向のハナメ・頭部・口縁部の内外はヨコナデ・胴部内面に荒いヘラケズリを施す。器色は、灰褐~にぶい橙色を呈

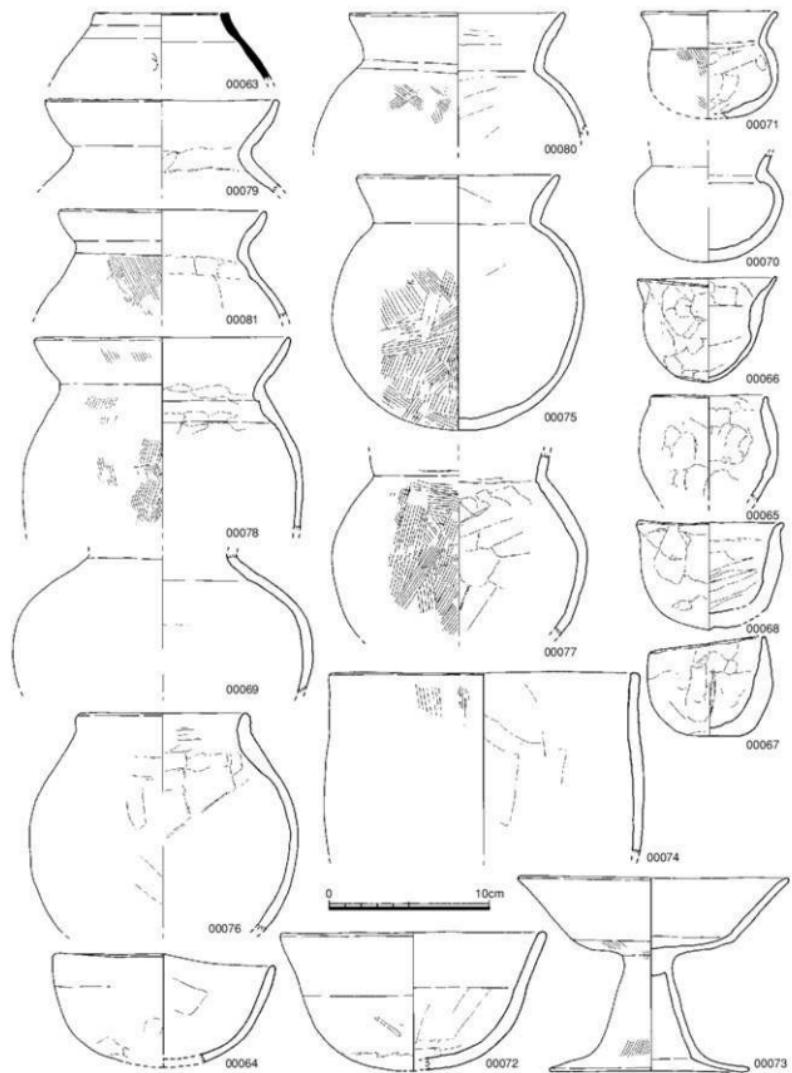


Fig.31 SC09 竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3)

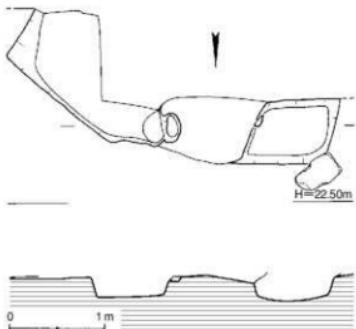


Fig.32 SC11 壁穴住跡出土状況実測図 (1/50)

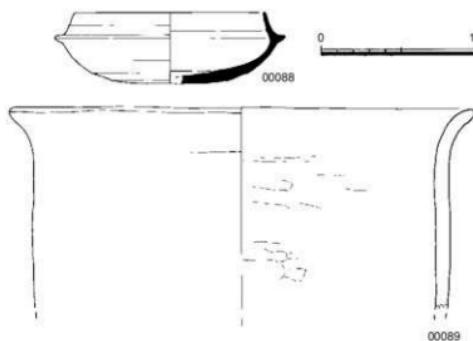


Fig.33 SC11 壁穴住跡出土遺物実測図 (1/3)

た、口縁部の内外面はヨコナデを加える。器色は、褐灰色にぶい橙色を呈する。胎土は粗で、焼成は堅緻である。復原胴部最大径は24cm前後である。**00060**は、球状胴部に外開する比較的大型の口縁部を付す甕である。頸部は良くしまる。胴部の肩以下には全面にススが付着する。調整は、口縁外面でヨコナデ、胴部外面上部にヨコハケメ・下部にナナメハケを加える。内面は、ヘラケズリ調整である。器色は、淡黄橙色～灰黄色を呈する。口径18.5cm、器高34.5cmを測る。これらの出土遺物から本住居跡の時期は、5世紀中頃の所産と考えられる。

#### SC08 住居跡 (Fig.5・28・29, PL.7)

本住居跡は、7号支線道路西端部で検出された長方形プランの住居である。住居北壁のコーナーが調査区外である。各壁の規模は、東壁長0.36m以上・西壁長0.465m・南壁長3.5m・北壁長3.2m以上である。また、壁高は、最も良く残る西壁が0.3m程度で、他は0.15m前後で残りは悪い。床面には主柱穴4本が長方形に配置されている。主柱穴1は、径0.2mの円形、同2が径0.2m強を測る円形である。同3は、径0.3m・深さ0.2mの円形掘方、同4が径0.25m弱・深さ0.3mの円形掘方である。また、主柱穴間の心身距離は、柱穴1→2間1.2m、柱穴2→3間2.15m、柱穴3→4間1.35m、柱穴4

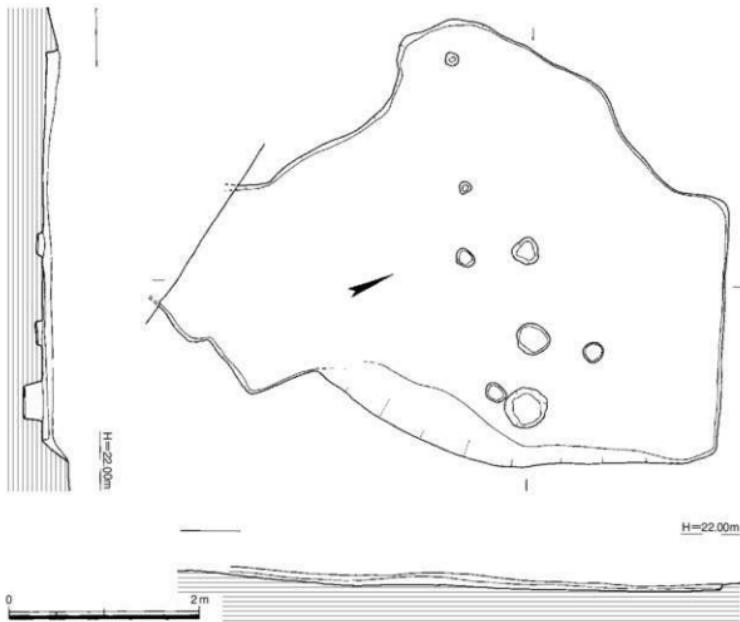


Fig.34 SC12 竪穴住居跡出土状況実測図 (1/50)

→ 1間 2.2m を測る。住居埋土内からの遺物の出土は少量であった。

#### 出土遺物 (Fig.29)

00061は、土師器鉢である。調整は、内外面共にヘラナデを施す。器色は、にぶい橙色を呈する。胎土は粗で、焼成は堅緻である。復原口径 9.5cm・器高 6cm を測る。00062は、脚端部を失う土師器高環である。浅い杯部に中空の筒部を残す。調整は、杯部内外面に荒いハケメを施す。また、屈曲部には指オサエが残る。器色は、にぶい橙色である。胎土は粗で、焼成は堅緻である。復原口径は 19.5cm を測る。これらの出土遺物から本住居跡の時期は 6世紀後半と考えられる。

#### SC09 住居跡 (Fig.5・30・31, PL.7)

本住居跡は、7号支線道路調査区のほぼ中央で検出された長方形プランの住居跡である。床面にはカマドや壁溝などの施設は見られない。各壁の規模は、東壁長 4.1m・西壁長 4m・南壁長 3.75m・北壁長 4.15m を測る。また、壁高は 0.2 ~ 0.3m を残す。床面には主柱穴 4 本を長方形に配する。主柱穴 1 は、径  $0.3 \times 0.2m$  の長円形掘方で深さ 0.1m、同 2 は  $0.3 \times 0.25m$  の円形掘方、同 3 は  $0.35 \times 0.15m$  の長円形掘方、同 4 は  $0.4 \times 0.3m$  の長円形掘方で深さ 0.3m を測る。主柱穴の心身間距離は、柱穴 1 → 2 で 1.85m・柱穴 2 → 3 で 1.4m・柱穴 3 → 4 で 2m・柱穴 4 → 1 で 1.5m を測る。住居跡埋土からは北壁・南壁付近の床面からやや浮いた位置で土師器壊破片を中心に出土した。

#### 出土遺物 (Fig.31)

00063は、須恵器把手付壺と考えられる。胴部に把手基部の破片が残る。器色は、灰白~青灰色を呈

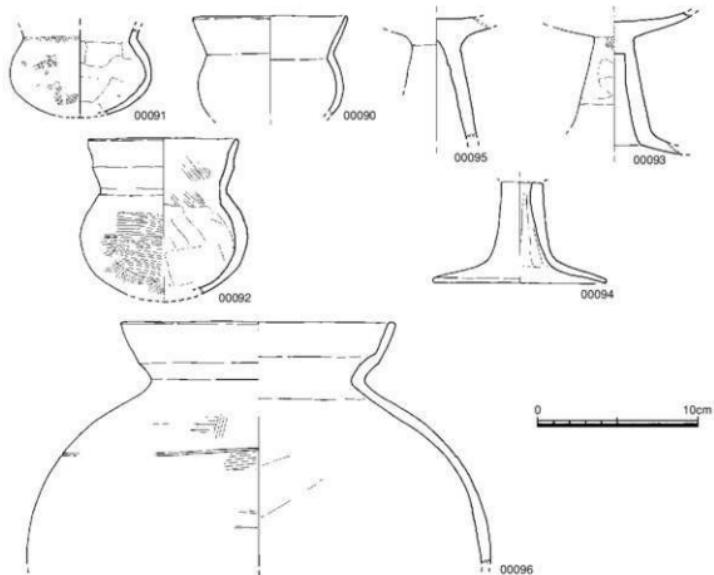


Fig.35 SC12 穹穴住居跡出土遺物実測図 (1/3)

する。胎土は密で、焼成は堅緻である。復原口径は 8.6cm を測る。00064 は、土師器マリである。器色は、灰白からにぶい橙色である。胎土は密で、焼成は堅緻である。口径 14.2cm・器高 7.2cm を測る。

00065 ~ 00068 は、土師器手捏ね土器である。器色は、褐灰色を呈する。外面に指オサエ、内面オサエとヘラケズリを加える。口径は、それぞれ 7.6・8.9・7.4・9.4cm を測る。00069 は、土師器壺破片である。胴部は扁球状をなし、調整は内面にヘラケズリを残す。器色は、にぶい橙色である。胎土は粗で、焼成は堅緻である。00070・00071 は、土師器小形丸底壺である。器色は、にぶい黄橙色である。胎土は、密で、焼成は堅緻である。00071 の口径 8.7cm を測る。

00072 は、土師器鉢である。調整は、内面にヘラケズリが残る。器色は、褐色である。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径 17cm・器高 8.8cm を測る。

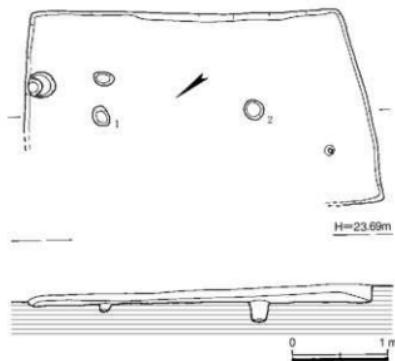


Fig.36 SC13 穹穴住居跡出土状況実測図 (1/50)

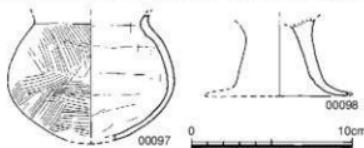


Fig.37 SC13 穹穴住居跡出土遺物実測図 (1/3)

00073は、土師器高杯である。調整は、外面に一部ハケメが残り、脚内面はヘラケズリである。器色は、橙～赤橙色である。胎土は粗で、焼成は堅緻である。口径 17.2cm・器高 12.4cmを測る。00074

は、土師器瓶である。胴部下半を失う。内面にヘラケズリを残す。器色は、灰白～ぶい橙色である。胎土は密で、焼成は堅緻である。復原口径は 19.8cm を測る。00075は、断面がく字形をなす土師器の中型甕である。胴部外面に荒いハケメを加え、内面はヘラケズリである。また、口縁部・頸部はヨコナデ調整である。器色は、黄橙～暗灰色である。胎土は粗で、焼成は堅緻である。口径 13cm・器高 16.3cmを測る。00076は、直口する口縁をもつ土師器甕である。外面はヘラナデ、内面ヘラケズリを施す。器色は、褐灰～褐色を呈する。胎土は粗で、焼成は堅緻である。口径 11.2cm を測る。00077も土師器中型甕である。調整は、外面には荒いハケメ、内面に細かいヘラケズリを加える。器色は、ぶい橙色である。胎土は密で、焼成も堅緻である。

00078・00079・00081は、口縁部が内湾気味に立ちあがり、扁球状の胴部をなすと考えられる土師器甕類である。調整は、胴部外面にハケメ・内面ヘラケズリ、口縁部内外がヨコナデである。器色は、灰褐～ぶい橙色を呈する。胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。口径は、それぞれ 16.4・15

・13.2cm を測る。00080は、やや口縁が外反して開く。口径は 13.7cm を測る。

これらの出土品から、本住居跡の時期は、5世紀中頃であろう。

#### SC11 住居跡 (Fig.5・32・33)

本住居跡は、7号支線道路の西端部で検出された長方形？プランの住居跡である。北壁の一部と考えられる。形状の詳細を十分にうかがうことは困難である。

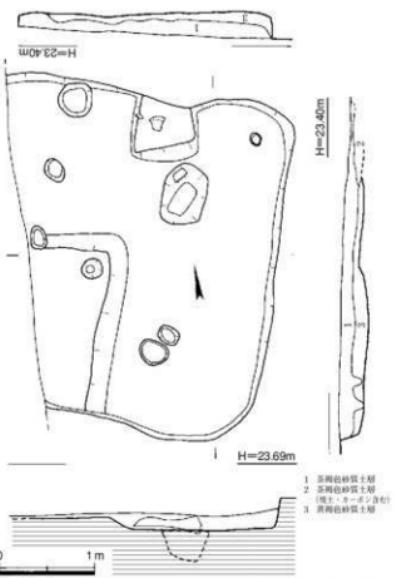


Fig.38 SC14 壁穴住居跡出土状況実測図 (1/50)

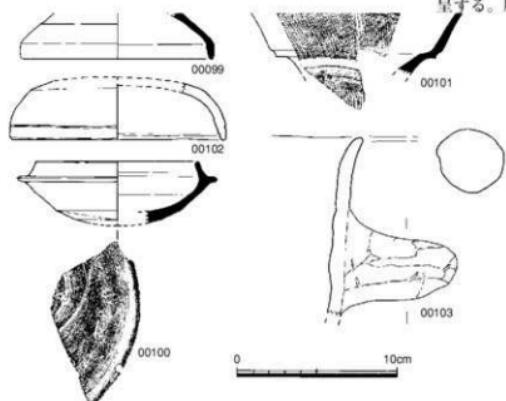


Fig.39 SC14 壁穴住居跡出土遺物実測図 (1) (1/3)

出土遺物 (Fig.33)

00088 は、やや薄造りの須恵器杯身である。受け部の立ちあがりは比較的高い。調整は、底部の三分の二程度に回転ヘラケズリを施し、他はヨコナデである。器色は、青灰色である。胎土は粗で、焼成は堅緻である。口径 14.6cm を測る。00089 は、大型の土師器瓶破片である。調整は、荒れのため内面のヘラケズリのみが残る。器色は、橙～明褐色である。胎土は密で、焼成は堅緻である。復原口径 29.6cm を測る。カマド出土。これらの出土遺物から本住居跡の時期は、6 世紀後半と考えられる。

SC12 住居跡 (Fig.5・34・35, PL.7・8)

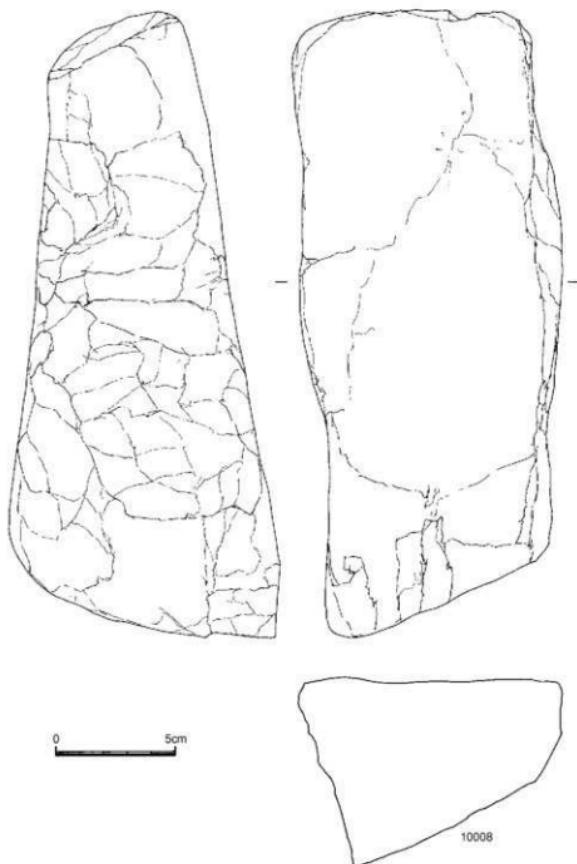


Fig.40 SC14 積穴住居跡出土遺物実測図 (2) (1/2)

本構造は、住居跡としたが、北辺ではコーナーと考えられる部位が見えるが、土坑状であり、全体の形状を確認できない。規模は、長軸長 5.7m・短軸長 4.1m・深さ 0.1m 程度である。床面に連続するピットが 3 個知られるが、対向する位置には無く、主柱穴として判断出来ない。埋土から須恵器杯蓋・甕と共に土師器甕・高环・甕・小形丸底壺等が出土した。

出土遺物 (Fig.35)

00090 ~ 00092 は、土師器小形丸底壺である。調整は、00091・00092 では外面ハケメ・ヨコナデで、内面にヘラケズリを加える。器色は、橙～黄橙色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。口径は、00090 が 9.8cm、00092 が 6cm を測る。

00093 ~ 00095 は、筒部が中空の土師器高环の脚部破片である。器色は、にぶい橙色である。

00096は、扁球状の胴部に二重口縁状の口縁を付す土師器壺破片である。肩部に横沈線を巡らす。器色は、橙～褐灰色である。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径は17.6cmを測る。

SC13住居跡 (Fig.5・36・37, PL.8)

本住居跡は、2号支線道路4区の北端で検出された長方形プランの小形住居跡である。北壁と東壁の大部分を失う。各壁の規模は、東壁が1.3m以上・西壁が2.1m・南壁が3.3mを測る。壁高は0.2m程度を残す。床面には主柱穴2個が配置される。主柱穴1は、径 $0.2 \times 0.15$ mの長円形掘方で深さ0.1m・同2は径0.2mの円形掘方で深さ0.25mを測る。また、柱穴間の心身距離は、1.6mである。埋土中

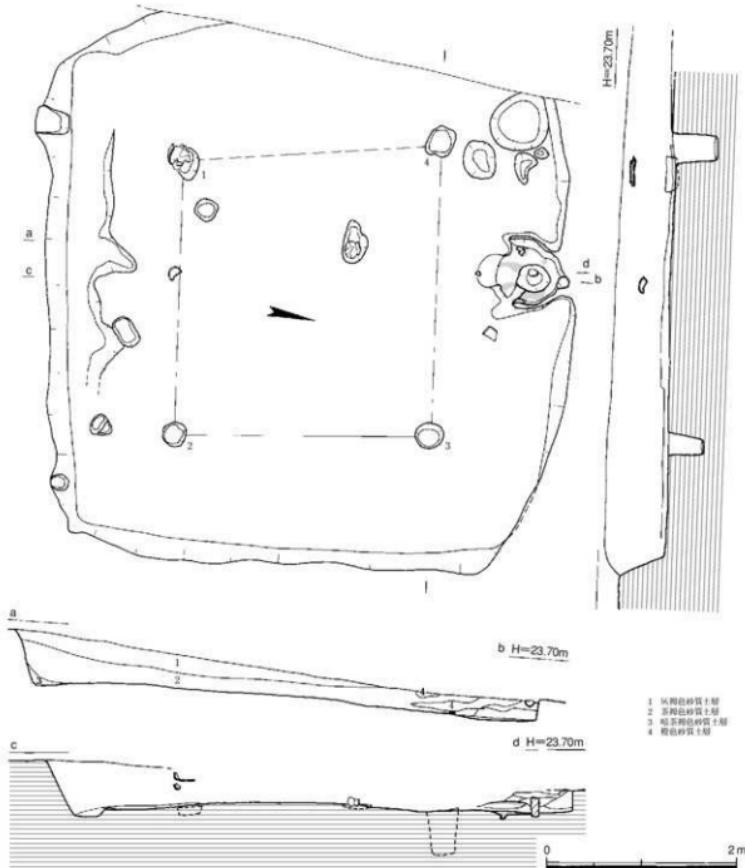


Fig.41 SC15 竪穴住居跡出土状況実測図 (1/50)

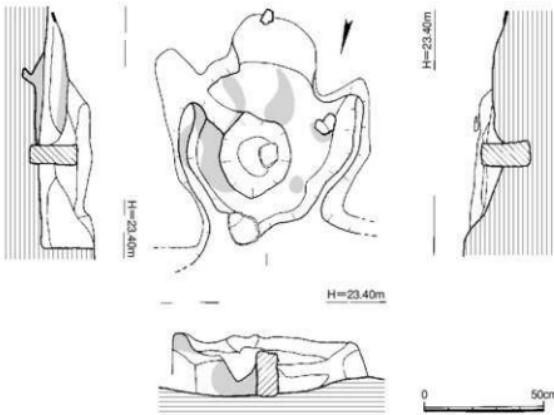


Fig.42 SC15 穫穴住居カマド出土状況実測図 (1/20)

#### SC14 住居跡 (Fig.5・38・39・40、PL.8)

本住居跡は、2号支線道路4区の北端部で検出された長方形プランの住居跡である。全体プランのほぼ東半部を調査した。各壁の規模は、東壁長3.5m・南壁長1.8m以上・北壁長3.1m以上で、壁高0.25m程度を測る。南壁に沿って段状の低い高まりが残る。床面では数個のビットが検出されたが、主柱穴は特定出来ない。埋土内からは、須恵器蓋杯やハソウ、土師器杯蓋・瓶などが出土した。

#### 出土遺物 (Fig.39・40)

00099は、口縁が嘴状に折れる須恵器杯蓋である。調整は、ヨコナデである。器色は、灰色を呈し、焼成は堅緻である。口径12.2cmを測る。00100は、小形の須恵器杯身である。底部下半が回転ヘラケズリで、他はヨコナデである。外底部にヘラ記号あり。器色は、青灰色である。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径12.6cmを測る。00101は、須恵器ハソウ破片である。口縁下に鋭い突帶1条を巡らす。外面にはタテ方向に櫛目を施す。器色は、暗青灰色である。胎土は密で、焼成は堅緻である。口径は14cmを測る。00102は、擬須恵の土師器杯蓋である。口縁部の内外面に浅い沈線を巡らす。天井部三分の一ほどにヘラケズリを施す。器色は、淡黄橙色である。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径13.8cmを測る。00103は、土師器瓶破片である。器色は、にぶい橙色である。胎土は粗で、焼成は堅緻である。10008は、原位置を保たないが、カマド支脚と考えられる。角縁の側辺に打剥を加えて三角柱に仕上げる。法量は、長さ・幅・厚さが26.4×11×11.2cmで、重さ3700gを測る。これらの中から本住居跡の時期は、6世紀後半頃と考えられる。

#### SC15 住居跡 (Fig.5・41～45、PL.3・8)

本住居跡は、2号支線道路4区の中位で検出された不整な長方形プランの住居跡である。西壁側のコーナーが未調査である。北壁の中央に作り付けのカマドを付す。床面には壁溝は無く、主柱穴は4本を長方形に配する。各壁の規模は、東壁長4.3m・西壁長1.5m以上・南壁長5m・北壁長5.1m以上で、壁高が南壁0.6m・北壁0.2mを測る。主柱穴1は、径0.4×0.25mの不整円形掘方、同2が径0.25mの円形掘方、同3が径0.3m弱の円形掘方、同4が0.3×0.25mの不整円形掘方である。また、主柱穴

からは、土師器甕破片を中心として丸底壺・高环瓶などが出土した。

#### 出土遺物 (Fig.37)

00097は、土師器小形丸底壺である。口縁部を欠く。外面が荒いハケメで、内面はヘラケズリ調整である。器色は、暗灰～灰白である。胎土は密で、焼成も堅緻である。胴部最大径10.6cmを測る。00098は、低い高环脚部破片である。器色は、橙色である。胎土は密で、焼成も堅緻である。復原底部径は9.5cmを測る。

間の心身距離は、柱穴1→2で2.9m、柱穴2→3で2.7m、柱穴3→4で3.1m、柱穴4→1で2.7mを測る。埋土からは須恵器蓋杯、土師器甕、高壺・小型丸底壺などが床面近くで出土している。

#### カマド (Fig.42)

北壁中央に作り付けのカマドは、他の住居例よりも若干小形である。火床の中央に花崗岩角砾を据える。また、窯体の残りもあまり良くない。

#### 出土遺物 (Fig.43～45)

00104は、須恵器杯蓋である。調整は、天井部の二分の一に回転ヘラケズリを加え、他はヨコナデである。器色は青色を呈する。胎土は粗で、焼成も堅緻である。口径13.2cm・器高4.2cmを測る。

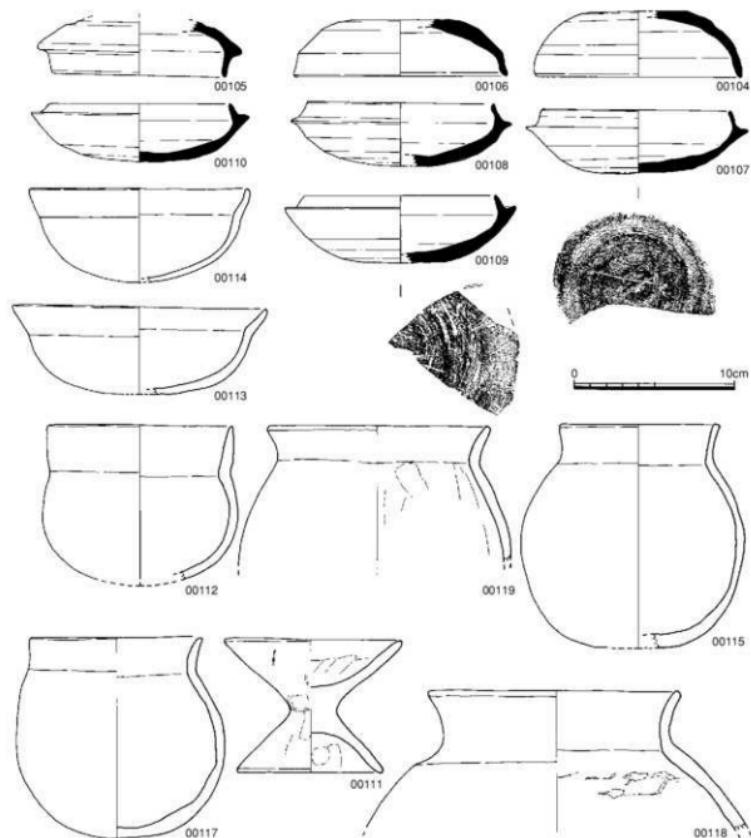


Fig.43 SC15 積穴住居跡出土遺物実測図 (1) (1/3)

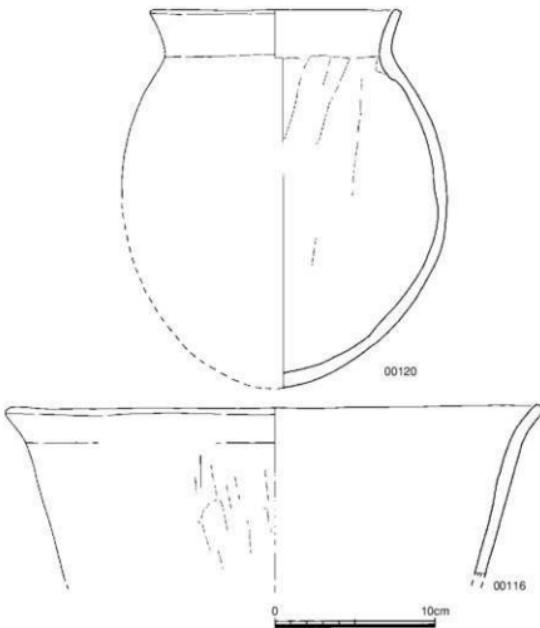


Fig.44 SC15 積穴住居跡出土遺物実測図 (2) (1/3)

土は密で、焼成も堅緻である。受け部径 14.1cm・器高 4.1cm を測る。

00108 も須恵器杯身である。受け部の立ちあがりは非常に薄造りで、低い。調整は、底部のほぼ全面に回転ヘラケズリを施し、他はヨコナデである。器色は、暗青灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。受け部径 13.8cm・器高 4cm を測る。00109 は、受け部立ちあがりの内傾化が著しい須恵器杯身である。調整は、底部のほぼ全面に回転ヘラケズリを施し、他はヨコナデである。内底部にはアテ具痕が残る。また、外底部にヘラ記号を描く。器色は、青灰色～明青灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。受け部径 14.8cm・器高 4.2cm を測る。00110 は、受け部立ち上がりが低く、内傾化の著しい須恵器小形杯身である。調整は、底部の約二分の一程度にヘラケズリを加え、他はヨコナデである。器色は、灰黄～灰白色を呈する。胎土はやや粗で、焼成は軟質である。受け部径 13.8cm・器高 3.7cm を測る。

00111～00120 は土師器である。00111 は、脚台付鉢である。口縁は直線的に開き、脚も相似形である。調整は、内外面共にヘラナデである。器色は、外面が灰褐色で、内面は鈍い橙色である。胎土は密で、焼成は堅緻である。口径 11.3cm・器高 8.5cm を測る。00112 は、口縁部がほぼ直立する丸底壺である。調整は、荒れのために不明である。器色は、外面が暗赤灰、内面はにぶい橙色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。復原口径 11.8cm・同器高 10.2cm を測る。

00113 は、浅い鉢である。口縁部は小さく外方に折れる。器面調整は、荒れのために不明である。

00105 は、小形の須恵器蓋である。天井部の約二分の一に回転ヘラケズリで、他はヨコナデである。器色は、青灰色である。胎土は密で、焼成は堅緻である。口径 13cm を測る。00106 は、天井の低い須恵器蓋である。口縁部は外側に踏ん張る。天井部のヘラケズリは小さい。器色は、明青灰～灰白色である。胎土は密で、焼成は堅緻である。口径 13.6cm・器高 4.5cm を測る。00107 は、深い須恵器杯身である。受け部は薄造りで、立ちあがりも低い。外底部には「く」字形のヘラ記号を描く。底部のヘラケズリは約二分の一程度で、他はヨコナデである。器色は、灰白～青灰色を呈する。胎

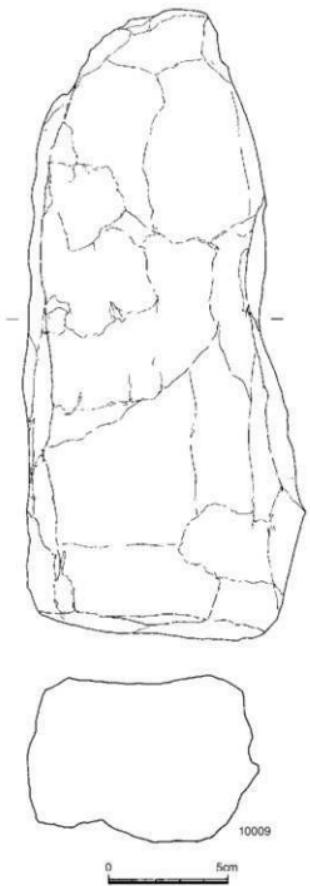


Fig.45 SC15 竪穴住居跡  
出土遺物実測図 (3) (1/2)

内面は黒褐色を呈する。胎土は粗で、焼成は堅緻である。口径 16cm・器小 24.2cm を測る。

10009 は、カマドの支脚として使用された花崗岩角砾利用の角柱である。細く尖った部分を火床の中央に据え、大径部が頭部となる。素材の角砾周辺部にくまなく敲打調整を加えて方柱状に整形している。また、頭部には使用によると考えられる摩滅が認められる。

これらの出土遺物から、本住居跡の時期は 6 世紀後半～末頃と考えられる。

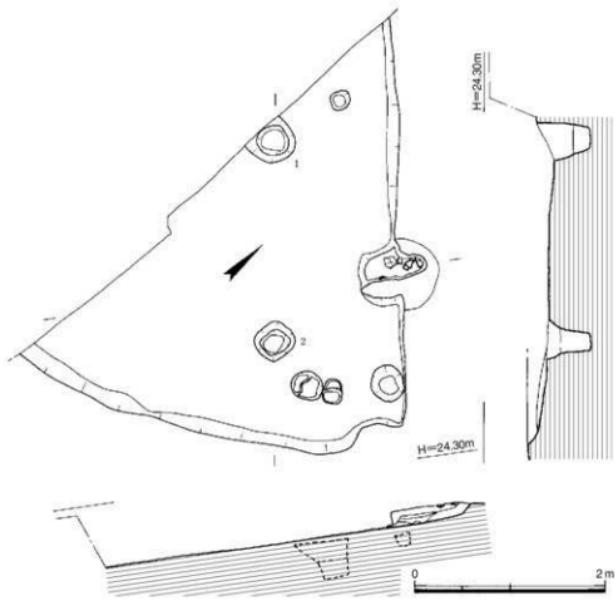


Fig.46 SC16 竪穴住居跡出場教実測図 (1/50)

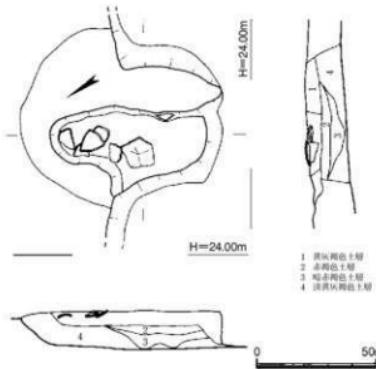


Fig.47 SC16 竪穴住居かまど 出土状況実測図 (1/20)

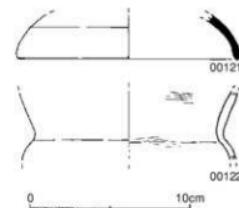
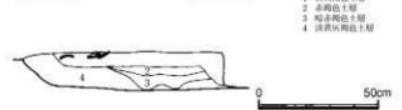


Fig.48 SC16 竪穴住居跡出土遺物実測 (1/3)



**SC16 住居跡 (Fig.5・46～48, PL.3・8・9)**  
本住居跡は、2号支線道路4区の南側で検出された長方形プラン?の住居跡と考えられる。プランは、南・北壁の一部が調査された。壁の規模は、南壁長4.1m以上・北壁長4.3m以上を測る。壁高は、南・北壁共に0.2m程度である。北壁のやや南寄りに作り付けのカマドを付設する。また、床面には主柱穴2本が認められる。主柱穴の規模は、柱穴1が径0.45mの円形掘方で、同2が0.4×0.35mの不整円形掘方である。なお、主柱穴間の心身距離は、2.15mである。住居埋土からは須恵

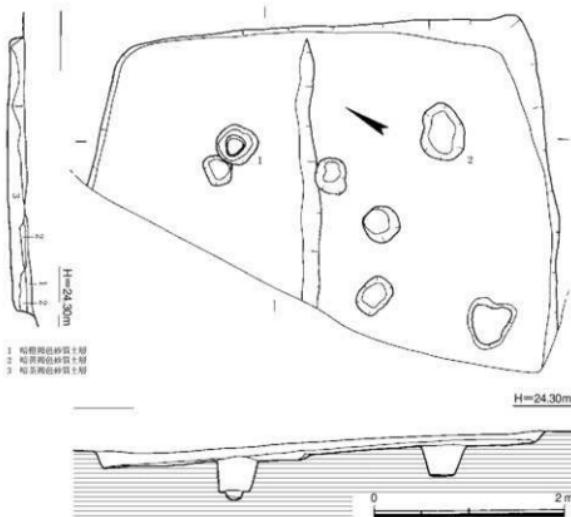


Fig.49 SC17 竪穴住居跡出土状況実測図 (1/50)

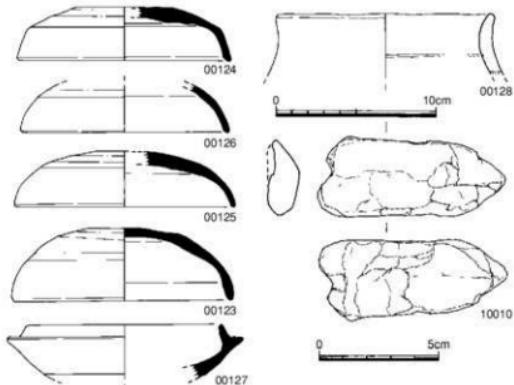


Fig.50 SC17 竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3・1/2)

と考えられる。プランはやや不整形であり、西壁と南・北壁の一部は調査区外である。壁規模は、東壁長4.1m・南壁長3.35m以上・北壁長1.5m以上を測る。なお、壁高は0.2m程度が残る。床面では東西方向に区切るようにベッド状の段が設けられている。また、主柱穴は、東壁側の2本が認められる。主柱穴1は、径0.4m程度・深さ0.35mの不整円形掘方で、同2は径0.6×0.45m・深さ0.35mの長円形掘方である。なお、柱穴1から柱芯の経は0.2m程度と考えられる。主柱穴間の心身距離は、2.2m程度を

器甕・蓋杯、土師器甕・高坏・小形丸底壺等の小片が出土した。

#### 出土遺物 (Fig.48)

00121は、須恵器杯蓋である。丸みを帯びた口縁部をもつ。器面調整は、内外面共にヨコナデである。器色は、外面が灰白～暗灰色で、内面は青灰色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。復原口径は14.2cmを測る。

00122は、頭部のしまりのない土師器の小形丸底壺破片である。器面調整は、外

面がヨコナデで、内面はハケメ調整後にヘラケズリを施す。器色は、内外面共に赤色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。復原頭部径は12cmを測る。カマド出土。このような出土遺物から、本住居跡の時期は6世紀後半と考えられる。

#### SC17 住居跡 (Fig.5・49・50、PL.3・9)

本住居跡は、2号支線道路4区の南側で検出された長方形プランの住居跡



Fig.51 SC18 積穴住居跡出土状況実測図 (1/50)

測る。住居埋土からは土師器甕破片を主に高坏、須恵器蓋杯、滑石製石錘等が出土した。

#### 出土遺物

(Fig.50)

00123は、須恵器蓋である。丸みを帯びた口縁を有する。天井部の一部に回転ヘラケズリを加え、他はヨコナデ・ナデ調整である。器色は、内外面共に青灰色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。口径14.1cm・器高4.7cmを測る。

000124は、天井部から口縁部への移行が「く」字形に屈折する須恵器蓋である。器色は、灰白～明青色を呈する。胎土は密で

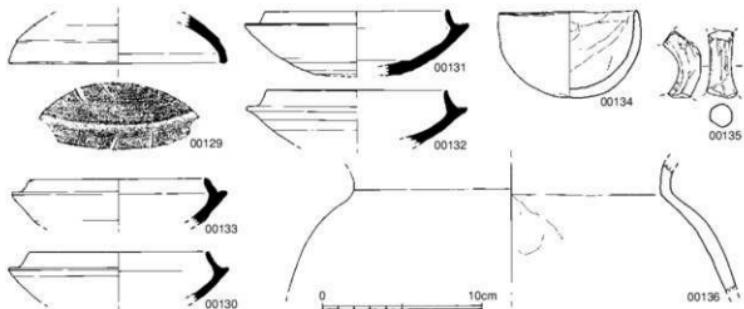


Fig.52 SC18 積穴住居跡出土遺物実測図 (1/3)

焼成も堅緻である。口径 13.6cm・器高 3.4cm を測る。00125・00126 は器高の低い須恵器杯蓋である。調整は、いずれも天井部の上半に回転ヘラケズリを加え、他はヨコナデである。また、いずれも薄造りである。000125 は器色外面が灰黄褐色、内面が明青灰色で、胎土は密で、焼成も堅緻である。口径 14cm・器高 3.5cm を測る。また、00126 は、器色が青灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径 13.2cm を測る。00127 は、受け部立ち上がりの低い須恵器杯身である。全体にしまりがない。器面調整は、外底部に僅かにヘラケズリを残し、他はヨコナデである。器色は、内外面共に青灰色を呈する。胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。復原受け部径 15cm を測る。

000128 は、口縁部が緩く立ちあがる土師器小形甕である。器面調整は、内外面共にヨコナデを施す。器色は、内外面共に灰褐色を呈する。胎土は密で、雲母を含む。焼成は堅緻である。復原口径 13.8cm を測る。

10010 は、滑石使用の石錘である。長方形をなし、頭部に抉りを施し、反対側は尖っており摩滅が

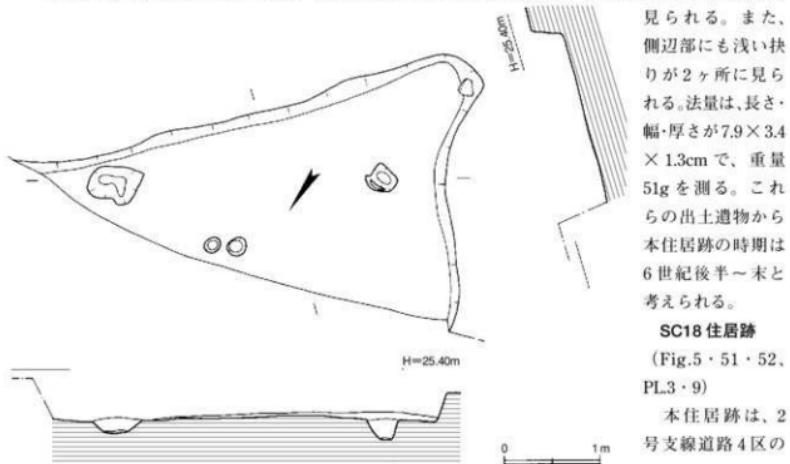


Fig.53 SC19 竪穴住居跡出土状況実測図 (1/50)

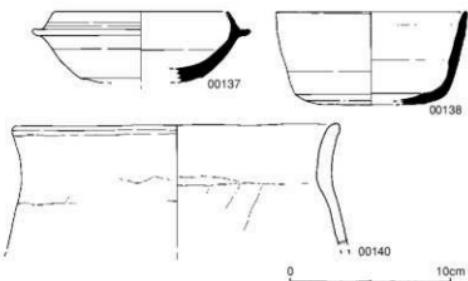


Fig.54 SC19 竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3)

見られる。また、側辺部にも浅い抉りが 2ヶ所に見られる。法量は、長さ・幅・厚さが 7.9 × 3.4 × 1.3cm で、重量 51g を測る。これらの出土遺物から本住居跡の時期は 6世紀後半～末と考えられる。

#### SC18 住居跡

(Fig.5・51・52、PL.3・9)

本住居跡は、2号支線道路 4 区の南端近くに検出された長方形プラン

と考えられるやや大型の住居跡である。東壁と南・北壁の一部が調査区外である。壁の規模は、西壁長 4.8m・南壁長 2.9m 以上・北壁長 5m 以上である。また、壁高は、0.2m 程度を残す。床面では西壁の両コーナーに浅い壁溝が付設される。主柱穴は、明確に壁辺に平行して配置されるものは認められないが、柱穴 1・2 がこれにあたるものか。埋土中からは、

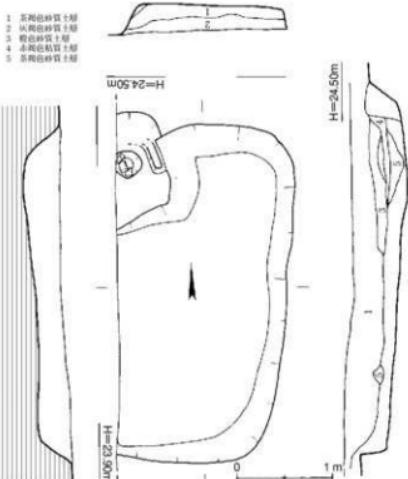


Fig.55 SC20 穫穴住居跡出土状況実測図 (1/50)

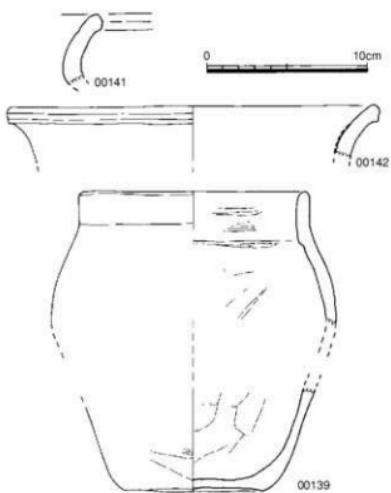


Fig.56 SC20 穫穴住居跡出土遺物実測図 (1/3)

か。器色は、外面が褐灰で、内面はにぶい黄橙色である。胎土は密で、焼成も堅緻である。出土遺物から本住居跡の時期は6世紀末～7世紀初め頃と考えられる。

土師器甕破片と共に高坏・マリ・把手、須恵器甕・蓋杯等が出土した。00129は、低い天井部の須恵器杯蓋である。口縁部との境には弱い段をなす。器面調整は、ヨコナデである。器色は、灰～明灰色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。復原口径は14cmを測る。

00130は、小形の須恵器杯身である。全体に薄造りである。受け部立ち上がりは強く内傾する。器面調整は、内外面共にヨコナデである。器色は、外面が明青灰～灰色で、内面は明青灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。復原受け部径14cmを測る。00131も受け部の立ちあがりの内傾化の著しい須恵器杯身である。底部の約二分の一に回転ヘラケズリを施し、他はヨコナデである。器色は、内外面共に明青灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。復原受け部径14.2cmを測る。00132も須恵器杯身破片である。底部はやや尖り気味で、ほぼ底部全面に回転ヘラケズリを施す。口縁・内面はヨコナデ調整である。器色は、外面がにぶい赤褐色で、内面は明褐色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。復原受け部径14cmを測る。00133も受け部の立ちあがりが非常に弱い須恵器杯身である。調整は、底部下半にヘラケズリを加え、他はヨコナデである。器色は、外面が灰白色で、内面は青灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。受け部復原径13.8cmを測る。00134は、土師器マリである。手捏ね土器である。調整は、指によるナデである。器色は、にぶい黄橙色である。口径9cm・器高5.4cmを測る。00135は、把手破片である。断面は円棒状をなす。器色は、淡赤橙色である。全長4.3cmを測る。

00136は、大型の土師器甕破片である。調整は、内面にヘラケズリが残り、他はナデである。胎土は密で、焼成も堅緻である。復原頂部径20.4cmを測る。

### SC19 住居跡 (Fig.5・53・54, PL.9)

本住居跡は、2号支線道路5区の北端部で検出された長方形プラン？と考えられる不整な住居跡である。プランは、西壁と南壁の一部が調査された。壁規模は、西壁長2.9m以上、南壁長4.7m以上を測る。また、壁高は、0.2m程度を残す。主柱穴などは不明である。埋土内から土師器甕片・高环、須恵器蓋杯等が出土した。

### 出土遺物 (Fig.54)

00137は、須恵器の小形杯身である。受け部もいびつな造りである。外底部に僅かにヘラケズリを

施す。器色は、明青灰～灰白色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。復原口径13.8cmを測る。

00138は、須恵器の小形杯である。調整は、底部外端にヘラケズリを加え、他はヨコナデである。器色は、青灰～灰色である。胎土は密で、焼成は堅緻である。復原口径12.2cmを測る。

00140は、中型の土師器甕である。調整は、内面にナナメのヘラケズリを施し、他はヨコナ

デである。器色はにぶい橙色である。胎土は密で、雲母を含む。復原口径は20.8cmを測る。以上の出土遺物から本住居跡の時期は6世紀末頃と考えられる。

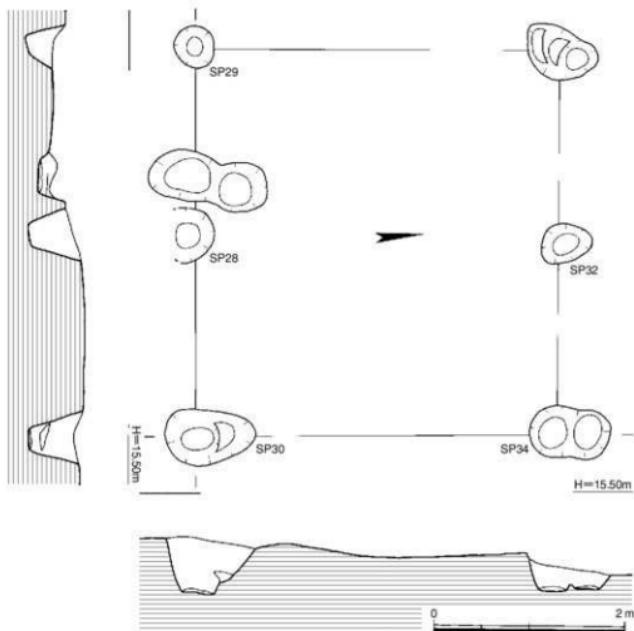


Fig.57 SB01 挖立柱建物出土状況実測図 (1/50)

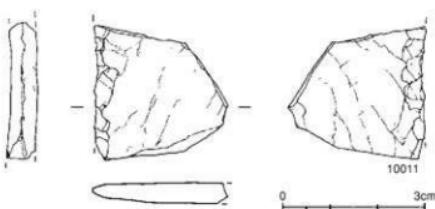


Fig.58 SB01 挖立柱建物出土遺物実測図 (1/1)

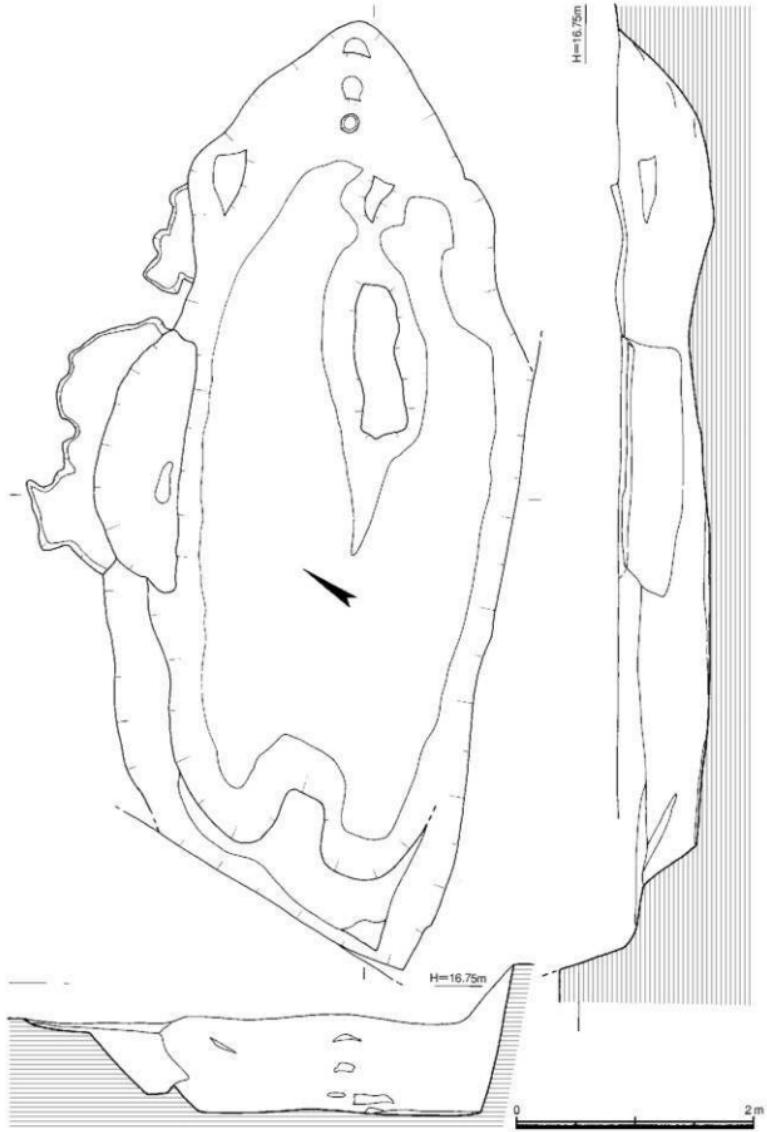


Fig.59 SK01 土坑出土状況実測図 (1/40)

SC20 住居跡 (Fig.5・55・56, PL.9)

本住居跡は、391-1 地区の西壁で検出された長方形プラン？の住居跡である。東壁と南・北壁の一

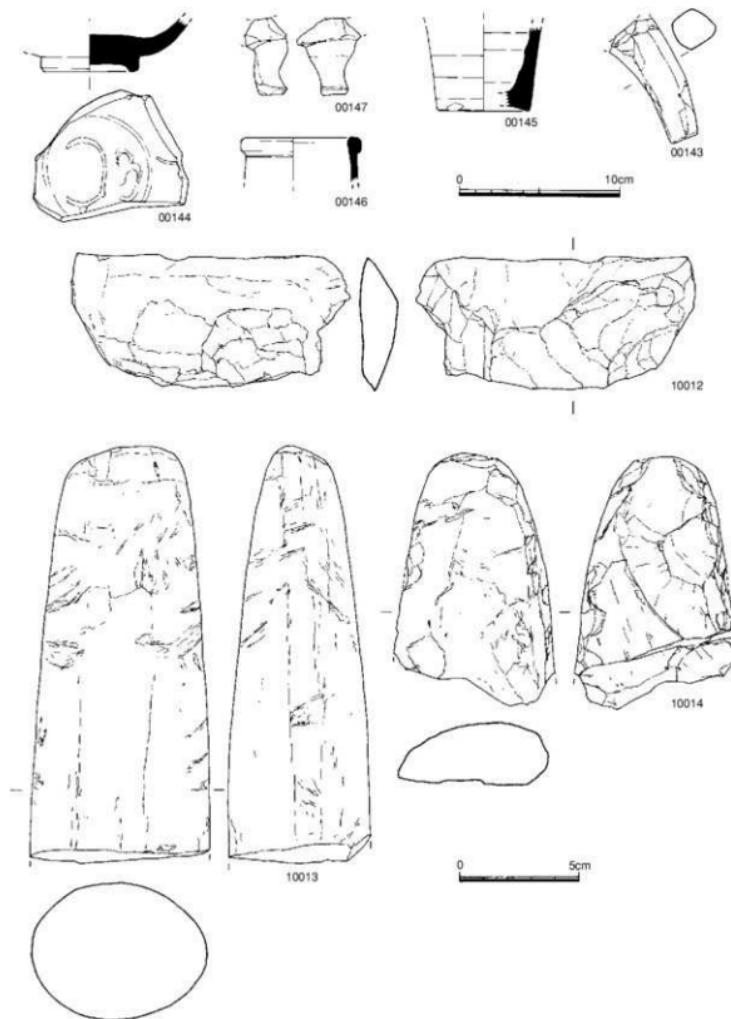


Fig.60 SK01 土坑出土遺物実測図 (1/3・1/2)

部を残す。壁規模は、東壁長3.5m・北壁長1.7m以上・南壁長1.4m以上を測る。また、壁高は、0.4～0.5mを残す。北壁にカマド状の施設が残るが、やや東よりの一と考えられる。床面には他の施設は見あたらない。埋土内より土師器甕破片や黒曜石石核などが少量出土した。

出土遺物 (Fig.56)

00139は、やや底部が上げ底の土師器甕である。口縁は直立し、胴の肩が張る。胴部内面にヘラケズ

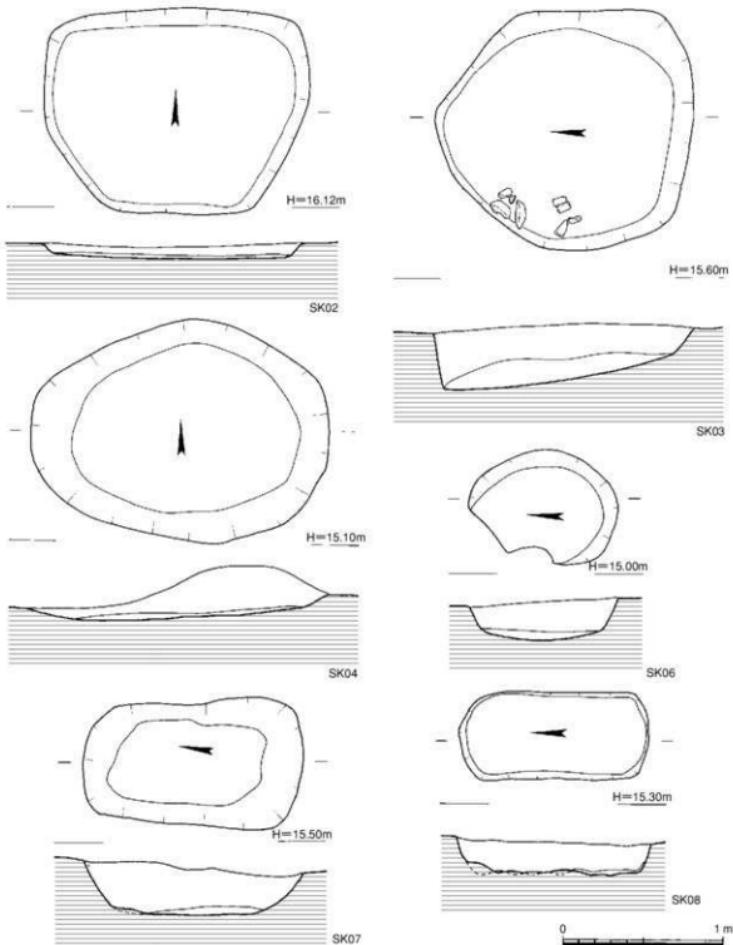


Fig.61 SK02・03・04・06・07・08 土坑出土状況実測図 (1/30)

りが残り、他はヨコナデ・ナデである。器色は、灰褐からにぶい橙色である。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径 14.6cm・推定器高 19.2cm を測る。**00141** は、擬須恵土師器の甕口縁部破片である。端部は角張った仕上げである。調整はヨコナデである。器色は、橙～にぶい橙色を呈する。胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。**00142** も同じく擬須恵土師器の甕破片である。調整はヨコナデである。器色は、にぶい赤橙～橙色である。胎土は粗で、焼成は堅緻である。復原口径は 23.8cm を測る。これらの出土遺物から本住居跡の時期は、6 世紀後半と考えられる。

## 2. 掘立柱建物 (Fig.4・57・58)

本建物は、2 号支線道路 1 区で検出された  $1 \times 2$  間規模の南北棟建物である。掘方規模は、SP29 が径 0.4m の円形・SP28 が径 0.55m の円形・SP30 が径 0.6m・深さ 0.6m 程度の長円形。SP34 が径 0.55m・深さ 0.4m の円形・SP32 が径 0.6m の円形をなす。また、南北の桁行きは心身で 4.2m を測り、柱間は 0.2 ～ 0.22m である。また、東西の梁間は 3.8m 程度を測る。本建物の時期を示す土器類は掘方などでは伴っていないが、SD02 溝との切り合いから中世期と考えられる。

### 出土遺物 (Fig.58)

**10011** は、サヌカイト使用のエンドスクレイパーと考えられる。不整な剥片の端部の両面からリタッチを加え、刃部を作り出している。SP30 内出土。

## 3. 土坑 (Fig.4・5・59～88、PL2～4・10～13)

**一概要一** 調査区全体では、42 基の土坑が検出された。内訳は、2 号支線道路 1 ～ 4 区で 27 基 (SK01 ～ 27)、6 号支線道路 1・2 区で 5 基 (SK37 ～ 41)、7 号支線道路で 4 基 (SK28 ～ 30・42)、8 号支線道路 1 基 (SK31)、391-1 地区で 5 基 (SK32 ～ 36) が検出された。土坑は、調査区全域で散発的に検出され、平面形は、長方形や不整円形のものが見られ、総じて不整なものが多い。規模は、比較的大型で、調査区内に収まらないものも多い。

### SK01 土坑 (4・59・60、PL10・13)

本土坑は、2 号支線道路 1 区南端で検出された不整形の大型土坑である。短辺長が 3.8m・長辺長 7.4m・深さ 0.8m を測る。壁の立ち上がりは緩く、床面も不安定である。埋土中より龍泉窯青磁や褐釉陶器、瓦質土器それに弥生期の磨製石斧・石包丁未成品・黒曜石チップなどが出土した。

### 出土遺物 (Fig.60)

**00143** は、土師質土器土鍋の脚破片である。断面は不整な隅丸方形をなす。残存長 7.9cm を測る。器色は、にぶい橙色である。**00144** は、龍泉窯青磁碗破片である。見込みに花文を描く。また、外底部はケズリを加え、露胎となる。釉は明オリーブ灰色に見える。高台部径 6.1cm 強を測る。**00145** は、長胴の壺底部である。外面には灰色釉をかける。露胎部は青灰色を呈する。また、底部端に目跡が残る。朝鮮青磁か。底部径 6cm を測る。**00146** は、施釉陶器瓶破片である。口縁は外側に肥厚させて玉縁状となる。内外面共に暗赤褐色釉をかける。露胎部では灰色を呈する。胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。復原口径 8.7cm を測る。**000147** は、龍泉窯青磁香炉<sup>1</sup>である。短い脚部のみの破片である。外面には緑灰色の釉をかけ、底部端及び脣付・一部に残る本体部分の内面は灰白色の露胎となっている。胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。**10012** は、打削整形途中の石包丁未成品である。残存長 11.7cm

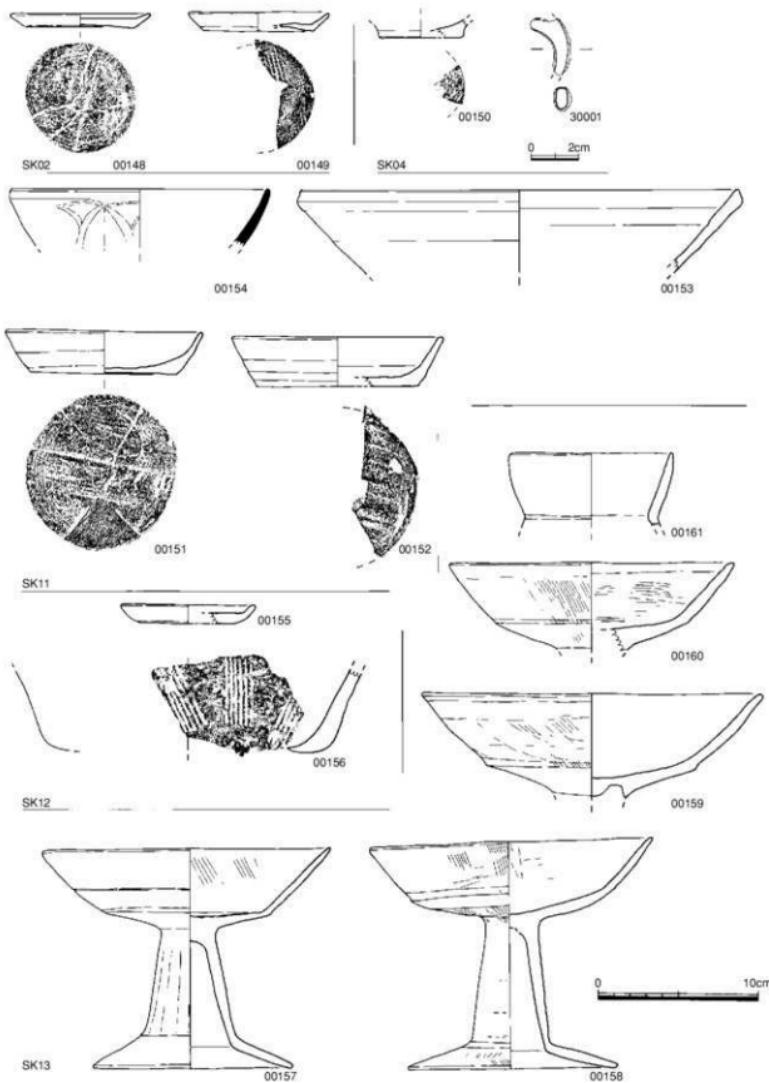
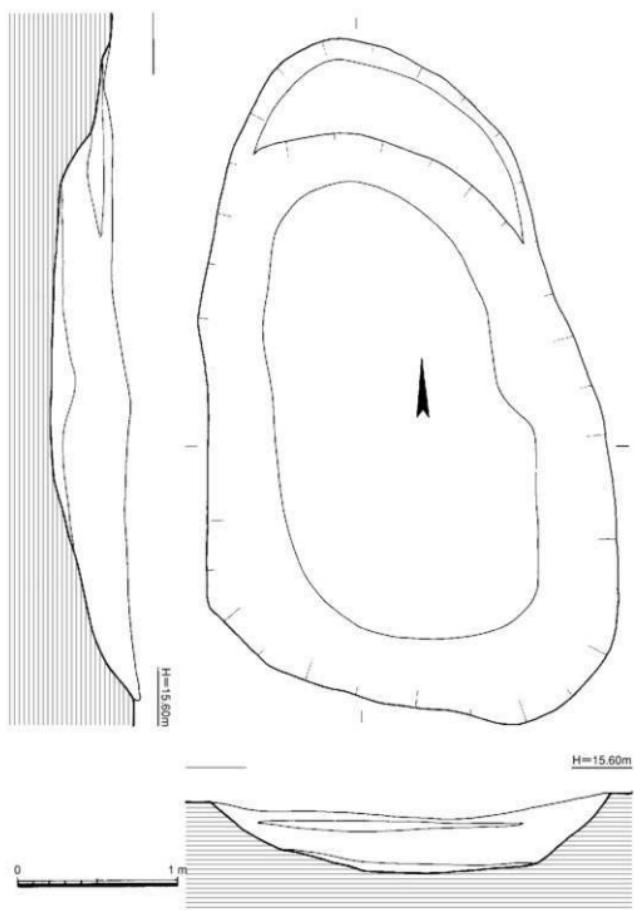


Fig.62 SK02・04・11・12・13 土坑出土遺物実測図 (1/3・1/2)

を測る。完成形は半月形石包丁となろうか。**10013**は、今山産太形蛤刃石斧である。刃部を失う。残存する上半頭部には製作時の剥離痕がやや多く残ることから使用時に柄穴に挿入された部分と考えられる。玄武岩製。残存長17.5cm・重さ1266gを測る。**10014**も磨製石斧頭部破片である。砥石として二次使用されている。玄武岩製か。残存長10.6cm・重さ261gを測る。

#### SK02 土坑 (Fig.4・61・62)

本土坑は、2号支線道路1区中央で検出した不整円形の浅い土坑である。短辺長1.3m・長辺長1.7m・深さ0.1mを測る。埋土内からは土師器系切り皿が出土した。



#### 出土遺物 (Fig.62)

**00148**は、小形の土師器皿である。系切り離し後の板目が残る。調整はヨコナデである。器色は、にぶい橙色である。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径9cm・器高0.9cmを測る。  
**00149**も同様の土師器皿である。器色は、にぶい橙色～明褐色である。胎土は密で、茶色粒子を含む。口径9cm・器高1.2cmを測る。

#### SK03 土坑

(Fig.4・61)

本土坑は、2号支線道路1区のほぼ中央で検出された不整円形の土坑である。その規模は、短辺長1.3m・

Fig.63 SK05 土坑出土状況実測図 (1/30)

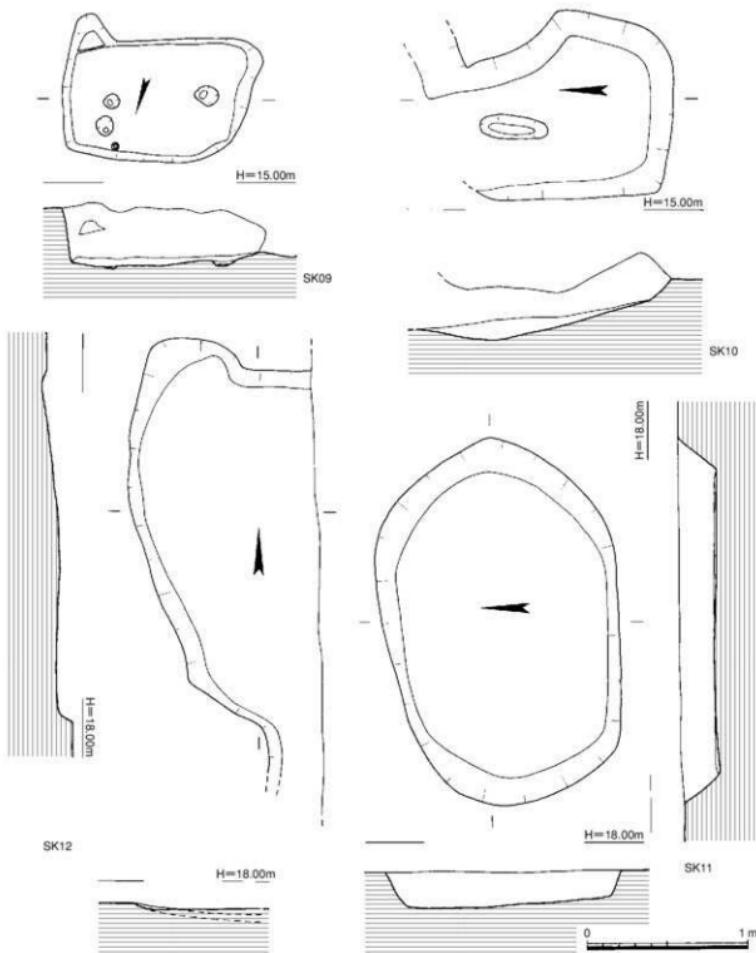


Fig.64 SK09・10・11・12 土坑出土状況実測図 (1/30)

長辺長 1.7m・深さ 0.32m を測る。埋土中から土師器壺破片が出土している。図示可能な遺物は無い。

#### SK04 土坑 (Fig.4・61・62)

本土坑は、2号支線1区南側で検出された長円形をなす土坑である。その規模は、短辺長 1.3m・長辺長 1.9m・深さ 0.4m を測る。埋土中から糸切り土師器皿破片や鉄輪等が出土した。

#### 出土遺物 (Fig.62)

00150は、糸切り土器皿破片である。外底部に板目を残す。器色は、にぶい橙色である。胎土は密で、焼成も堅緻である。復原底部径5.4cmを測る。30001は、不明の鉄輪である。腐食のために両端部を失う。断面形は長円形をなす。残存長2.4cmを測る。

SK05 土坑 (Fig.4・63、PL.10)

本土坑は、2号支線道路1区の北端部近くで検出された長円形をなす大型土坑である。その規模は、

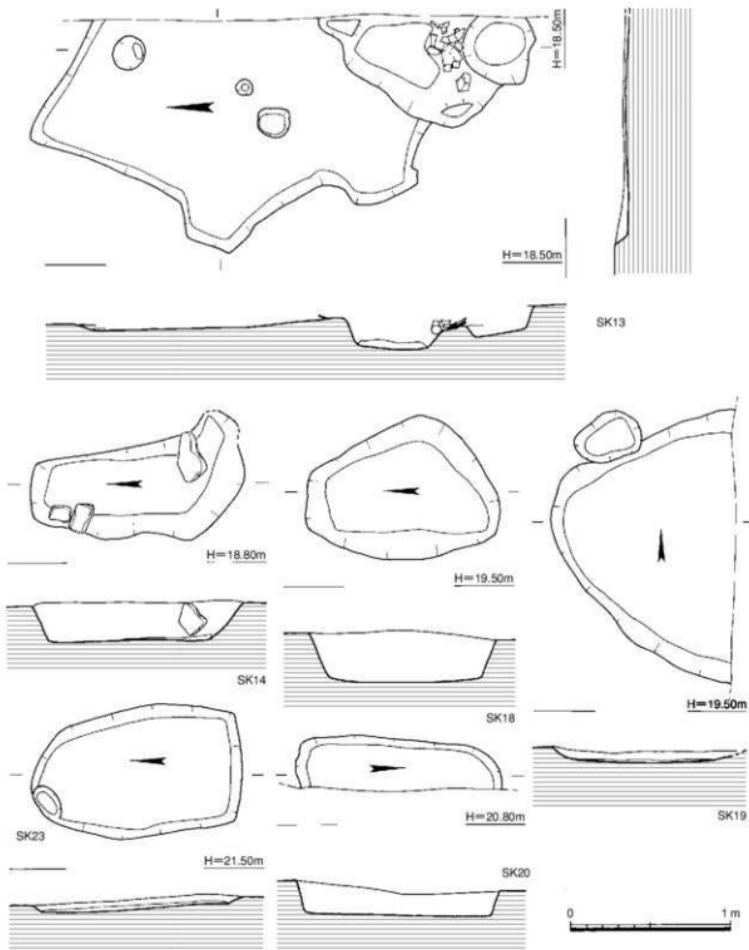


Fig.65 SK13・14・18・19・20・23 土坑出土状況実測図 (1/30)

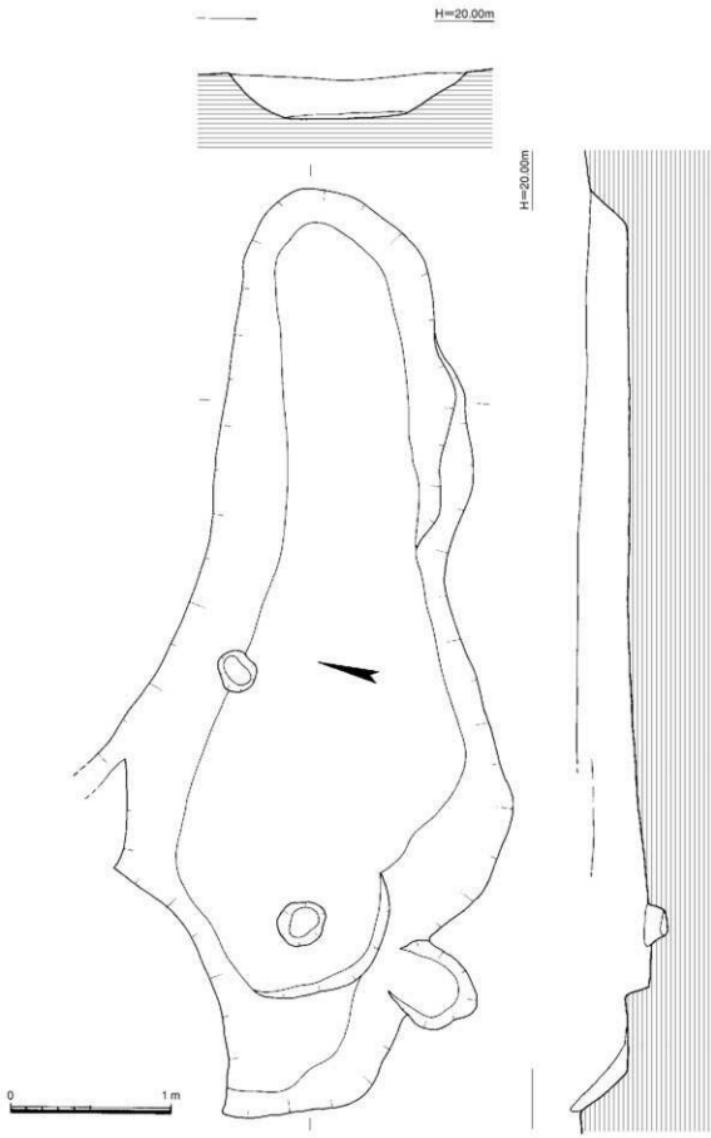


Fig.66 SK15 土坑出土状況実測図 (1/30)

短辺長が 2.6m・長辺長 4.4m・深さ 0.55m を測る。断面は皿状をなし、埋土中からは古墳時代土師器甕破片が少量出土した。

#### SK06 土坑 (Fig.4・61)

本土坑は、2号支線道路1区の北端部で検出された小型の円形土坑である。その規模は、径 0.9m・深さ 0.24m である。埋土中から中世期の土師器破片が出土した。

#### SK07 土坑 (Fig.4・61, PL.10)

本土坑は、2号支線道路1区の北端で検出された長円形の土坑である。その規模は、短辺長 1.1m・長辺長 1.4m・深さ 0.15m である。埋土中より中世期の土師器破片が出土した。

#### SK08 土坑 (Fig.4・61, PL.10)

本土坑は、2号支線道路1区の北端部で検出された小型の長方形土坑である。その規模は、短辺長 0.6m・長辺長 1.2m・深さ 0.42m を測る。埋土内からは遺物の出土は無かった。

#### SK09 土坑 (Fig.4・64, PL.10)

本土坑も2号支線道路1区の北端で検出された長方形の土坑である。その規模は、短辺長 0.8m・長辺長 1.1m・深さ 0.11m を測る。埋土中からは古墳時代土師器小破片が少量出土したのみである。

#### SK10 土坑 (Fig.4・64, PL.10)

本土坑も2号支線道路北端で検出された不整形の土坑である。その規模は、短辺長が 1.2m・長辺長 1.6m・深さ 0.1m を測る。埋土中からは古墳時代土師器小破片が少量出土した。

#### SK11 土坑 (Fig.4・62・64, PL.11)

本土坑は、2号支線道路2区の北端で検出された長円形の大型土坑である。その規模は、短辺長が 1.5m・長辺長 2.4m・深さ 0.2m を測る。埋土中からは龍泉窯青磁や褐釉陶器系切り土師器皿等が出土した。

**出土遺物 (Fig.62)** 00151 は、系切り土師器皿である。口縁端にスス付着が見られる。外底部には板目が残る。器色は、外面がにぶい橙色で、内面は明褐色である。胎土は密で、金雲母を含む。焼成は堅緻密である。口径 12.6cm・器高 2.7cm を測る。00152 も土師器皿である。全体にススが付着する。器色は、褐色である。胎土は密である。口径 13.4cm・器高 3.1cm を測る。00153 は、束縛系擂鉢である。器色は、外面が暗灰色で、内面は灰白色を呈する。胎土に石英・長石粒を若干含む。焼成はやや軟質である。口径 28.4cm を測る。00154 は、龍泉窯青磁碗である。外面に草花文を描く。オリーブ灰色の釉を厚くかける。復原口径は 16.cm を測る。

#### SK12 土坑 (Fig.4・62・64)

本土坑は、2号支線道路2区の北端で検出された不整形の土坑である。その規模は、短辺長 0.7m・長辺長 2.5m・深さ 0.2m を測る。埋土中からは龍泉窯青磁、土師器皿、擂り鉢等が出土した。

**出土遺物 (Fig.62)** 00155 は、浅い、小型の土師皿破片である。器色は、褐色である。胎土はやや粗である。復原口径 .6cm・器高 1.2cm を測る。00156 は、土師質の擂り鉢底部破片である。6本単位の櫛歯で摺り目を設ける。器色は、灰白～淡橙色を呈する。胎土は密である。

#### SK13 土坑 (Fig.4・62・65, PL.11)

本土坑は、2号支線道路2区の中位で検出された不整形土坑である。その規模は、短辺長 1.4m・長辺長 2m 以上・深さ 0.15m を測る。埋土中から土師器高杯・小型丸底壺が出土している。

**出土遺物 (Fig.62)** 00157～00160 は、土師器高杯である。杯部の口縁と底部は緩い段をなし、脚部も確立した製品である。器色は、にぶい橙色を呈する。口径 18cm 前後・器高 14cm 前後のサイズである。00161 は、内湾気味口縁を持つ丸底壺である。器色は灰黄褐色である。口径 10.4cm を測る。

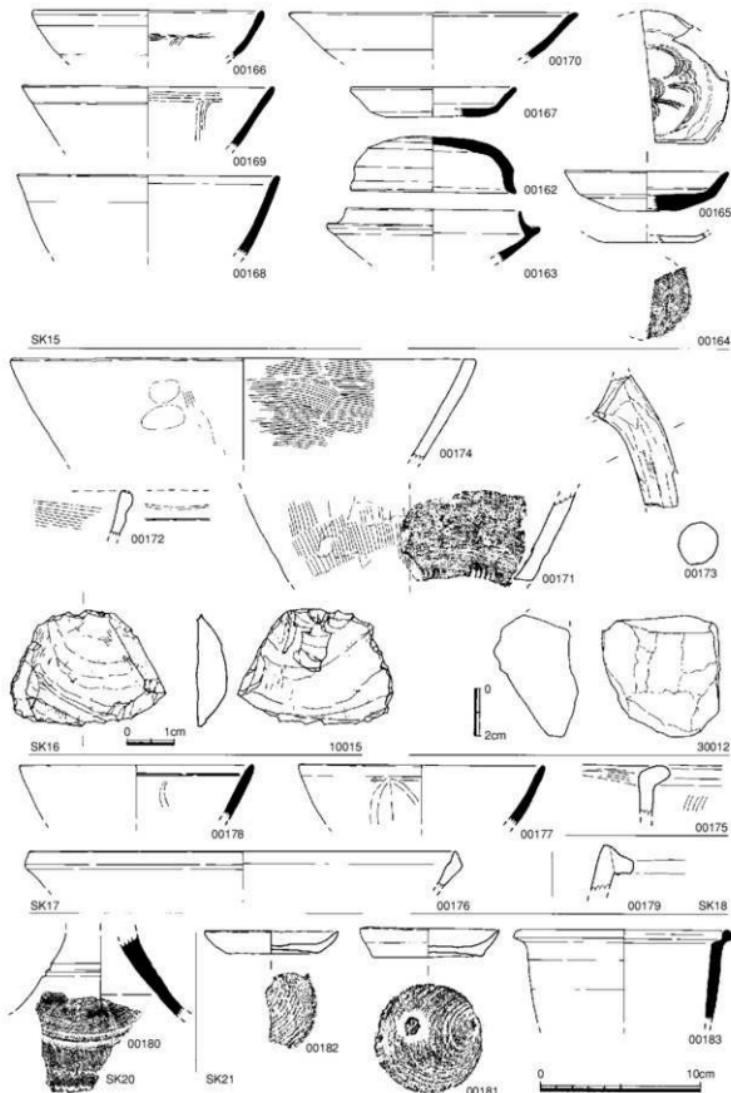


Fig.67 SK15・16・17・18・20・21 土坑出土遺物実測図 (1/3・1/2・1/1)

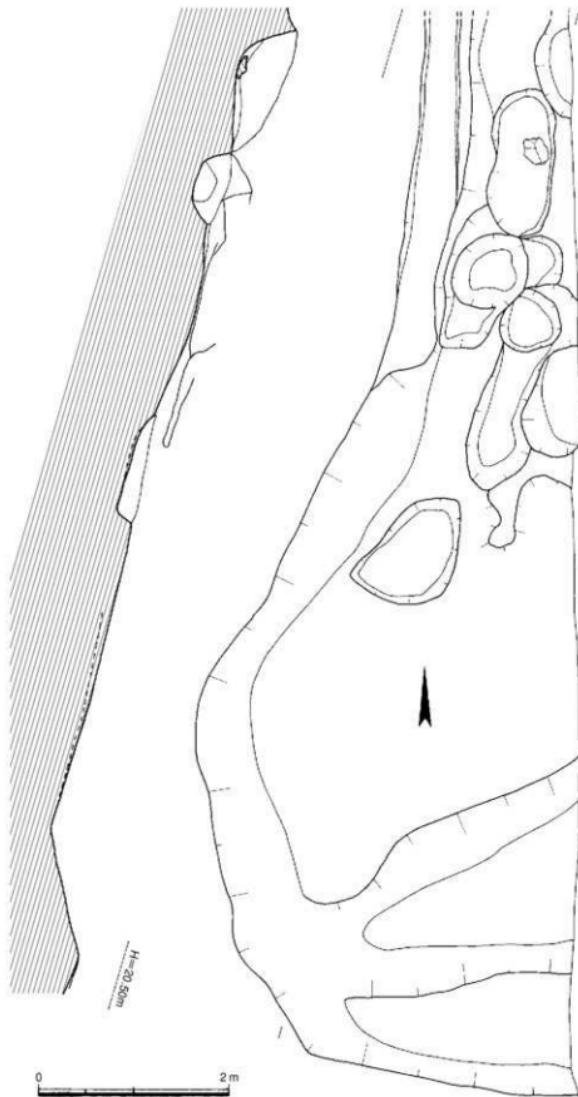


Fig.68 SK16 土坑出土状況実測図 (1/50)

#### SK14 土坑

(Fig.4・65)

本土坑は、2号支線道路2区の南端で検出された不整形の土坑である。埋土中より土師器甕破片が少量出土した。

#### SK15 土坑

(Fig.4・66・67・94)

本土坑は、2号支線道路3区の北端部の近くで検出された不整形の大型土坑である。その規模は、短辺長が2.4m・長辺長5.8m・深さ0.34mを測る。埋土中からは龍泉窯青磁、白磁、土師器皿、北宋錢等が出土した。

#### 出土遺物

(Fig.67・94)

00164は、糸切り土師器皿で、復原底部径5.6cmを測る。また、龍泉窯青磁碗(00166・00168・00169)や同皿(00165・00167)等が見られる。碗類は、口径が15cm弱～16cmで、皿類は10cm強を測る。白磁00170は、明緑灰の釉をかける。口径はやや大きく14cmを測る。

30011は、北宋錢の

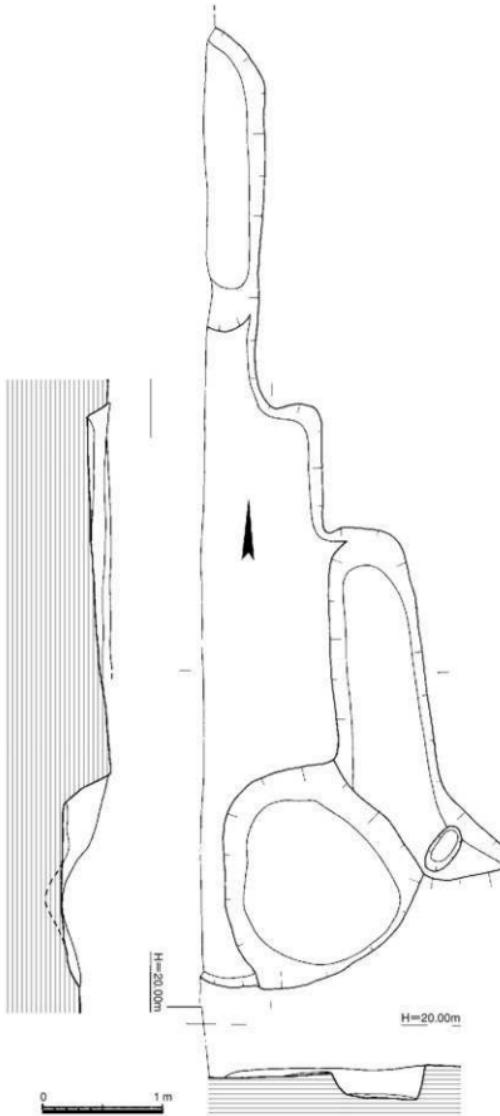


Fig.69 SK17 土坑出土状況実測図 (1/40)

崇寧通寶（1102～1106年）  
が1点出土している。

#### SK16 土坑

(Fig.4・67・68)

本土坑も2号支線道路3区の北端部で検出した不整形の大型土坑である。東側は調査区外となる。床面は段をなし、溝状にうねる。また、幾つもの小土坑が見られる。その規模は、短辺長4.5m・長辺長4.3m以上を測る。埋土中からは土師質拂り鉢、土鍋、火舍、平瓦、鉄滓や須恵器蓋杯等が出土した。

#### 出土遺物 (Fig.67)

00171は、土師質の拂り鉢である。内面は良く摩滅する。00172は、土鍋口縁部破片である。また、00173は、瓦質の足鍋の脚破片である。断面形は丸い。器色は灰白色を呈する。00174は、土鍋の口縁部破片である。外面に指オサエ、内面荒いヨコハケメを施す。復原口径29.6cmを測る。10015は、黒曜石使用の加工痕のある剥片である。30012は、小型鉄滓である。重さ92gを測る。

#### SK17 土坑

(Fig.4・67・69)

本土坑は、2号支線道路3区の北端部で検出された不整形の土坑である。その規模は、短辺長1m以上・長辺長8mを測る。西側は調査区外である。埋土中からは、龍泉窯青磁、瓦質土器、土鍋等が出土した。

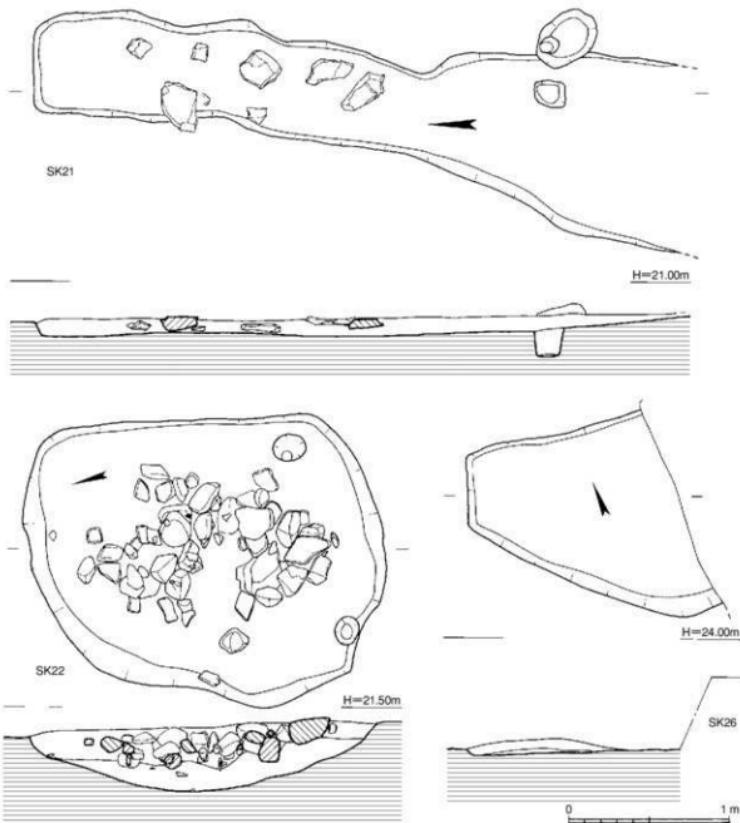


Fig.70 SK21・22・26 土坑出土状況実測図 (1/30)

**出土遺物 (Fig.67)** 00175は、土師質土器の土鍋破片である。00176は、東播系の拂り鉢破片である。器色は、灰白色である。復原口径 27.2cm を測る。また、00177・00178は、龍泉窯青磁碗である。施釉は厚く、緑灰ーオリーブ灰色釉をかける。口径はそれぞれ 15.6cm・14.8cm を測る。

#### SK18 土坑 (Fig.4・65・67)

本土坑は、2号支線道路3区の北端部で検出された不整形の小型土坑である。その規模は、短辺長 0.9m・長辺長 1.2m・深さ 0.34m を測る。埋土内からは土師器甕破片や土鍋破片が出土した。

#### 出土遺物 (Fig.67) 00179は、土師質の土鍋口縁部の小破片である。器色は、褐灰色である。

#### SK19 土坑 (Fig.4・65・71)

本土坑は、2号支線道路3区の北端部で検出された不整形の土坑である。その規模は、短辺長 1.7m・

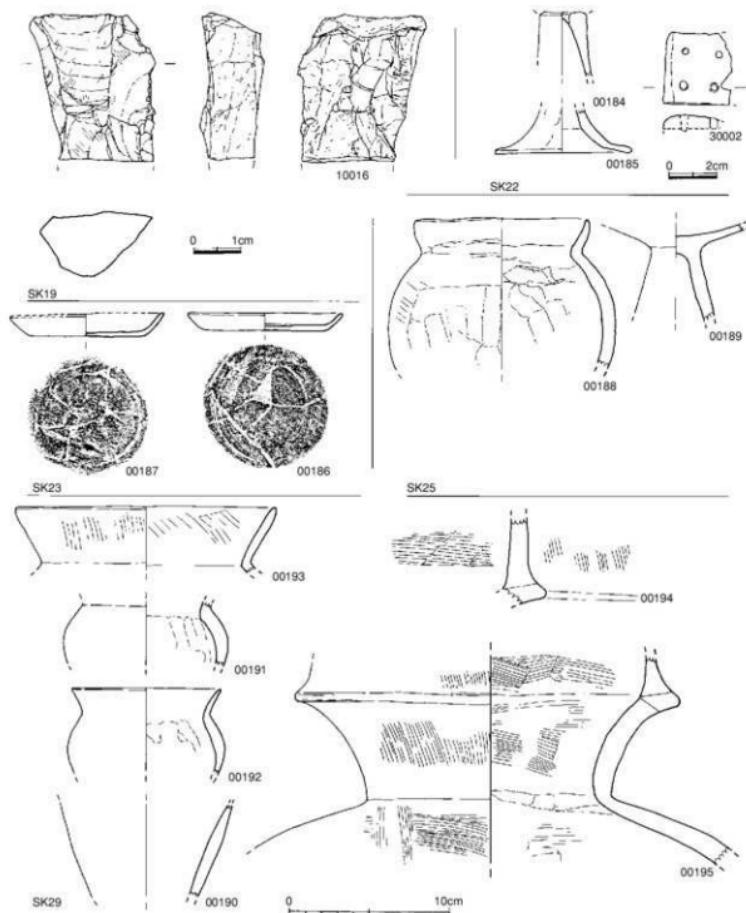


Fig.71 SK19・22・23・25・29 土坑出土遺物実測図 (1/3・1/2・1/1)

長辺長 1.1m 以上・深さ 0.1m を測る。埋土内からは古墳時代土師器の小破片が出土した。また、黒曜石使用の石核 (Fig.71) 10016 も見られる。

#### SK20 土坑 (Fig.4・65・67, PL.5)

本土坑も 2 号支線道路 3 区の中位で検出された長方形の小型土坑である。その規模は、短辺長 0.3m・長辺長 1.3m を測る。埋土中からは須恵器高環破片が出土した。

出土遺物 (Fig.67) 00180 は、小型の須恵器脚部破片である。付け根にカキメを施し、裾部には細

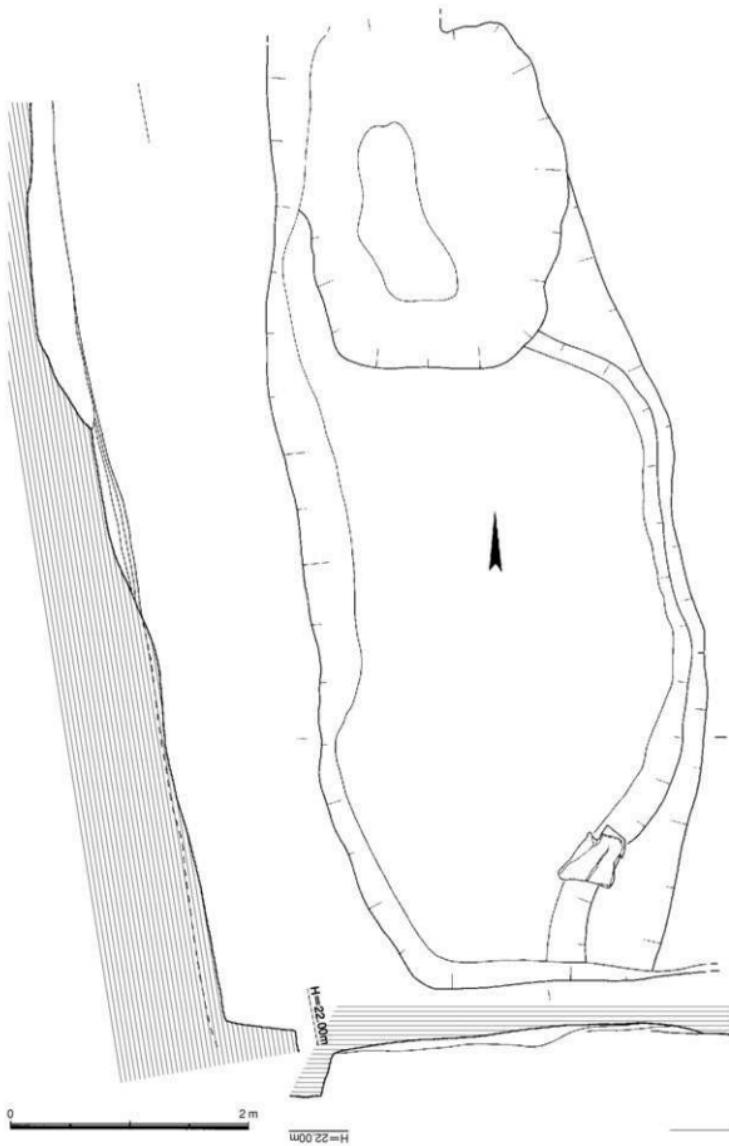


Fig.72 SK24 土坑出土状況実測図 (1/40)

かい波状文を巡らす。器色は、青灰色である。胎土は密で、焼成も堅緻である。

#### SK21 土坑 (Fig.4・67・70、PL.11)

本土坑は、2号支線道路3区の南側で検出された溝状の大型土坑である。内部には角礫が多く出土した。規模は、短辺長0.6m・長辺長4.2m・深さ0.07mである。埋土内より黒褐釉陶器、褐釉陶器、土師器皿等が出土した。

出土遺物 (Fig.67) 00181・00182は、小型の糸切り土師器皿である。また、00183は、褐釉陶器盤口壺である。褐灰～灰オリーブ色釉を内外面にかける。口径は14cmを測る。

#### SK22 土坑 (Fig.4・70・71、PL.11)

本土坑も2号支線道路3区の南側で検出された長方形の大型土坑である。規模は、短辺長1.8m・長辺長2.2m・深さ0.27mを測る。内部には玄武岩扁平礫とともに土師器甕・高环・板状鉄器・炭化木等が投入されている。

出土遺物 (Fig.71) 00184・00185は、土師器高环の脚部破片である。また、30002は、鉄製金具で、四方の孔は鉛止めの痕跡か。

#### SK23 土坑 (Fig.4・65・71、PL.11)

本土坑も2号支線道路3区の南側で検出された浅い長方形の土坑である。規模は、短辺長0.8m・長辺長1.3m・深さ0.05mを測る。埋土中より土師器皿が出土した。

#### 出土遺物 (Fig.71) 00186・00187は、糸切りの土師器皿である。口径はいずれも9.8cmを測る。

#### SK24 土坑 (Fig.4・72、PL.12)

本土坑も2号支線道路3区の南端部で検出された大型の長方形土坑である。規模は、短辺長が3.2m・

長辺長8mを測る。埋土中から拂り鉢、土師器甕、須恵器甕破片、磨製石斧等が出土したが細片である。

#### SK25 土坑

(Fig.5・71・73)

本土坑は、2号支線道路4区の北端部で検出された不整形な大型土坑である。規模は、短辺長が2.4m・長辺長4mを測る。埋土内からは須恵器甕・蓋杯、土師器甕・高环、手捏ね土器等が出土した。

#### 出土遺物 (Fig.71)

00188は、口縁が内湾する土師器甕で、外面へラケズリを施

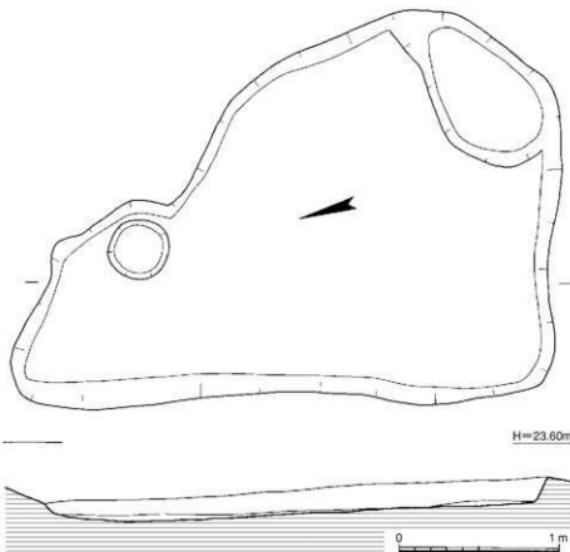


Fig.73 SK25 土坑出土状況実測図 (1/30)

す。口径は11cmを測る。00189は、土師器高环の脚部破片である。器色は、にぶい橙色を呈する。

#### SK26 土坑 (Fig.5・70)

本土坑は、2号支線道路4区の北端近くで検出された小型の不整形土坑である。東側が未調査である。

規模は、短辺長1.3m・長辺長1.5m以上を測る。埋土中からは古墳時代土師器甕破片が出土した。

#### SK27 土坑 (Fig.5・74)

本土坑は、2号支線道路4区の南端部で検出した長方形?の土坑である。規模は、短辺長1.4m以上・長辺長2.5m以上を測る。埋土中からは土師器甕や弥生前期甕破片が少量出土した。

#### SK28 土坑 (Fig.5・74)

本土坑は、7号支線道路の北側で検出した長方形の土坑である。規模は、短辺長1.8m・長辺長2.9mを測る。埋土中からは土師器手捏ね土器甕の破片が出土した。

#### SK29 土坑 (Fig.5・71・75)

本土坑は、7号支線道路北側で検出された長方形の大型土坑である。規模は、短辺長3.5m・長辺長7.3mを測る。埋土中からは須恵器蓋杯、土師器甕・高环・小型丸底壺・二重口縁壺等が出土した。

**出土遺物 (Fig.71)** 00190・00191・00192は小型丸底壺破片である。また、00193は、薄手の土師器甕破片である。外面にススが付着する。器色は、淡黄橙色を呈する。口径は16.6cmを測る。00194・00195は分厚い二重口縁壺破片である。

#### SK30 土坑 (Fig.5・76～79)

本土坑は、7号支線道路の西端で検出された長方形の大型土

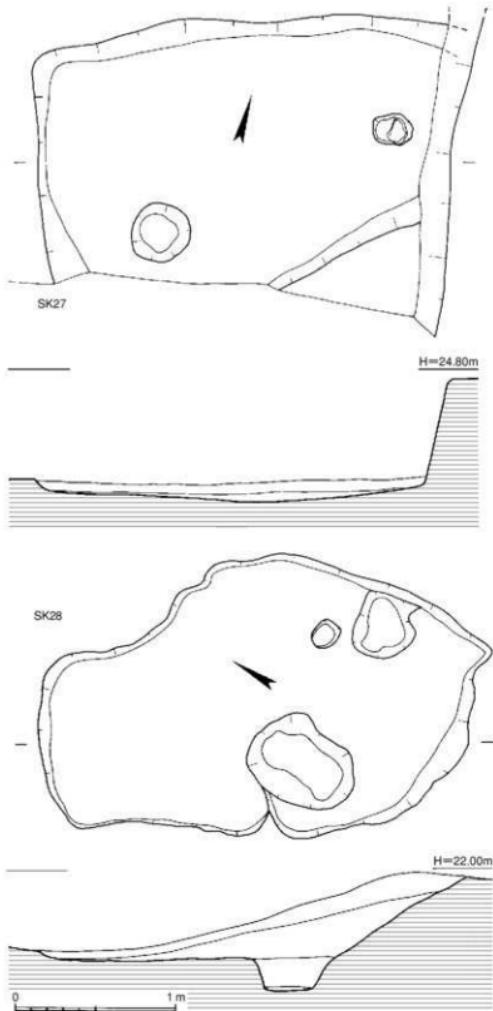


Fig.74 SK27・28 土坑出土状況実測図 (1/30)

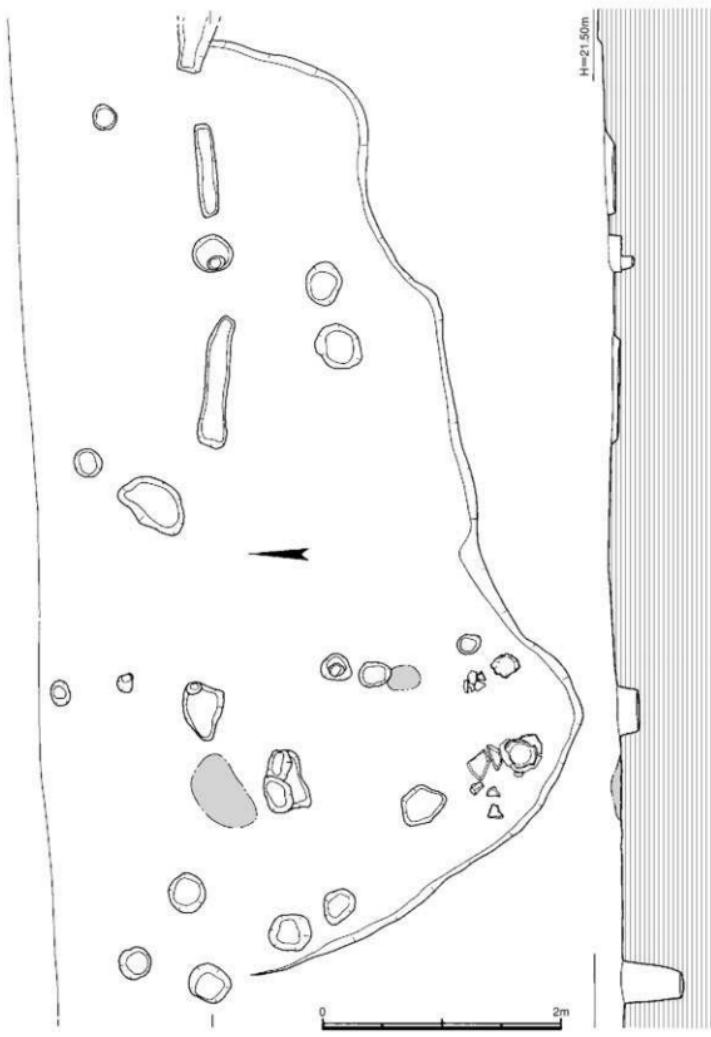


Fig.75 SK29 土坑出土状況実測図（1/40）

坑である。規模は、短辺長3.4m・長辺長7.3mを測る。埋土内からは須恵器蓋杯・土師器甕・高环・小型丸底壺・鉢・瓶、フレイク等が出土した。

出土遺物 (Fig.77～79)　須恵器杯身には00196がある。また、土師器小型丸底壺には00198・00199・

00200 がある。鉢 00197 や高杯 00201 ~ 00205 はややバリエーションをもつ。また、甕類は、小型から中型までの出土があり、00206・00207・00208・00209・00210・00211・00212・00213・00214 を図示する。また、石器では、黒曜石利用の縦長剥片 10017、二次加工のある黒曜石使用の剥片 10018、使用痕のあるサスカイト使用の大型剥片等が知られる。

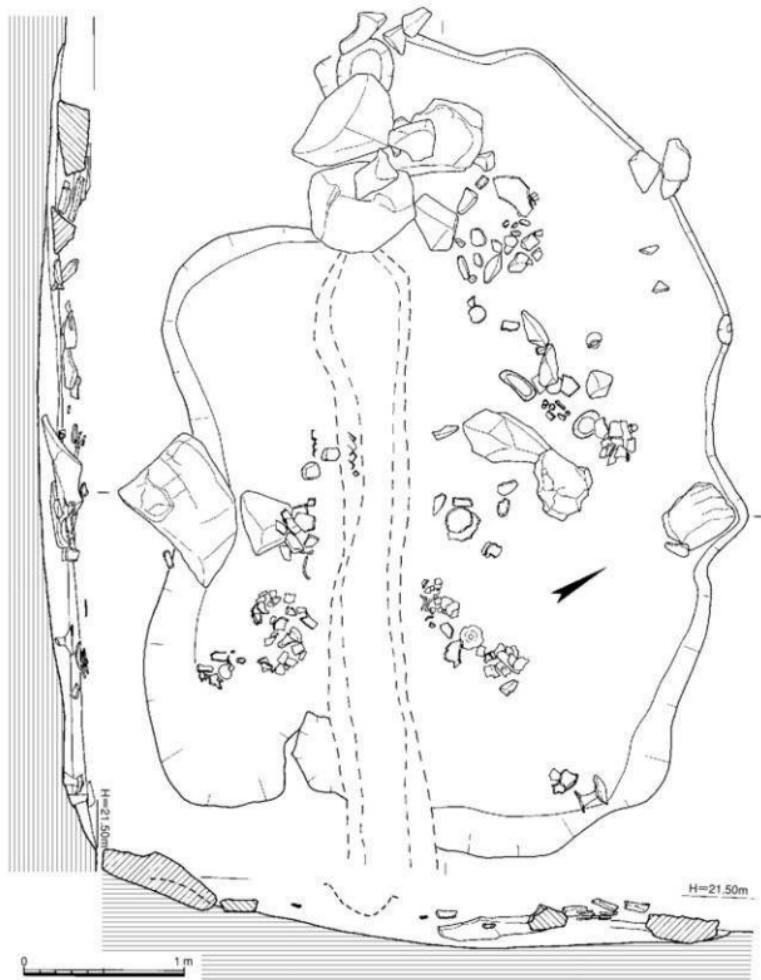


Fig.76 SK30 土坑出土状況実測図 (1/30)

SK31 土坑 (Fig.5・80・83)

本土坑は、8号支線道路の西端で検出された大型の不整形土坑である。規模は、短辺長が3m・長辺長6.6m以上を測る。埋土中からは、須恵器蓋杯・甕、土師器甕、土製白玉、スクレーパー、玄武岩礫等が出土した。

出土遺物 (Fig.83) 00215は、径が $1.4 \times 1.3\text{cm}$ ・長さ1.5cm・重さ3.01gを測る土玉である。器色は、にぶい橙色である。00216は、器壁の厚い甕口縁部破片である。口径は、18cmを測る。10020は、サヌカイト使用のスクレイパーである。

SK32 土坑 (Fig.5・81・83, PL.11)

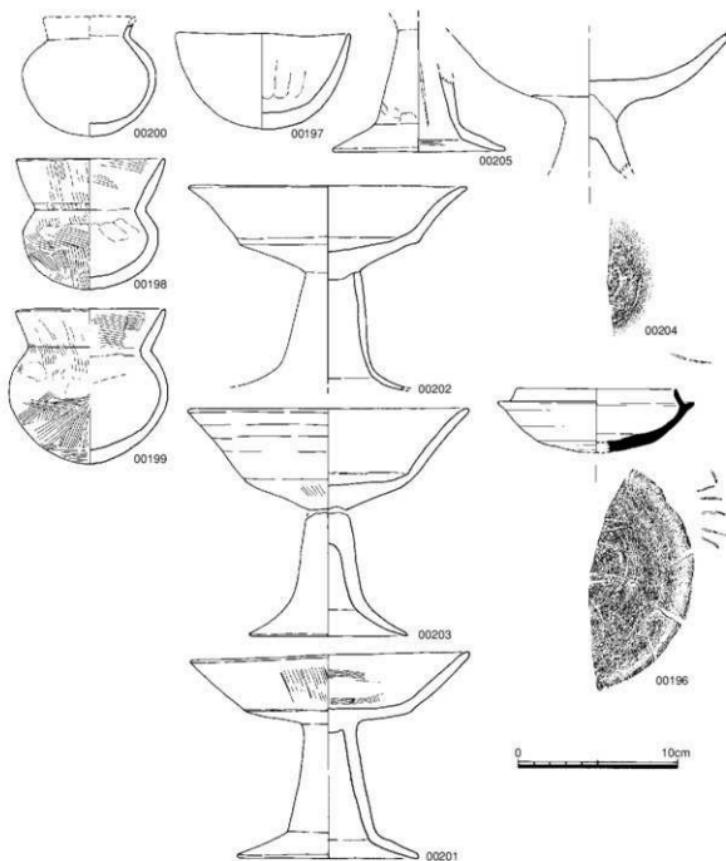


Fig.77 SK30 土坑出土遺物実測図 (1) (1/3)

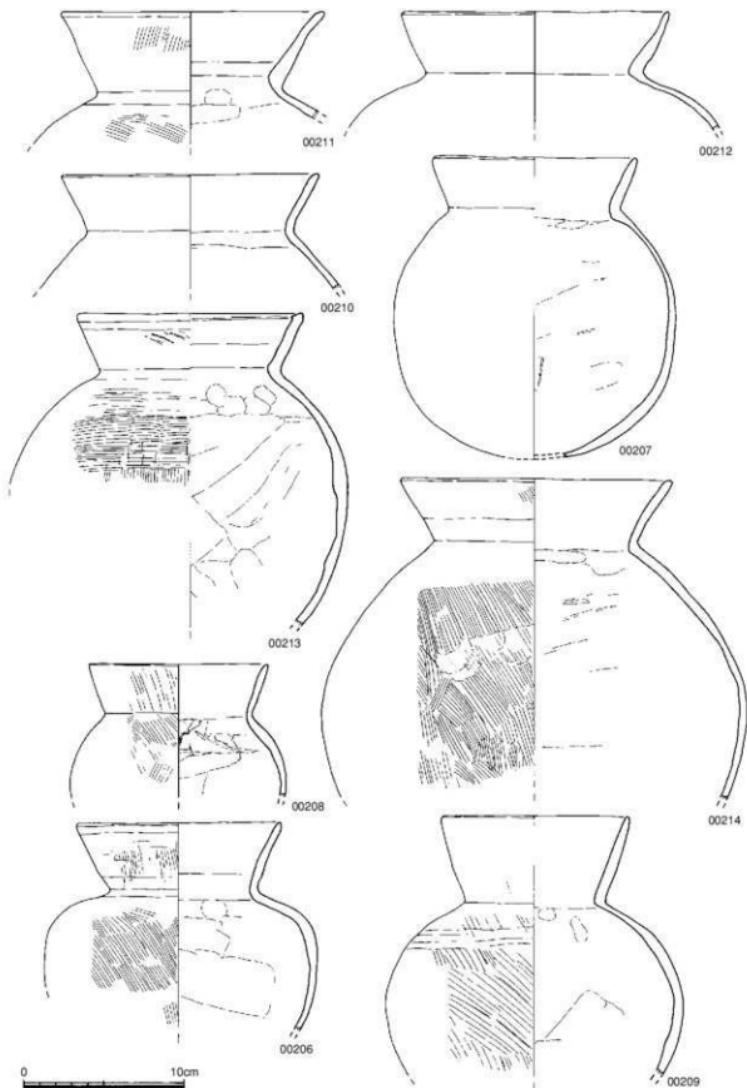


Fig.78 SK30 土坑出土遺物実測図 (2) (1/3)

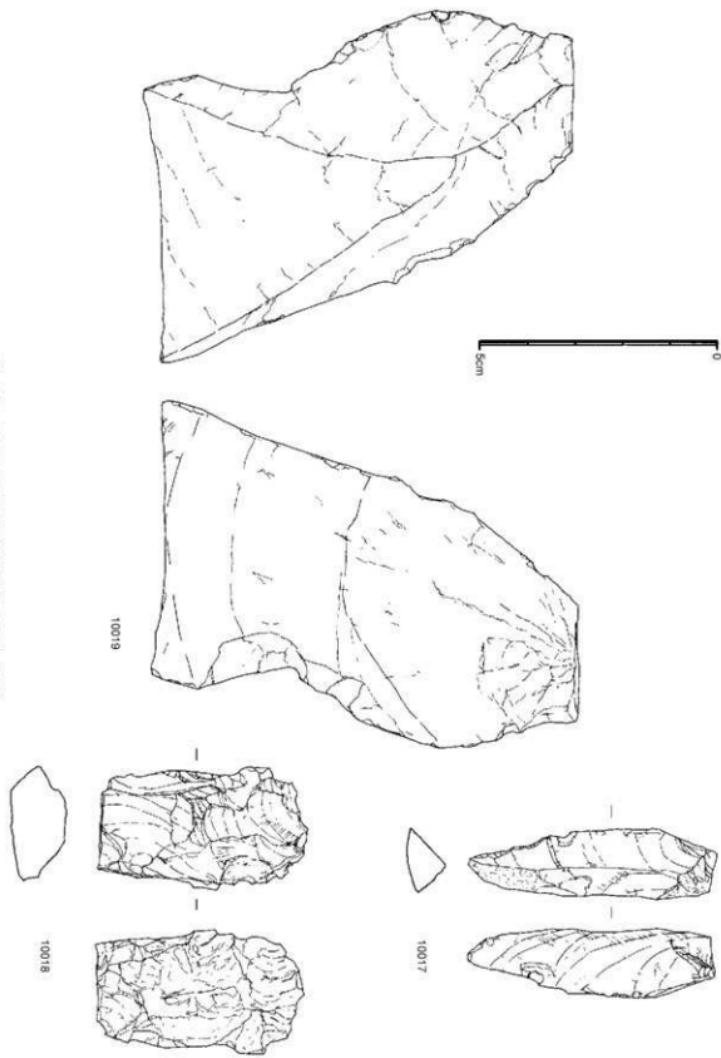


Fig.79 SK30 土坑出土遺物実測図 (3) (1/1)

本土坑は、391-1 地区の中央で検出された隅丸方形の土坑である。規模は一辺が 3.1m・深さ 0.2m 程を測る。内部から角鏃と共に須恵器杯蓋土師器甌、白磁碗、磨製石斧、石匙等が出土した。

出土遺物 (Fig.83) 00217 は、天井部頂部付近にヘラケズリを施す須恵器杯蓋である。口径 13.3cm を測る。00218 も須恵器杯蓋である。00219 は土師器小型甌である。10021 はサヌカイト使用の横形石匙で、10022 は玄武岩使用の磨製石斧で、砥石として二次利用をしている。重さ 425g を測る。

#### SK33 土坑 (Fig.5・82・83)

本土坑は、391-1 地区の東壁付近で検出した不整形の大型土坑である。規模は、短辺長が 3.4m・長辺長 6.6m 以上・深さ 1m 程度を測る。埋土内からは須恵器杯蓋、土師器甌、瓦質土器土鍋、拂り鉢、青磁器等が出土した。

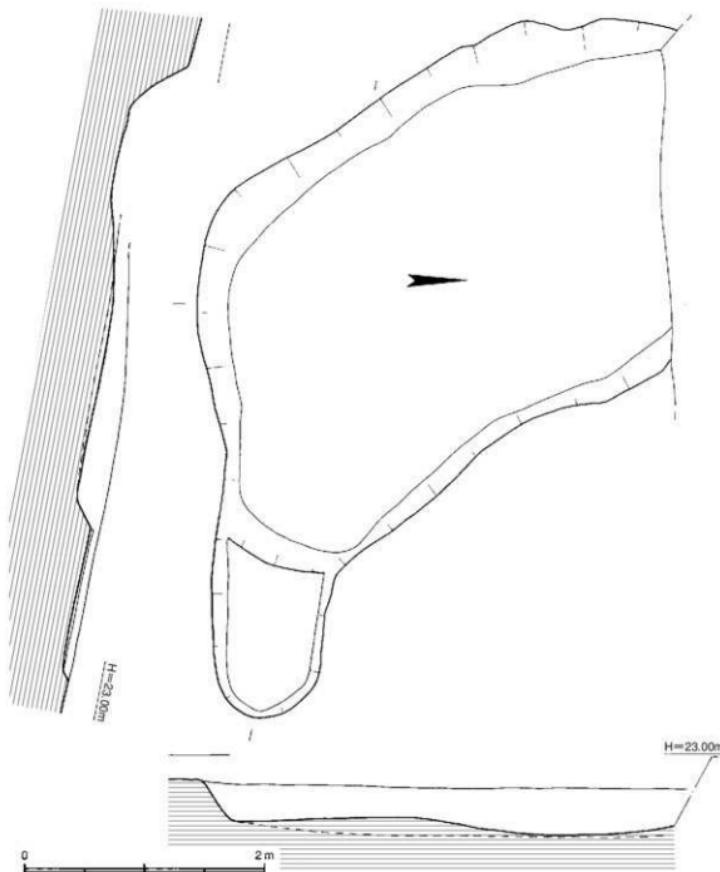


Fig.80 SK31 土坑出土状況実測図 (1/40)

出土遺物 (Fig.83) 00220 は、小型の須恵器杯蓋である。口径は 11.8cm を測る。00221 は土師器皿である。底部径 6cm を測る。00222 は、瓦器質拂鉢片である。内面に 7 本単位の櫛描きを加える。底部径 15.6cm である。00223 は、白磁の碗或いは鉢である。釉は灰白色で、底部径 8.6cm を測る。

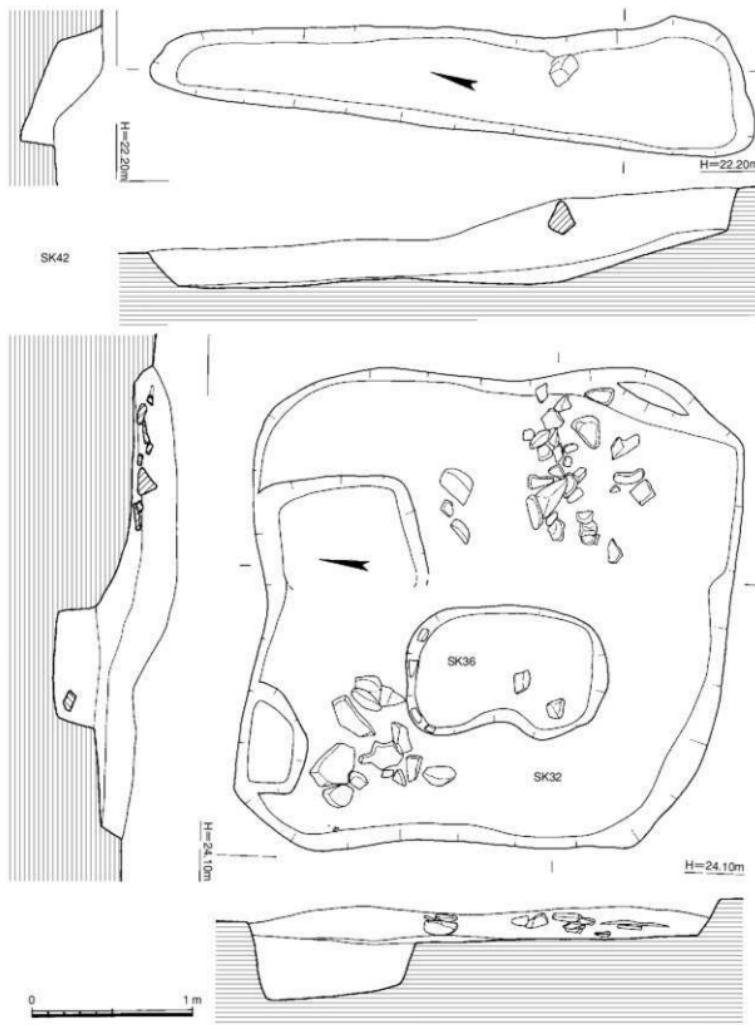


Fig.81 SK32・36・42 土坑出土状況実測図 (1/30)

SK34 土坑 (Fig.5・84)

本土坑は、391-1 地区の東壁近くで検出した円形の小型土坑である。径は  $1.2 \times 1.3m$ ・深さ  $0.3m$  程度を残す。埋土中から須恵器破片、土師器破片が少量出土した。

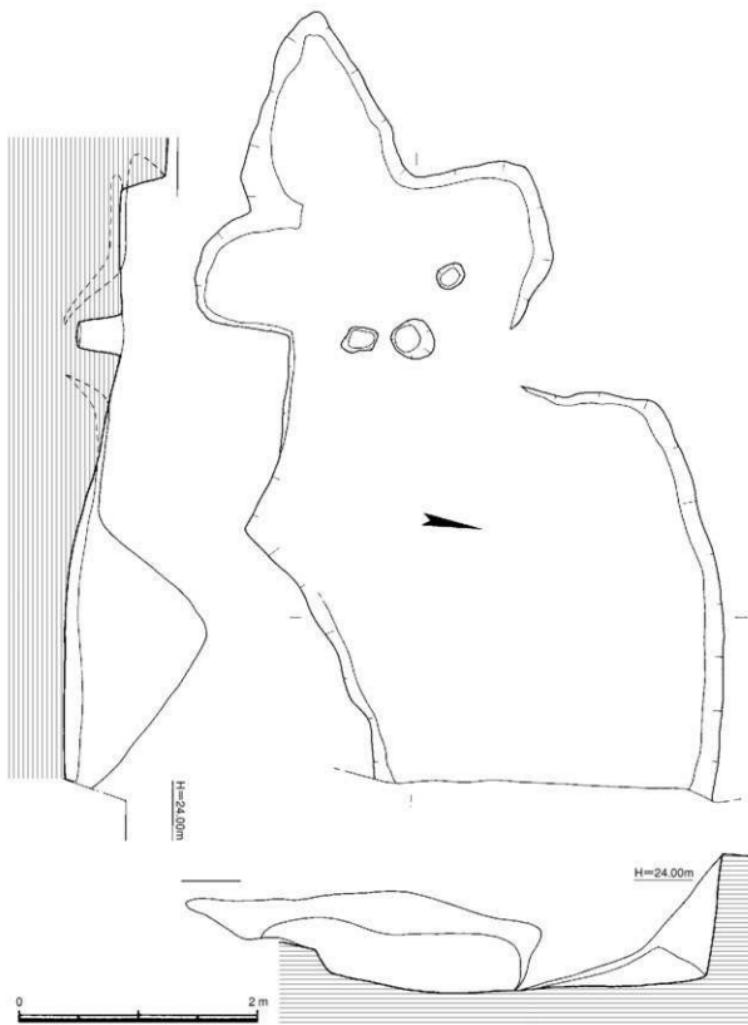


Fig.82 SK33 土坑出土状況実測図 (1/40)

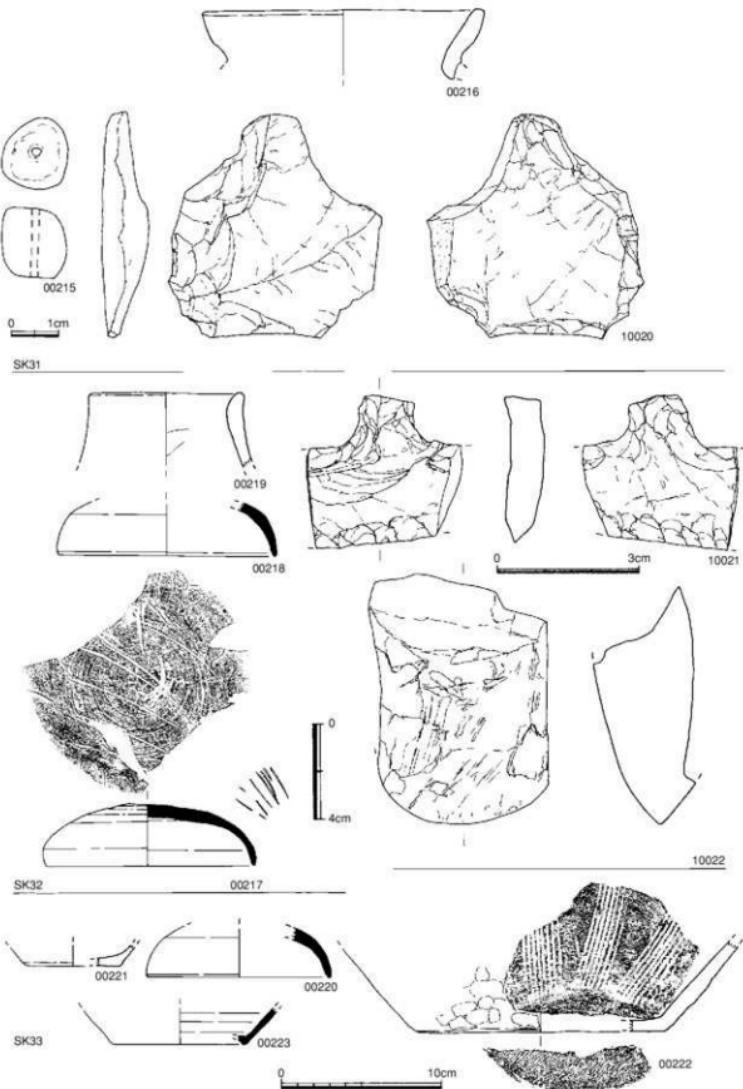


Fig.83 SK31・32・33 土坑出土遺物実測図 (1/3・1/2・1/1)

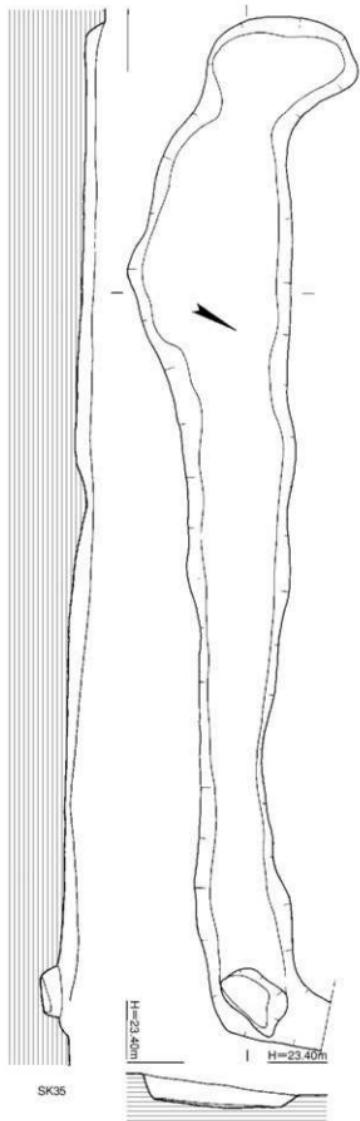


Fig.84 SK34・35 土坑出土状況実測図 (1/30)

#### SK35 土坑 (Fig.5・84・87)

本土坑は、391-1 地区の北側壁で検出された溝状の土坑である。規模は、短辺長 1m・長辺長 6.4m・深さ 0.15m を測る。埋土中より施釉陶器、陶質土器拂り鉢、火舎、不明鉄器などが出土した。

**出土遺物 (Fig.87)** 00224 は、安南地方の陶器か。鉢或いは盤であろう。外面は露胎で赤褐色、内面に流水文と同心円状の模様を描く。底部径 13cm を測る。00225 は、丸底の陶器鉢破片である。内面及び外面上部に浅黄～灰白色釉をかける。露胎部はにぶい橙色である。30003 は不明鉄製金具である。

#### SK36 土坑 (Fig.5・81・87)

本土坑は、391-1 地区の中央で検出された小型長方形の土坑である。SK32 土坑と重複する。規模は、短辺長 0.7m・長辺長 1.3m を測る。埋土中からは須恵器杯蓋、土師器把手、叩石等が出土した。

**出土遺物 (Fig.87)** 00226 は、須恵器杯蓋破片である。00227 は、土師器甕の把手である。10023 は、玄武岩礫を利用した叩石と砥石併用の石器である。長さ・幅が 12.6 × 5.2cm・重さ 440.7g を測る。

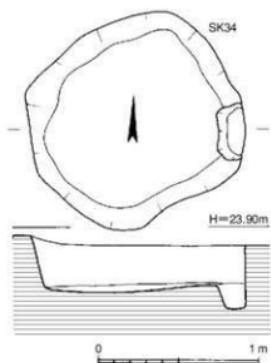
#### SK37 土坑 (Fig.4・85・87、PL.12)

本土坑は、6 号支線道路 1 区の南端部で検出された不整形な大型土坑である。規模は、短辺長 3.8m・長辺長 5m・深さ 0.7 ～ 1.5m を測る。埋土からは土師器皿、滑石製石鍋、不明鉄器が出土した。

#### 出土遺物

(Fig.87)

00228 は、糸切り土師器皿である。調整は、全てヨコナデである。器色は、褐灰黄色を呈する。口径 12.7cm・器高 2.4cm を測る。30004 は形態の不明な鉄器破片である。残存長 4.2cm を測る。



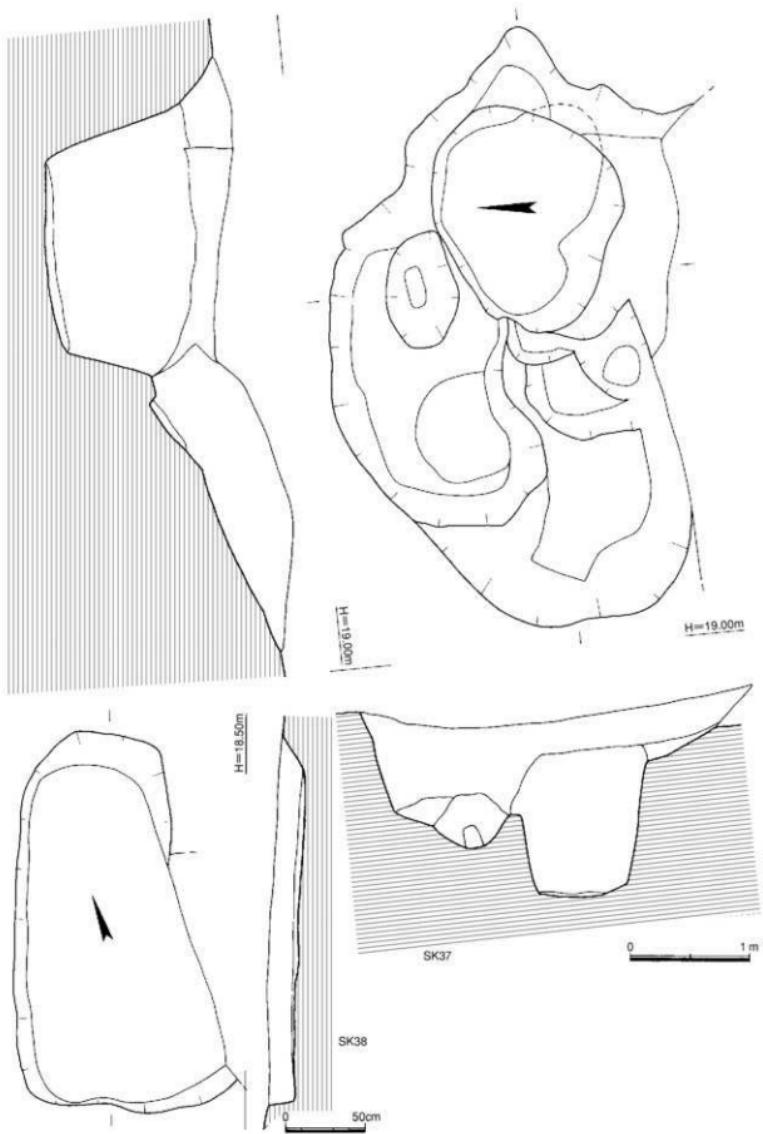


Fig.85 SK37・38 土坑出土状況実測図 (1/30・1/40)

#### SK38 土坑 (Fig.4・85)

本土坑は、6号支線道路1区の中央で検出された長方形の土壙である。規模は、短辺長が、1.3m・長辺長 2.3m・深さ 0.2m 程度を測る。埋土中からは、遺物の出土は無かった。

#### SK39 土坑 (Fig.4・86)

本土坑は、6号支線道路1区の中央で検出された不整形の小型土坑である。規模は、短辺長 0.9m・長辺長 1.7m・深さ 0.4 ~ 0.2m を測る。埋土内からは、古墳時代土師器壺の細片とスラッガが少量出土した。

#### SK40 土坑 (Fig.4・86・87)

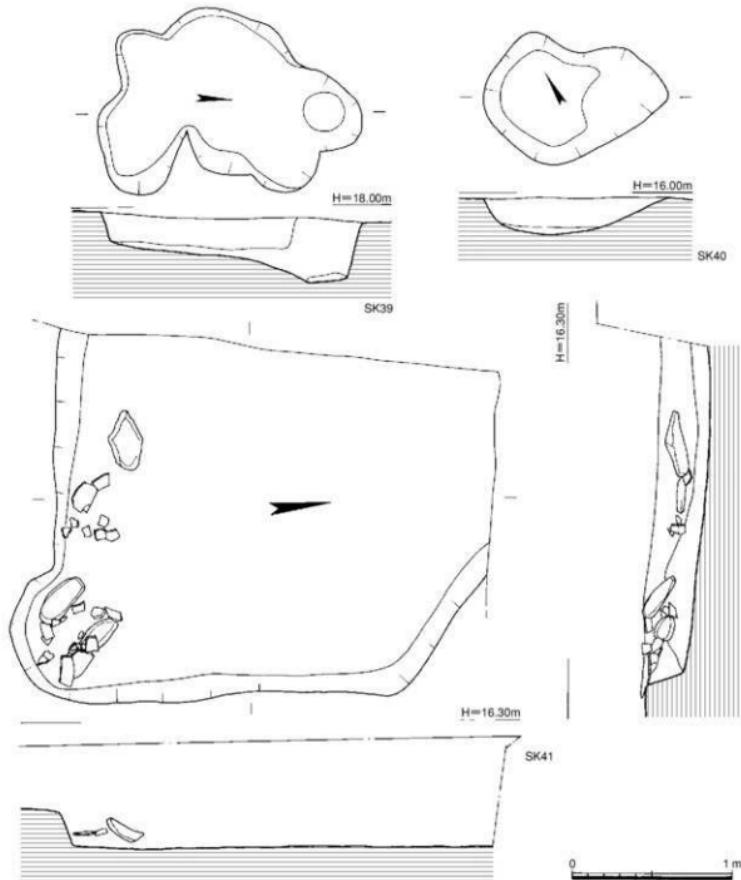


Fig.86 SK39・40・41 土坑出土状況実測図 (1/30)

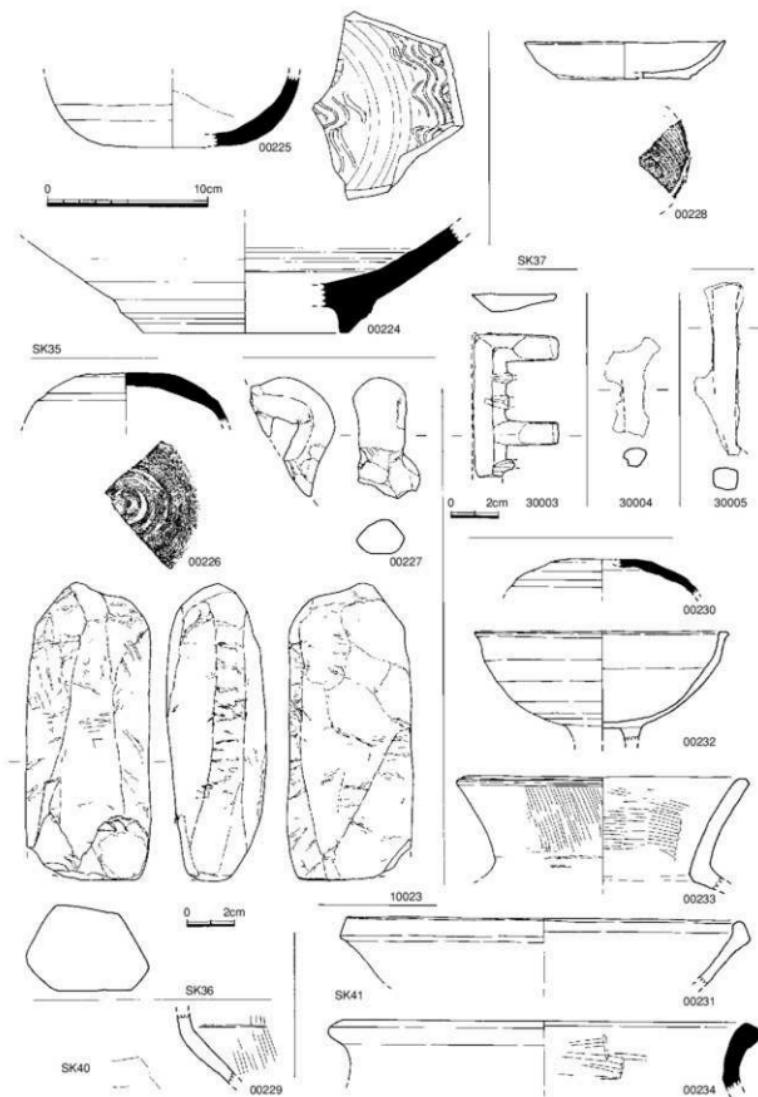


Fig.87 SK35・36・37・40・41 土坑出土遺物実測図 (1/3・1/2)

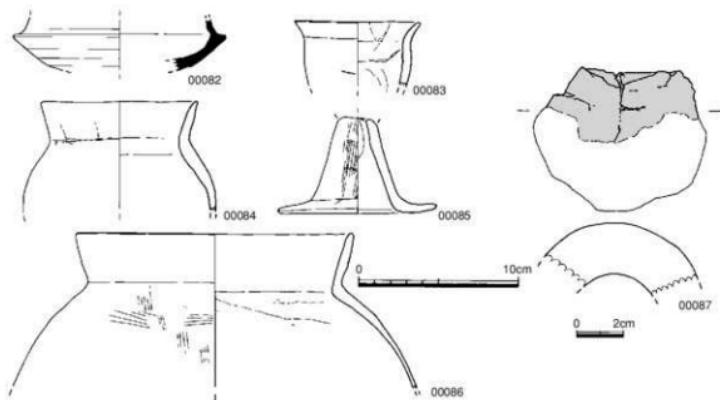


Fig.88 SK42 土坑出土遺物実測図 (1/3・1/2)

本土坑は、6号支線道路2区の中央で検出された小型の不整形土坑である。規模は、短辺長0.8m・長辺長1.2m・深さ0.25mを測る。埋土内からは、古墳時代土師器甕の破片が少量出土した。

**出土遺物 (Fig.87)** 00229は、土師器甕の頸部破片である。器色は、明褐灰色を呈する。

**SK41 土坑 (Fig.4・86・87、PL.12)**

本土坑は、6号支線道路2区の北端部で検出された方形?の土坑である。規模は、径2.5×2.4m・深さ0.2m程度を測る。南側壁周辺に甕・遺物類が集積している。埋土からは、須恵器杯蓋・土師器甕・高坏・須恵質繩引鉢・青磁碗・鐵釘等が出土した。

**出土遺物 (Fig.87)** 00230は、須恵器杯蓋の破片である。00231は、東播系繩引鉢である。口径25.4cmを測る。00232は、土師器脚付鉢か。外面はヘラナデか。口径は16.2cmを測る。00233は、土師器甕で、口径18.6cmを測る。00234は、肥前系陶器か。口径27.6cmを測る。30005は、鐵釘破片である。

**SK42 土坑 (Fig.5・88)**

本土坑は、7号支線道路の北側に位置するSC09住居跡の東に切り合う土坑である。不整な長方形をなす。埋土からは、須恵器杯身・土師器甕・瓶・小型丸底壺・高坏・フイゴ羽口等が出土した。

**出土遺物 (Fig.88)** 00082は、須恵器杯身である。受け部径13.6cmを測る。00083は小型の土師器鉢である。口径8cmである。00084は、小型丸底壺である。口径は10cmを測る。00085は高坏脚の破片である。00086は、中型の甕である。口径17.8cmを測る。00087は、フイゴ羽口破片である。上部は熱を受けて黒変する。

#### 4. 溝状遺構 (Fig.4・5・89・90、PL.2・3・12・13)

概要一 溝は、調査区全体を合わせて14条を検出した。2号支線道路では、1区で3条 (SD01～03)・2区で2条 (SD04・05)・3区で3条 (SD06～08)・4区で3条 (SD09～11)・5区で1条 (SD12) が知られる。7号支線道路では、1条 (SD13)、8号支線道路でも1条 (SD14) が見つかった。規模は SD01溝のように大型のものも見られるが、全体に小型で、両端が立ちあがる小溝もあり、古墳時代後期住居の排水溝や中世期の集落に伴う溝であると考えられる。

##### SD01溝 (Fig.4・89・90、PL.13)

本溝は、2号支線道路1区の南端で検出した大型の東西溝である。全長7m以上・幅3.5m、深さ0.8m程度を測る。また、東壁での横断面形は南側がやや急激に、北側が緩く立ちあがり、箱状を呈する。

次に溝内の堆積は、最下層の4層が濃茶褐色粘質土で、上層の3層は明橙色粘質土で、厚さ0.35～0.6mを測る厚層である。内部に大型の花崗岩角礫を含む。また、2層は4層と同様の粘質土でしめられ、層厚0.5m程度で小礫を含む。表層は暗黄褐色砂質土である。

溝埋土内からは、内面にヘラ描き花文を施す龍泉窯青磁碗 00235・やや上げ底の大型陶器甕 00236・砂岩製砥石 10024などの遺物が出土した。

##### SD02溝 (Fig.4・90)

本溝は、2号支線道路1区の北端で南北から東方向に走る大溝である。幅3.2m・全長26.8m以上を測る。

出土遺物には菊花文のスタンプを施した瓦質土器火舎 00237、内底付近に5本単位の櫛描きを施す土器質土器描り鉢 00238、サヌカイト製コア 10025がある。

##### SD03溝 (Fig.4・90)

本溝は、2号支線道路1区の北端部で検出した南北溝で、北側は立ちあがる。規模は、幅1.7m全長5.3m以上を測る。

出土遺物には二彩陶器蓋で、外面にオリーブ褐色釉をかける低い返しをもつ 00240 や高台が高く、灰白色釉をかける白磁碗 00239 がある。底部径は6.2cmを測る。

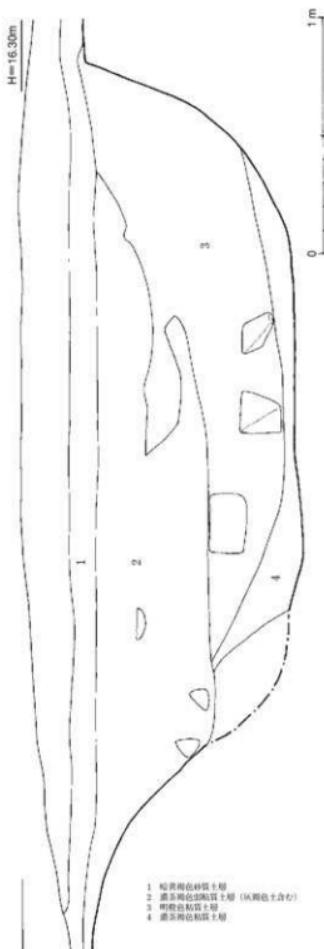


Fig.89 SD01溝東壁土層断面図 (1/20)

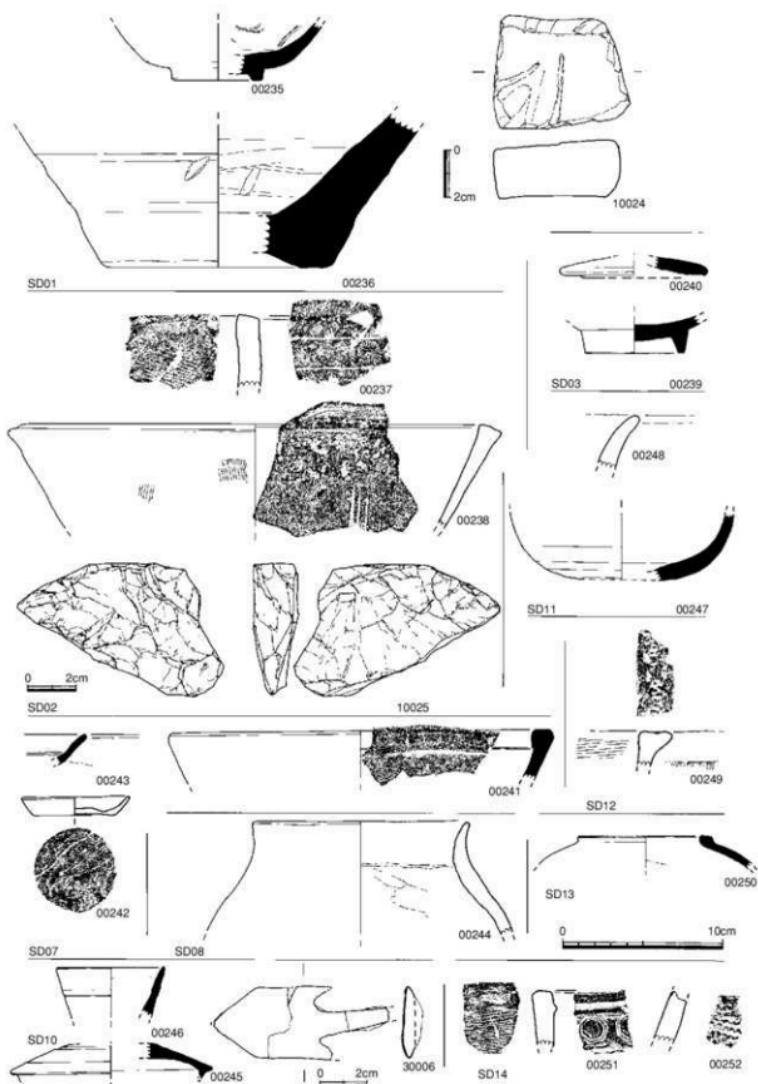


Fig.90 SD01 ~ 03 · 07 · 08 · 10 ~ 14 溝出土遺物実測図 (1/3 · 1/2)

#### SD04 溝 (Fig.4)

本溝は、2号支線道路2区の北端で検出した東西の小溝である。規模は、幅0.7m・長さ2.9m以上である。出土遺物は、龍泉窯青磁碗破片、瓦質土器甕破片、黒曜石チップなどである。

#### SD05 溝 (Fig.4)

本溝は、2号支線道路2区の南端で南北方向の溝である。両端は立ちあがる。規模は、幅が1.5m・長さ6mを測る。出土遺物は、瓦質土器捏ね鉢、褐釉陶器破片である。

#### SD06 溝 (Fig.4)

本溝は、2号支線道路3区の北端隅で検出した屈曲する溝である。規模は、幅が1.0m程度で、延長は20m以上である。出土遺物は、土師器甕の破片が少量である。

#### SD07 溝 (Fig.4・90, PL.5・12)

本溝は、2号支線道路3区の南側を南北にうねって走る溝である。規模は、幅が1.0m程度で延長は35m以上を測る。出土遺物には龍泉窯青磁皿00243や口径6.8cmの糸切り底の小型土師皿00242・口径24.2cmの須恵質土器の捏ね鉢00241がある。

#### SD08 溝 (Fig.4・90)

本溝は、2号支線道路3区の中央で検出された南北溝である。幅員は不規則である。規模は、幅が0.7m・延長9m以上を測る。出土遺物には土師器甕00244がある。器色は、淡赤橙色～灰褐色を呈する。復原口径は13.6cmを測る。

#### SD09 溝 (Fig.5)

本溝は、2号支線道路4区の北端部隅で検出された小溝である。規模は、幅が0.7m・延長2.7mを測る。出土遺物には土師器甕破片が少量ある。

#### SD10 溝 (Fig.5・90)

本溝は、2号支線道路4区で検出した南北溝である。規模は、幅が0.5m・延長10m以上を測る。出土遺物には須恵器瓶口縁破片00246・受け部径12.6cmを測る同蓋00245、残存長7.4cmを測る剣先形鉄鎌30006がある。鋒による彫れが著しいものである。

#### SD11 溝 (Fig.5・90)

本溝は、2号支線道路4区で検出された南北方向に向く小溝である。両端が立ちあがる。規模は、幅が0.3m・長さ4mを測る。出土遺物には土師器甕後縁部破片00248・須恵器壺底部破片00247がある。壺は、底部下半に回転ヘラケズリを加える。

#### SD12 溝 (Fig.5・90)

本溝は、2号支線道路5区で検出された南北方向に走る小溝である。比較的直線的に走る。規模は、幅が1m程度で延長14.5m以上を測る。出土遺物には土師質土器の火舎00249の他に須恵器杯蓋、土師器甕破片が少量ある。

#### SD13 溝 (Fig.5・90)

本溝は、7号支線道路西端で検出した南東から北西方向へ走る小溝である。東側は立ちあがる。規模は、幅が0.4m・延長14.5m以上を測る。出土遺物には黒釉陶器壺00250の他に須恵器杯蓋、土師器小型丸底壺破片がある。

#### SD14 溝 (Fig.5・90)

本溝は、8号支線道路東側で検出した溝である。規模は、幅が1m・延長3.9m以上を測る。出土遺物には亀甲文スタンプを口辺に付した瓦質土器火舎00251や山形押型文土器破片00252がある。

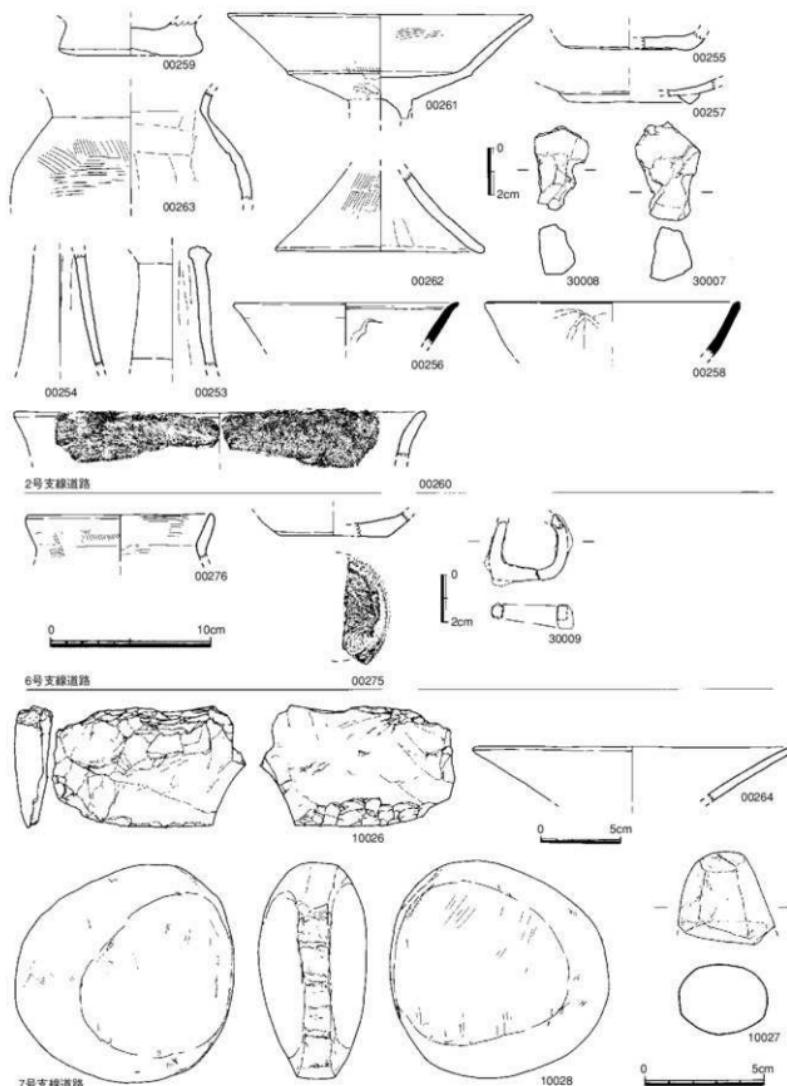


Fig.91 2号支線道路・6号支線道路・7号支線道路・SP出土遺物実測図(1) (1/3・1/2)

## 5. 柱穴出土遺物 (Fig.4・5・91・92)

各調査区で検出した柱穴は2号支線道路調査区を中心に分布しているが、調査区の狭小なために建物としてのまとまりを捉えきれない。数的には2号支線道路97個、6号支線26個（1区22個・2区4

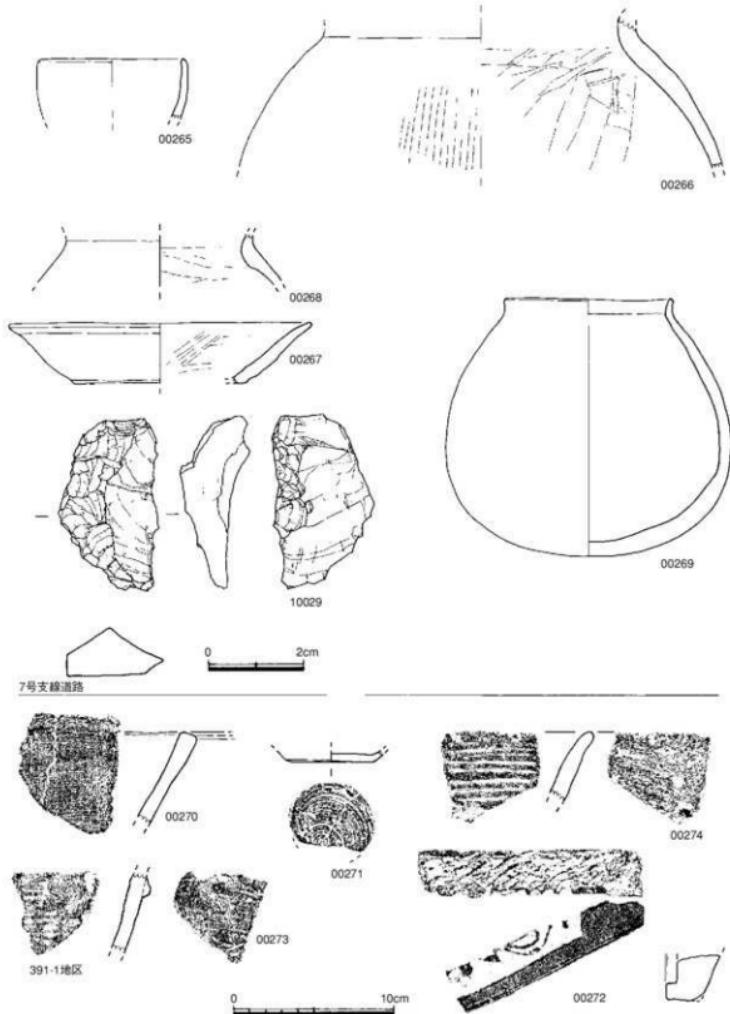


Fig.92 7号支線道路・391-1地区SP出土遺物実測図(2) (1/3・1/1)

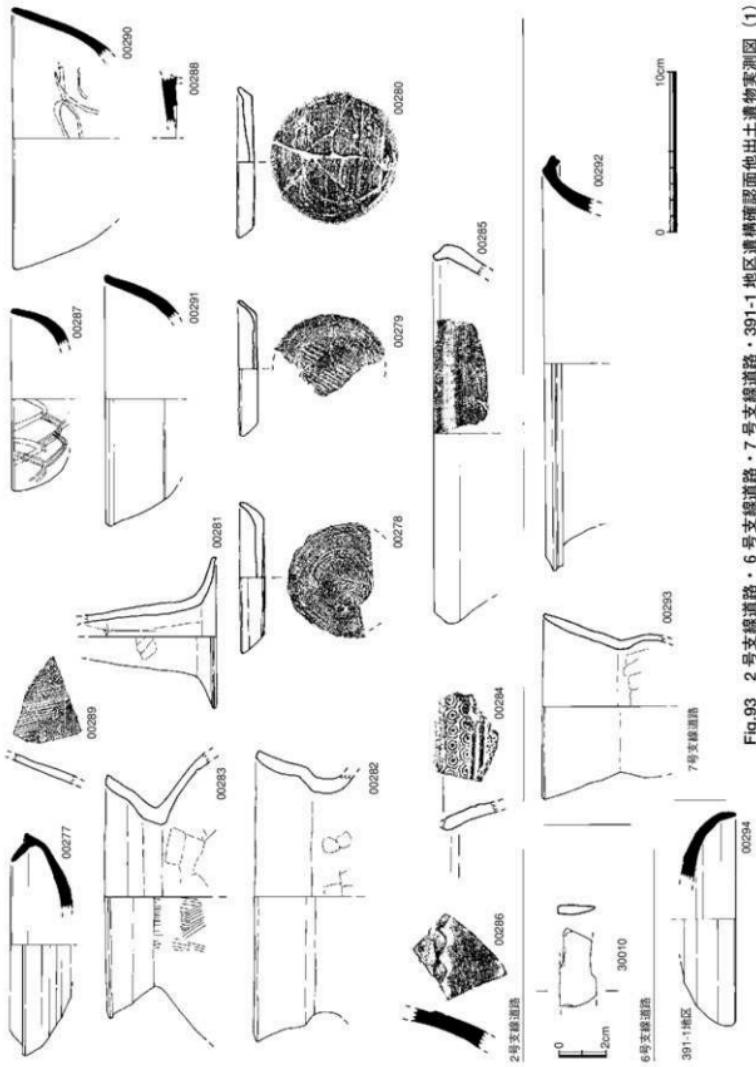
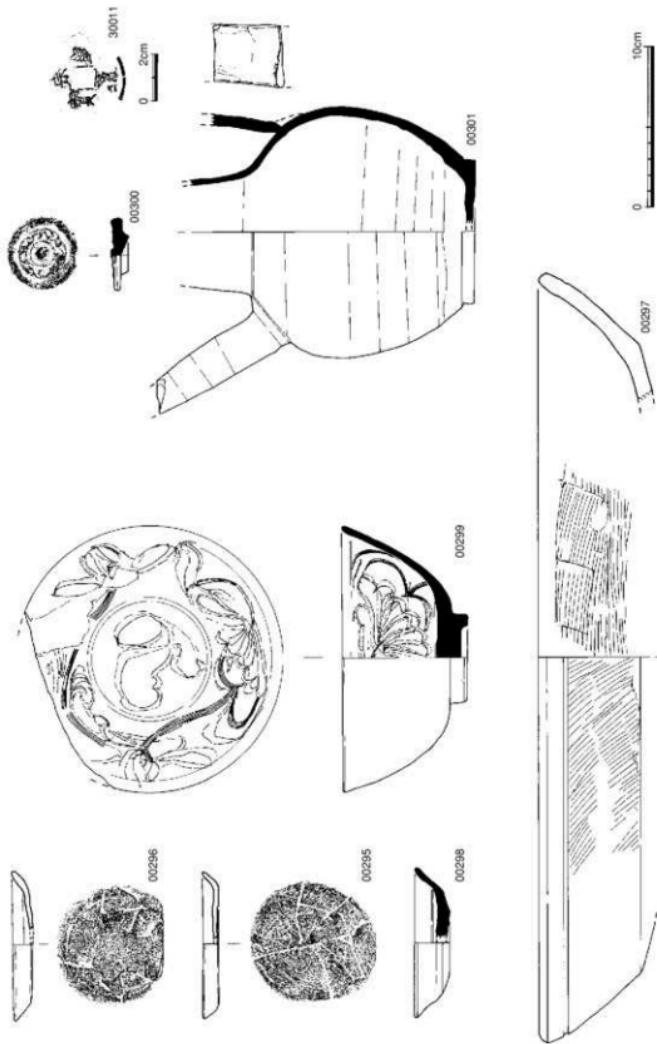


Fig. 93 2号支線道路・6号支線道路・7号支線道路・391-1 地区遺構確認面出土遺物実測図 (1)

Fig. 94 遺構確認面他出土遺物実測図 (2) (1/3・1/2)



個)、7号支線道路28個、8号支線道路1個、391-1地区13個が認められる。埋土中から出土した遺物類は何れも細片で、図化に耐えないものが多い。

2号支線道路では、SP01では土師器高環破片で脚が中空となる00253、SP12では土師器高環破片で脚が中空となる00254、SP35では土師器鉢00255や龍泉窯青磁碗00256、SP54では小形の鉄滓30007・30008、SP55では土師器高台付椀00257や龍泉窯青磁碗00258、SP56で夜臼式甕底部00259、SP59では縄文時代後期の大型深鉢と考えられる00260、SP78では土師器丸底壺00263・浅い杯部に脚端部の開く土師器高環00261・00262が見られる。

6号支線道路では、SP07で底部糸切りの土師皿00275、SP10では細い環状鉄器30009、SP25で小型土師器甕00276が見られる。

7号支線道路では、SP19で土師器高環杯部破片00264やサヌカイト製サイドスクレイパー10026や玄武岩製磨石10028・玄武岩製石斧頭部破片10027、SP21で土師器小形マリ00265・同甕破片00266が見られる。SP24では土師器甕破片00268・同高環杯部破片00267・黒曜石剝片を使用した二次加工剝片10029がある。SP25では土師器丸底甕00269があり、器色は赤橙色～にぶい黄橙色を呈する。口径は10.6cm・器高16.2cmを測る。

391-1地区では、SP04で土師質土器捏ね鉢00270、SP06で小形糸切り底土師皿00271、SP07で軒平瓦破片00272、SP09で条痕文調整の縄文土器甕破片00273、SP11でヨコ方向の条痕文で外面の器面調整する縄文土器甕00274がある。全体に中世期以降の出土が多い。

## 6. 遺構検出面他出土遺物 (Fig.93～96)

2号支線道路では、一部に古墳時代後期の土師器、須恵器破片を一部に含むが、大半は中世期の輸入陶磁器、土師器、瓦質土器類である。

00277は、須恵器杯身破片である。受け部の立ちあがりは著しく内傾する。器面調整は、底部外面のほぼ全面に回転ヘラケズリを施し、他はヨコナデである。器色は、外面が灰白色で、内面は明灰色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。受け部の復原径14cm・同器高8cmを測る。

00278～00280は土師器皿である。00278は、底部が糸切り離して、器面調整はヨコナデである。器色は、内外面共ににぶい橙色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。口径は9.5cm・器高1.6cmを測る。

00279は、やや薄造りの糸切り皿である。外底部に板目を残す。器面調整は、全面ヨコナデである。器色は、外面がにぶい赤褐色で、内面は灰褐色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径は8.6cm・器高1.2cmを測る。

00280もやや大型の糸切り皿である。外底部には板目圧痕を残す。器面調整は、全面ヨコナデである。器色は、外面がにぶい橙色で、内面は明褐色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径は9.4m・器高1.1cmを測る。

00281は、土師器高環脚部破片である。内面にヘラケズリを残し、他は荒れのために不明である。器色は、外面がにぶい橙色で、内面は灰褐色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。復原底部径9.4cm・残存器高8.2cmを測る。

00282は、器壁の厚い二重口縁の土師器壺である。調整は、内面に指オサエを残す以外は荒れのために不明である。器色は、内外面共ににぶい黄橙色を呈する。胎土は粗で、焼成は堅緻である。口径

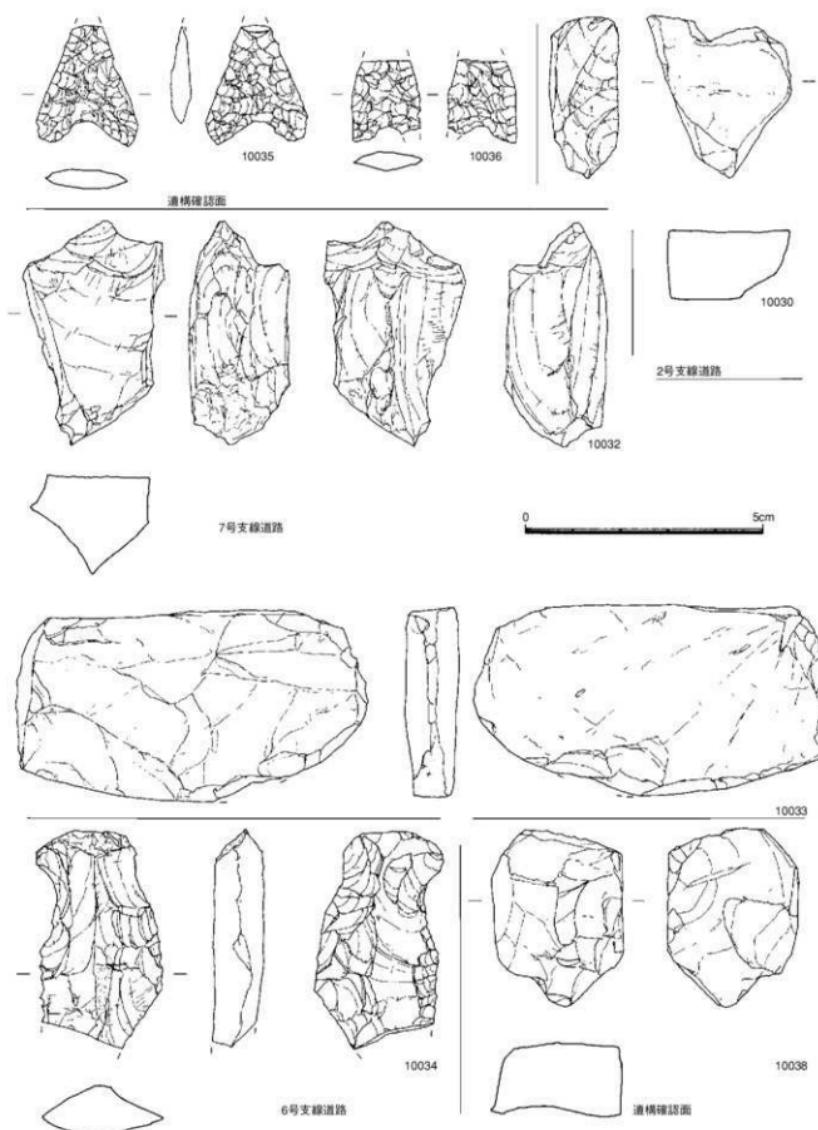


Fig.95 各区遺構確認面出土遺物実測図 (3) (1/1)

18.2cm で、残存高 6.2cm を測る。

00283 は、土師器壺片である。調整は、口縁部内外にヨコナデ、胴部外面に荒いハケメ・同内面にヘラケズリを加える。器色は、褐灰色を呈する。復原口径 15.2cm を測る。

00284 は、口縁部辺に亀甲文スタンプを付す火舎破片である。調整ヨコナデで、器色は褐色である。

00285 は、口縁部が折れる瓦質土器壺片である。調整は、ヨコナデである。口径 26cm を測る。

00286 は、外面に薄く釉をかける陶器破片である。施釉は灰黄色で、内面露胎部は灰赤色を呈する。

00287 は、肥前系の染め付け磁器碗である。外面に網掛け文を描く。施釉部分は暗黄灰で、地は青灰色を呈する。口径は 11.4cm を測る。表面採集。

00288 も近世陶器である。外底部は中央を円形に抉る。施釉部は、灰白色を呈する。耕作土・床土。

00289 は、外面に細かい繩目タタキを残す陶質土器の胴部破片である。器色は、外面が明青色で、内面は青色を呈する。長胴甕破片と考えられる。朝鮮半島産か。表土・床土。

00290 は、龍泉窯青磁碗破片である。内面に草花文を描く。地色は灰白色を呈し、施釉部は灰オーリー色である。外面は水裂が見られる。口径 16.4cm を測る。遺構検出面。

00291 は、釉のボッテリと厚くかかる龍泉窯青磁碗破片である。地色は灰色を呈し、施釉部は緑色である。外面には水裂が著しい。口径 15.8cm を測る。遺構検出面。

6 号支線道路では、30010 が出土した。横断面形が楔状をなすことから刀子の破片と考えられる。残存長 3.4cm、背部厚さ 3mm を測る。遺構確認面。

7 号支線道路では、00292 の甕がある。角張った口縁端部はやや垂れる。器面調整は、内外面共にヨコナデである。器色は、外面紫灰色で、内面は青灰色を呈する。胎土はやや粗である。古代期のものか。遺構確認面。00293 は、土師器小型丸底壺である。底部を欠く。調整は、胴部内面に指オサエを残す以外は荒れのために不明である。器色は、外面がにぶい黄橙色で、内面は灰白色を呈する。胎土は粗である。復原口径は 11.6cm・同残存高 7.8cm を測る。遺構確認面。

391-1 地区では、須恵器の小型杯蓋の 00294 がある。天井部の一部に回転ヘラケズリを施す。他は

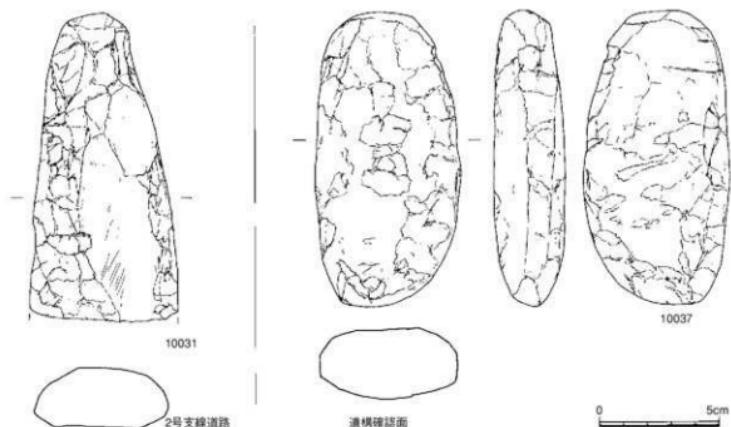


Fig.96 各区遺構確認面出土遺物実測図 (4) (1/2)

ヨコナデである。器色は、内外面共に青灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。復原口径13.4cm・器高3.4cmを測る。遺構確認面。

以下は遺構確認面であるが、地区が不詳な出土資料である。(Fig.94)

00295・00296は、いずれも浅い糸切り皿である。00295は、調整が全面ヨコナデである。器色は、外面が灰黄褐色で、内面は明灰褐色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。復原口径9.2cm・器高1cmを測る。00296は、やや整形が甘い造りの皿である。器色は、外面が灰黄色で、内面は黄橙色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径9.4cm・器高1.2cmを測る。遺構確認面

00297は、土師質土器の大型の土鍋或いは焙烙か。底部付近はヨコナデで、胴部及び内面は荒いハケメ調整である。器色は、外面が褐灰色で、内面は灰白色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径48.4cmを測る。遺構確認面。

00298は、龍泉窯青磁皿である。釉薬は口縁部と内面に厚くかける。釉薬は明緑灰色で、露胎部は灰白色である。復原口径は9.4cm・器高2.2cmを測る。遺構確認面。

00299は、龍泉窯青磁碗である。約1／3を残す。口縁部内面及び見込みに優美な草花文を描く。高台外面から内面には施釉を行い、他は露胎となる。釉薬は暗オリーブ色を呈し、露胎は灰色である。口径16.6cm・器高7.9cmを測る。遺構確認面。

00300は、施釉陶器の蓋である。ほぼ完形である。小壺のものか。中央部に低い摘みを付し、周辺には唐草様の文様を巡らし、平板な感じを受ける。内面突起は中央が窪む。施釉する上面は、暗赤褐色で、露胎部は灰色をなす。胎土は密である。口径4.5cm・器高1.1cmを測る。

00301は、把手付褐釉陶器水注である。半球状の胴部にしまった頭部と比較的太い注口を付ける。また、把手は板状で幅広い。底部はやや上げ底となる。釉薬の大半は剥落している。胴部最大径15.6cm・残存高20cmを測る。遺構確認面。

統いて石器類である。(Fig.95・96)

10030は、チャート？使用的石核である。長さ・幅・厚さ $3.4 \times 3 \times 1.4$ cmで、重さ14.4gを測る。2号支線道路排土。10031は、玄武岩使用の石斧である。刃部を欠く。周辺には打痕を多く残し、中央部に研磨痕を残す。残存長12.9cm・重さ306.82gを測る。2号支線道路4区排土。10032は、黒曜石石核である。重量23.28gである。7号支線道路遺構確認面。10033は、サヌカイトの横長剥片使用のサイドスクリイバーである。長さ・幅は $4.0 \times 7.4$ cmで、重さ35.68gを測る。7号支線道路遺構確認面。10034は、黒曜石を使用した剥片頭部の両端にノッチを加えたサイドスクリイバーである。残存長4.6cmを測る。6号支線道路遺構確認面。10035は、黒曜石使用の凹基無茎式の打製三角石鏽である。先端部を失う。残存長1.5cm・残存重さ1.74gを測る。

10036は、基部のくり込みの小さい小型鏽である。先端部を失う。黒曜石を使用する。残存長1.7cm・残存重さ0.84gを測る。

10037は、玄武岩使用的敲石である。周辺の全面に摩滅痕は見られる。また、中心部や側辺の全面にも打痕が及び、両側辺は平坦面をなす。法量は、長さ・幅・厚さが $12.4 \times 38.7 \times 3.0$ cmで、重さ387.83gを測る。遺構確認面。

10038は、明緑灰色の珪質岩使用のやや分厚い剥片である。片面には大剥離面が見え、両面からの剥離調整が窺える。玉加工の未成品か。

調査区内では古墳時代や中世遺構の埋土に混じて多くの石器類が出土しており、縄文時代早期から弥生時代までの長い時間の所産を含むと考えられる。

Tab.2 検出遺構一覧 (SC: 積穴住居跡、SB: 据立柱建物、SK: 土坑、SD: 溝状遺構)

| 番号 | 遺構<br>番号 | 地 区      | 平面形  | 規 模 (m) |      |      | 時 期  | 出 土 遺 物   |
|----|----------|----------|------|---------|------|------|------|---|
|    |          |          |      | 短辺      | 長辺   | 深さ   |      |   |
| 1  | SC01     | 2号支線道路3区 | 長方形? | 4.7     | 2.6< | 0.3  | 古墳後期 | 須恵器杯身・土師器高环・瓶・甕多数                                 |
| 2  | SC02     | 2号支線道路3区 | 長方形  | 4.6     | 3.5< | 0.1  | 古墳後期 | 須恵器杯蓋・土師器甕・甕多数<br>磨製石斧・2次加工剥片(サヌカイト)              |
| 3  | SC03     | 2号支線道路3区 | 長方形  | 5.3     | 2.6< | 0.2  | 古墳後期 | 須恵器杯蓋・杯身・ハソウ・土師器甕<br>大型蛤刃石斧(玄武岩)                  |
| 4  | SC04     | 7号支線道路   | 長方形  | 4.2     | 1.8< | 0.15 | 古墳後期 | 土師器甕・手捏土器・支脚(花崗岩)                                 |
| 5  | SC05     | 7号支線道路   | 長方形  | 5.0     | 4.8< | 0.35 | 古墳後期 | 須恵器杯蓋・土師器甕・丸底壺・高环・瓶、<br>支脚(花崗岩)・2次加工剥片(黒曜石)       |
| 6  | SC06     | 7号支線道路   | 長方形  | 4.5     | 3.9  | 0.35 | 古墳後期 | 須恵器杯蓋・提瓶・土師器甕・瓶・丸底壺、<br>支脚(花崗岩)                   |
| 7  | SC07     | 7号支線道路   | 正方形  | 4.1     | 4.1  | 0.2  | 古墳中期 | 土師器甕・手捏土器・小型丸底壺・高环                                |
| 8  | SC08     | 7号支線道路   | 長方形  | 4.4     | 4.7  | 0.25 | 古墳後期 | 須恵器杯・甕多数・土師器甕・高环多数                                |
| 9  | SC09     | 7号支線道路   | 長方形  | 4.2     | 4.5  | 0.33 | 古墳中期 | 須恵器無頸壺・土師器甕・手捏土器・高环<br>・丸底壺・鉢・瓶・フレイク・チップ          |
| 10 | SC11     | 7号支線道路   | 長方形? | 0.7<    | 3.5  | 0.2  | 古墳後期 | 須恵器杯蓋・杯身・土師器甕・瓶・フレイ<br>ク(サヌカイト)                   |
| 11 | SC12     | 7号支線道路   | 不整形  | 5.3     | 4.4  | 0.05 | 古墳後期 | 須恵器杯蓋・甕・土師器甕・高环・瓶・<br>小型丸底壺                       |
| 12 | SC13     | 2号支線道路4区 | 長方形? | 3.3     | 1.5< | 0.1  | 古墳中期 | 土師器甕・小型丸底壺・高环・マリ、<br>(龍泉窯青磁)                      |
| 13 | SC14     | 2号支線道路4区 | 長方形  | 3.6     | 3.1< | 0.3  | 古墳後期 | 須恵器杯蓋・杯身・ハソウ・土師器杯蓋<br>・甕・支脚(花崗岩)                  |
| 14 | SC15     | 2号支線道路4区 | 長方形  | 5.5     | 5.7  | 0.5  | 古墳後期 | 須恵器杯蓋・杯身・土師器甕・高环・小型<br>丸底壺・玄武岩罐・黒曜石原石、<br>支脚(花崗岩) |
| 15 | SC16     | 2号支線道路4区 | 長方形? | 4.0<    | 4.4< | 0.22 | 古墳後期 | 須恵器・甕・杯蓋・土師器甕・高环・丸底<br>壺                          |
| 16 | SC17     | 2号支線道路4区 | 長方形  | 4.5     | 3.8< | 0.16 | 古墳後期 | 須恵器甕・杯蓋・杯身・土師器甕・高环、<br>滑石製石錐                      |
| 17 | SC18     | 2号支線道路4区 | 長方形  | 4.8     | 4.9< | 0.15 | 古墳後期 | 須恵器甕・杯蓋・杯身・土師器甕・高环、<br>把手・フレイク・チップ                |
| 18 | SC19     | 2号支線道路5区 | 長方形? | 2.9<    | 4.8< | 0.55 | 古墳後期 | 須恵器甕・杯身・鉢・土師器甕・高环                                 |
| 19 | SC20     | 391-1地区  | 長方形  | 3.6     | 1.7< | 0.44 | 古墳後期 | 土師器甕・石核(黒曜石)                                      |
| 20 | SB01     | 2号支線道路1区 | 長方形  | 3.8     | 4.2  |      | 中 世  | 土師器甕・皿・スクレイバー(サヌカイト)                              |

|    |       |          |      |      |      |      |       |  |
|----|-------|----------|------|------|------|------|-------|--|
| 21 | S K01 | 2号支線道路1区 | 不整形  | 3.8  | 7.4  | 0.80 | 中世    | 龍泉窯青磁碗・香炉・長柄壺・褐釉陶器甕、瓦質土器鍋・鉢・大型蛤石斧(玄武岩・砂岩)・石包丁未製品、チップ |
| 22 | S K02 | 2号支線道路1区 | 不整円形 | 1.3  | 1.7  | 0.1  | 中世    | 土師器糸切り皿  |
| 23 | S K03 | 2号支線道路1区 | 不整円形 | 1.5  | 1.7  | 0.32 | 中世    | 土師器甕破片   |
| 24 | S K04 | 2号支線道路1区 | 長円形  | 1.3  | 1.9  | 0.40 | 中世    | 土師器糸切り皿・鐵輪   |
| 25 | S K05 | 2号支線道路1区 | 長円形  | 2.6  | 4.4  | 0.55 | 古墳    | 古墳時代土師器甕破片   |
| 26 | S K06 | 2号支線道路1区 | 円形   | 0.9  | 0.9  | 0.24 | 中世    | 土師器甕破片   |
| 27 | S K07 | 2号支線道路1区 | 長円形  | 1.1  | 1.4  | 0.15 | 中世    | 土師器甕破片   |
| 28 | S K08 | 2号支線道路1区 | 長方形  | 0.6  | 1.2  | 0.42 |       | 遺物無し   |
| 29 | S K09 | 2号支線道路1区 | 長方形  | 0.8  | 1.1  | 0.11 | 古墳    | 土師器小破片   |
| 30 | S K10 | 2号支線道路1区 | 不整形  | 1.2  | 1.6  | 0.10 | 古墳    | 土師器小破片   |
| 31 | S K11 | 2号支線道路2区 | 長円形  | 1.5  | 2.4  | 0.2  | 中世    | 須恵器杯蓋・龍泉窯青磁碗・褐釉陶器破片・土師器糸切り皿・擂り鉢                      |
| 32 | S K12 | 2号支線道路2区 | 不整形  | 0.7  | 2.5  | 0.2  | 中世    | 龍泉窯青磁碗・土師器糸切り皿・甕・擂り鉢                                 |
| 33 | S K13 | 2号支線道路2区 | 不整形  | 1.4  | 2.0< | 0.15 | 古墳中期  | 土師器高环・小型丸底蓋  |
| 34 | S K14 | 2号支線道路2区 | 不整形  | 1.7  | 1.1< | 0.25 |       | 土師器甕小破片  |
| 35 | S K15 | 2号支線道路3区 | 不整形  | 2.4  | 5.8  | 0.34 | 中世    | 須恵器杯蓋・杯身・甕・龍泉窯青磁碗・皿・白磁碗・土師器糸切り皿・瓶・甕破片・北宋錢(崇寧通寶)      |
| 36 | S K16 | 2号支線道路3区 | 不整形  | 4.5  | 4.3< |      | 中世    | 須恵器杯蓋・土師器擂り鉢・土鍋・火舍・平瓦破片・2次加工剥片(黒曜石)・鐵滓               |
| 37 | S K17 | 2号支線道路3区 | 不整形  | 1.0< | 8.0  |      | 中世    | 須恵器甕・龍泉窯青磁碗・瓦質土器捏鉢・土師器土鍋・甕                           |
| 38 | S K18 | 2号支線道路3区 | 不整形  | 0.9  | 1.2  | 0.34 | 中世    | 土師器甕・土鍋  |
| 39 | S K19 | 2号支線道路3区 | 不整形  | 1.7  | 1.1< | 0.10 | 古墳後期  | 土師器小破片   |
| 40 | S K20 | 2号支線道路3区 | 長方形  | 0.3< | 1.3  |      | 古墳後期? | 須恵器高环  |
| 41 | S K21 | 2号支線道路3区 | 溝状   | 0.6  | 4.2  | 0.07 | 中世    | 黑褐釉陶器甕・褐釉陶器破片・土師器糸切り皿・骨片                             |
| 42 | S K22 | 2号支線道路3区 | 長方形  | 1.8  | 2.2  | 0.27 | 中世    | 土師器甕・高环・板状铁器・玄武岩扁平砾・炭化木                              |
| 43 | S K23 | 2号支線道路3区 | 長方形  | 0.8  | 1.3  | 0.05 | 中世    | 土師器糸切り皿  |
| 44 | S K24 | 2号支線道路3区 | 長方形  | 3.2  | 8.0  |      | 中世    | 須恵器甕・土師器甕・擂り鉢・蛤石斧                                    |
| 45 | S K25 | 2号支線道路4区 | 不整形  | 2.4  | 4.0  |      | 古墳後期  | 須恵器甕・杯蓋・土師器甕・高环・手捏土器                                 |
| 46 | S K26 | 2号支線道路4区 | 不整形  | 1.3  | 1.5  |      | 古墳    | 土師器甕破片   |
| 47 | S K27 | 2号支線道路4区 | 長方形? | 1.4< | 2.5< |      | 古墳    | 弥生前期甕破片・土師器甕破片                                       |
| 48 | S K28 | 7号支線道路   | 長円形  | 1.8  | 2.9  |      | 古墳後期  | 土師器手捏土器甕   |

|    |        |          |      |     |      |     |       |   |
|----|--------|----------|------|-----|------|-----|-------|---|
| 49 | S K 29 | 7号支線道路   | 長方形  | 3.5 | 7.3  |     | 古墳後期  | 須恵器杯蓋・土師器甕・高坏・丸底壺・二重口縁壺・フレイク、花崗岩礫、玄武岩礫              |
| 50 | S K 30 | 7号支線道路   | 長方形  | 3.4 | 5.2  |     | 古墳後期  | 須恵器杯蓋・杯身・土師器甕・高坏・小型丸底壺・鉢・瓶、フレイク(サヌカイト・黒曜石)          |
| 51 | S K 31 | 8号支線道路   | 不整形  | 3.0 | 6.6< |     | 古墳後期  | 須恵器杯蓋・甕・土師器甕・土製臼玉、エンドスクレイバー(サヌカイト)、玄武岩礫             |
| 52 | S K 32 | 391-1地区  | 隅丸方形 | 3.1 | 3.1  |     | 中世    | 須恵器杯蓋・土師器甕・白磁碗・太型蛤刃石斧(玄武岩)・石匙(サヌカイト)                |
| 53 | S K 33 | 391-1地区  | 不整形  | 3.4 | 6.6< |     | 中世    | 須恵器杯蓋・土師器糸切り皿・瓶・瓦質土器土鍋・擂り鉢・青磁碗                      |
| 54 | S K 34 | 391-1地区  | 円形   | 1.2 | 1.3  |     | 古墳後期? | 須恵器破片・土師器破片   |
| 55 | S K 35 | 391-1地区  | 溝状   | 1.0 | 6.4  |     | 中世    | 青釉陶器・陶質土器擂り鉢・土師器火舟・不明鉄器                             |
| 56 | S K 36 | 391-1地区  | 長方形  | 0.7 | 1.3  |     | 古墳後期  | 須恵器甕・杯蓋・土師器把手・叩石(玄武岩)                               |
| 57 | S K 37 | 6号支線道路1区 | 不整形  | 3.8 | 5.0  |     | 中世    | 土師器糸切り皿・滑石製石鍋・不明鉄器                                  |
| 58 | S K 38 | 6号支線道路1区 | 長方形  | 1.3 | 2.3  |     | 中世    | 遺物なし  |
| 59 | S K 39 | 6号支線道路1区 | 不整形  | 0.9 | 1.7  |     | 中世    | 土師器甕・スラッグ   |
| 60 | S K 40 | 6号支線道路2区 | 不整形  | 0.8 | 1.2  |     | 古墳    | 土師器甕  |
| 61 | S K 41 | 6号支線道路2区 | 方形?  | 2.5 | 2.4< |     | 中世    | 須恵器杯蓋・杯身・土師器甕・高坏・須恵質擂り鉢・青磁碗・鉄釘                      |
| 62 | S K 42 | 7号支線道路   | 不整形  | 0.8 | 3.8  | 0.5 | 古墳後期  | 須恵器杯蓋・土師器甕・瓶・小型丸底壺・高坏・ふいご羽口                         |
| 63 | S D 01 | 2号支線道路1区 |      | 3.8 | 7.1  |     | 中世    | 土師器甕・擂り鉢・青磁碗破片・陶器甕・砥石(砂岩)                           |
| 64 | S D 02 | 2号支線道路1区 |      | 3.2 | 26.8 |     | 中世    | 須恵器杯蓋・須恵質捏鉢・龍泉窯青磁破片・土師器糸切り皿・擂り鉢・瓦質土器火舟・石核(サヌカイト)・鉄釘 |
| 65 | S D 03 | 2号支線道路1区 |      | 1.7 | 5.3< |     | 中世    | 土師器糸切り皿・白磁碗・二彩陶器蓋・瓦質土器擂り鉢                           |
| 66 | S D 04 | 2号支線道路2区 |      | 0.7 | 2.9  |     | 中世    | 龍泉窯青磁碗・瓦質土器甕・チップ                                    |
| 67 | S D 05 | 2号支線道路2区 |      | 1.5 | 6.0  |     | 中世    | 瓦質土器捏鉢・褐釉陶器   |
| 68 | S D 06 | 2号支線道路3区 |      | 1.0 | 20<  |     | 中世    | 土師器甕  |
| 69 | S D 07 | 2号支線道路3区 |      | 1.0 | 35<  |     | 中世    | 須恵器杯蓋・甕・壺・須恵質捏鉢・土師器糸切り皿・甕・土師質擂り鉢・青磁碗                |
| 70 | S D 08 | 2号支線道路3区 |      | 0.7 | 9.0< |     | 古墳    | 土師器甕  |

|    |       |          |  |     |      |    |  |                                    |
|----|-------|----------|--|-----|------|----|--|------------------------------------|
| 71 | S D09 | 2号支線道路4区 |  | 0.7 | 2.7< |    |  | 土師器壺                               |
| 72 | S D10 | 2号支線道路4区 |  | 0.5 | 10<  |    |  | 須恵器杯蓋・ハノウ、土師器壺・高坏、<br>鉄鎖           |
| 73 | S D11 | 2号支線道路4区 |  | 0.3 | 4.0  |    |  | 須恵器杯蓋・壺、土師器壺                       |
| 74 | S D12 | 2号支線道路5区 |  |     |      | 中世 |  | 須恵器杯蓋、土師器壺・瓦質火舍                    |
| 75 | S D13 | 7号支線道路   |  | 0.4 | 14.5 | 中世 |  | 須恵器杯蓋、土師器小型丸底壺、黒釉陶器、<br>チップ(サヌカイト) |
| 76 | S D14 | 8号支線道路   |  | 1.0 | 3.9  | 中世 |  | 瓦質火舍、山形押型文土器                       |

## 第四章 おわりに

これまで第1次調査において検出した各遺構について略述してきた。今回調査では、女原遺跡の南西側の一端を調査したに過ぎない。また、遺構の遺存状況も過去の開田事業に伴って著しい削平を受けていることも明らかとなった。このために遺構の全ての時期を確定することが困難であった。

以下では、本調査での各時期の遺構の区別を行い、簡単なまとめとしたい。

今回確認できた集落は、大きく古墳時代中期（5世紀前半頃）、同後期（6世紀後半から末を中心とする時期）及び中世期に区別されよう。

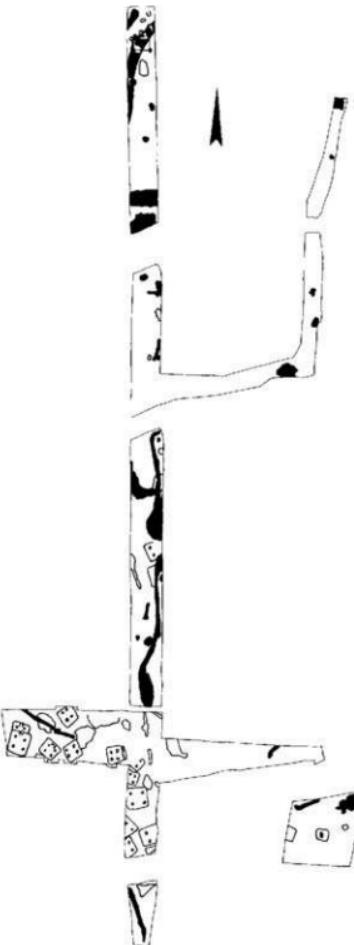
古墳時代集落は各時代を通じて全体的に丘陵上部の斜面（標高23m付近）に集合して営まれていると言える。

まず出現した古墳時代中期遺構は、住居跡では平面形が長方形を呈し、床面に主柱穴4本を配する。また、カマドが作り付けられた形跡は見あたらない。

この時期に該当するとと思われるはSC07・09住居跡やSK13土坑などであり、布留式甕の特徴を引いた球状胴部に内湾気味に立ち上がる口縁部をもつ甕や小型丸底壺、高环などの古様相をもつ遺物を出土する。この時期の集落の広がりは不明であるが、立地からは更に西・南側の地区へ拡大する可能性がある。

次に古墳時代後期では、大きく2時期に区分されると考えられる。それは主に各遺構から出土した須恵器により、須恵器編年Ⅲb期（6世紀後半）とⅣa・Ⅳb期（6世紀末～7世紀初め）のものである。これらの時期の集落分布は、調査区の最高部区域に限られており、Ⅲb期では比較的散在するようであり、Ⅳ期になると南側に集約的に固まった分布を示している。

Ⅲb期の遺構は、完掘が出来た殆どの住居の場合、平面形は長方形に近く、作り付けのカマドを北壁中央に設ける。また、床面の主柱穴は4本である。SC01・02・03・08・11・14住居跡が該当し、他にSC13・20住居跡も包含されるものと考えられる。カマドは、殆どが円形であり、燃焼する火床の中央に花崗岩角礫を加工した角柱を支脚として据えている。



第1次調査の遺構分布

また、住居跡に伴うと考えられる不定形の土坑のうち、SK36 土坑が該当し、他に SK20・25・28・29・31・34 土坑もこれに含めて良いと思われる。

次にⅣ a 期及びⅣ b 期と考えられる集落である。Ⅳ a 期でも住居は、平面形がほぼ長方形を呈し、床面に主柱穴を 4 本配する。サイズは殆ど変わらない。また、同様に北壁の中央に作り付けのカマドを設けている。カマドの位置は時代性というよりも高所にあり、立地上今津湾から吹き上げてくる風の方向に対応したものとも考えられる。SC05・06・15・16・17・18 住居跡が該当し、SK30 土坑が伴うと考えられる。続くⅣ b 期では、明確な遺構は少なく、SC19 住居跡や SK42 土坑などが該当するかと思われる。

次に中世期（12 世紀を中心とする）では、調査区が道路建設予定地部分などで範囲が面的な広がりをもたないことから、北端部に 1 × 2 間規模の掘立柱建物 1 棟が検出されたが、他は南から北側へ流下する不規則な溝や区画溝成いは雨落ち溝と考えられる小溝群及び不整形な土坑で構成される。

時期的に中世期と想定出来たのは、掘立柱建物 1 棟、土坑 24 基、溝状遺構などである。これらの遺構等からは、糸切り皿や瓦質土器土鍋や捏ね鉢、上師質捏ね鉢、同火舎などの国産品と共に龍泉窯青磁碗・皿を中心に青磁香炉・長胴陶器壺・褐釉陶器甕・水注、黒釉陶器甕などの輸入陶磁器破片も多く出土した。また、青磁類と共に北宋銭「崇寧通寶」の出土が特筆されよう。

次に女原遺跡の中の各時期の変遷については、女原遺跡第 3 次調査での成果がある。この地点では古墳時代中期から 13 世紀以降までの遺構が検出されており、古墳時代中期（5 世紀初め）から同後期（6 世紀～7 世紀前半）の竪穴住居跡 4 軒（方形・長方形）、土坑 11 基、溝状遺構 6 条と掘立柱建物 3 棟以上があり、国産土器とともに韓国産陶質土器・赤色軟質土器が伴って出土している。

また、古代末から中世初頭期にも掘立柱建物群が検出されており、これよりやや下る 13 世紀以降の水田跡 13 筆以上（面積 47・48・58・77・82 m<sup>2</sup> のものがある）が見つかっている。

この地点は、第 1 次調査地点からは約 400m 程北側の低地に位置しており、古墳時代或いは中世期とこれ以降の時期においても同一の集落成いは別個の単位として集散を経たものと推定される。

本遺跡は、その周辺に数多く分布する前方後円墳や円墳からなる今宿古墳群の造営、太宰府主船司の設置、中世の南宋貿易成いは元寇時の緊張などの歴史的事象を多く経験した地域にあり、今後とも様々な発見の可能性を秘めた地域と言うことが出来よう。

図 版

PLATES

女原遺跡遠望(南から)

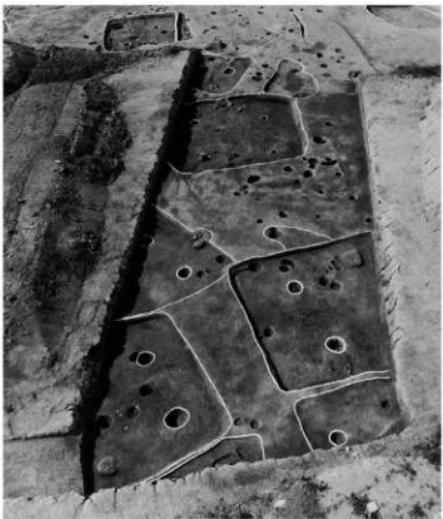




1. 2号支線1区全景（北から）



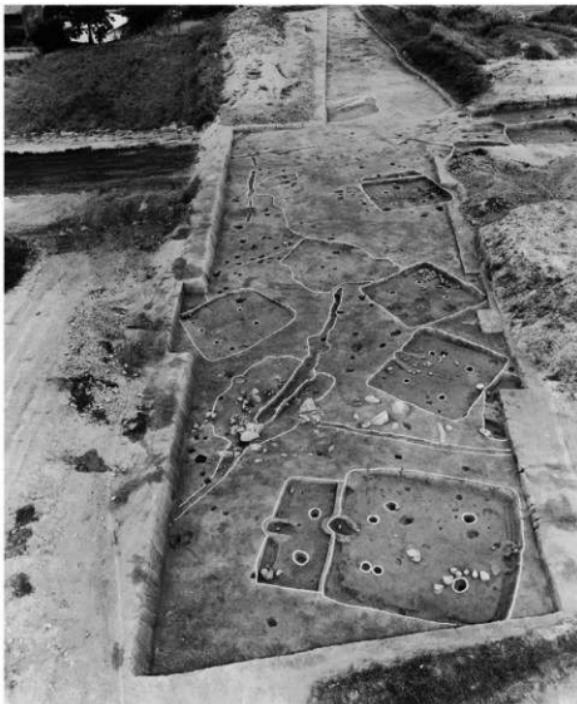
2. 2号支線3区全景（北から）



1. 2号支線4区全景（南から）



2. 2号支線5区全景（北から）



1. 7号支線全景（西から）



2. 391-1地区全景（西から）



1. SC01 住居跡出土状況（2号支線3区）（北から）



4. SC03 住居跡、SD07溝、SK20土坑出土状況  
(2号支線3区) (南から)



2. SC02 住居跡出土状況（2号支線3区）（北東から）



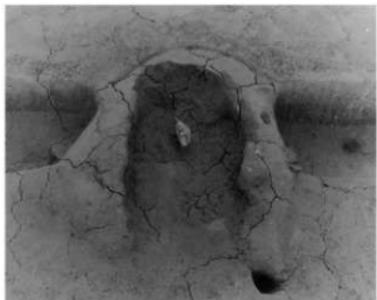
5. SC04・05 住居跡出土状況（7号支線）（南から）



3. SC02 住居跡出土状況（2号支線3区）（北西から）



6. SC04・05 住居跡出土状況（7号支線）（北西から）



1. SC04 住居跡カマド出土状況（7号支線）（南から）



4. SC06 住居跡出土状況（7号支線）（南西から）



2. SC05 住居跡カマド出土状況（7号支線）（南から）



5. SC06 住居跡カマド出土状況（7号支線）（南西から）



3. SC06 住居跡出土状況（7号支線）（北西から）



6. SC07 住居跡出土状況（7号支線）（北西から）



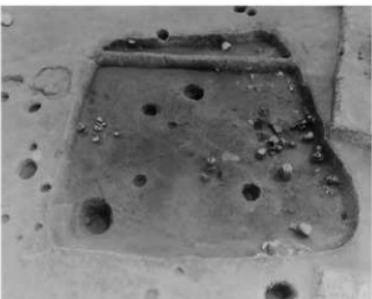
1. SC07・12 住居跡出土状況（7号支線）（南西から）



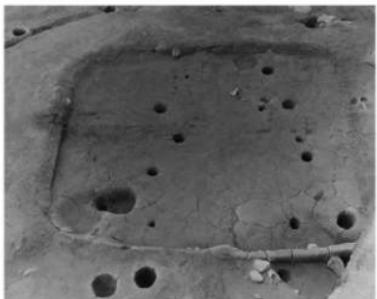
4. SC09 住居跡遺物出土状況（7号支線）（北から）



2. SC07 住居跡遺物出土状況（7号支線）（北西から）



5. SC09 住居跡出土状況（7号支線）（西から）



3. SC08 住居跡出土状況（7号支線）（北東から）



6. SC09 住居跡出土状況（7号支線）（北から）



1. SC12 住居跡出土状況（7号支線）（北東から）



4. SC15 住居跡出土状況（2号支線4区）（東から）



2. SC13 住居跡出土状況（2号支線4区）（南東から）



5. SC15 住居跡カマド出土状況（2号支線4区）（南から）



3. SC14 住居跡出土状況（2号支線4区）（東から）



6. SC16 住居跡出土状況（2号支線4区）（南東から）



1. SC16 住居跡カマド出土状況（2号支線4区）（南西から）



4. SC19 住居跡出土状況（2号支線5区）（北東から）



2. SC17 住居跡出土状況（2号支線4区）（南東から）



5. SC20 住居跡出土状況（391-1 地区）（東から）



3. SC18 住居跡出土状況（2号支線4区）（南から）



6. SC20 住居跡出土状況（391-1 地区）（南から）



1. SK01 土坑出土状況（2号支線1区）（南西から）



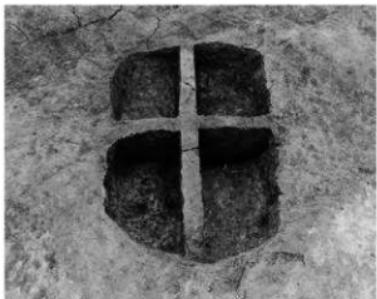
4. SK08 土坑出土状況（2号支線1区）（南から）



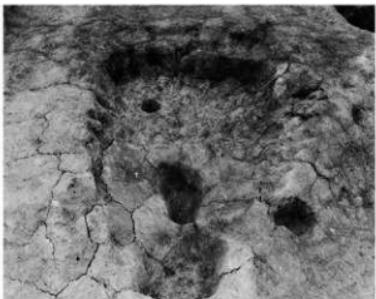
2. SK05 土坑出土状況（2号支線1区）（南から）



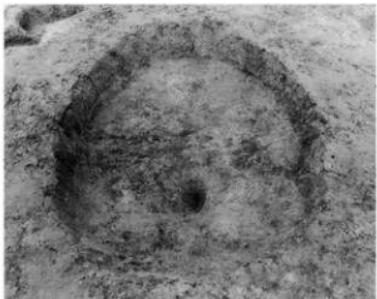
5. SK09 土坑出土状況（2号支線1区）（西から）



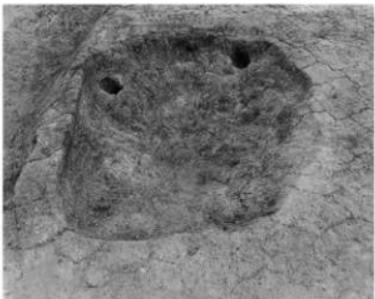
3. SK07 土坑出土状況（2号支線1区）（北東から）



6. SK10 土坑出土状況（2号支線1区）（北から）



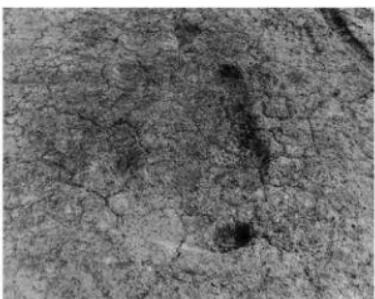
1. SK11 土坑出土状況（2号支線2区）（西から）



4. SK22 土坑出土状況（2号支線3区）（北から）



2. SK13 土坑出土状況（2号支線2区）（西から）



5. SK23 土坑出土状況（2号支線3区）（北から）



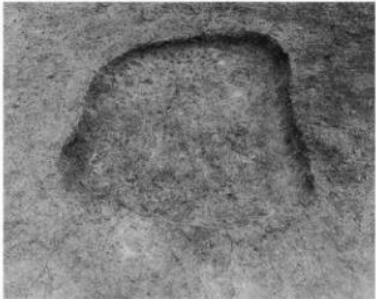
3. SK21 土坑出土状況（2号支線3区）（南から）



6. SK32 土坑出土状況（391-1 地区）（南から）



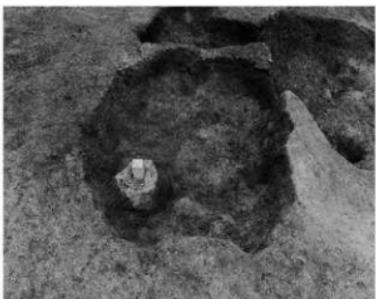
1. SK37 土坑出土状況（6号支線1区）（西から）



3. SP08 小土坑出土状況（2号支線1区）（北東から）



2. SK41 土坑出土状況（6号支線2区）（北から）



4. SP04・05 小土坑出土状況（2号支線1区）（東から）



5. SK24 土坑・SD07溝出土状況（2号支線3区）（南から）



1. SK01 土坑・SD01 溝出土状況（2号支線1区）（南から）



2. SD01 溝東壁土層断面（2号支線1区）（西から）



1. 6号支線2区全景（南から）



2. 8号支線全景（東から）

## 報告書抄録

|          |   |        |                     |
|----------|---|--------|---------------------|
| 書名       | 女原遺跡 4  |        |                     |
| 副書名      | -第1次調査報告-   |        |                     |
| 巻次       | 4   |        |                     |
| シリーズ名    | 福岡市埋蔵文化財調査報告書   |        |                     |
| シリーズ番号   | 1053集   |        |                     |
| 編集者名     | 横山邦繼  |        |                     |
| 編集機関     | 福岡市教育委員会  | 発行機関   | 福岡市教育委員会            |
| 発行年月日    | 20090317  | 作成法人ID | 40134               |
| 住所       | 〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1                                     | 電話番号   | (092)711-4667       |
| 遺跡名のふりがな | みょうばるいせき  |        |                     |
| 遺跡名      | 女原遺跡  |        |                     |
| 所在地ふりがな  | ふくおかしにしきみょうばる   |        |                     |
| 所在地      | 福岡市西区女原   |        |                     |
| 市町村コード   | 40135   |        |                     |
| 北緯       | 33° 34' 15"   | 東経     | 130° 15' 58"        |
| 調査期間     | 1985.05.27-1985.08.12                                       | 調査面積   | 3,000m <sup>2</sup> |
| 調査原因     | 圃場整備事業  | 種別     | 集落                  |
| 主な時代     | 古墳時代後期 中世   |        |                     |
| 遺跡概要     | 古墳時代中期-竪穴式住居+土坑<br>古墳時代後期-竪穴式住居+土坑+溝状遺構<br>中世-掘立柱建物+土坑+溝状遺構 |        |                     |
| 特記事項     | 中世期の遺構には龍泉窯青磁・褐釉陶器・北宋錢崇寧通寶などが伴う。                            |        |                     |

## 女原遺跡 4

-第1次調査報告-

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1053集

2009年3月31日

発行 福岡市教育委員会  
 福岡市中央区天神1-8-1  
 電話 092-711-4667  
 印刷 株式会社 宣技堂  
 福岡市東区箱崎埠頭6丁目6-47  
 電話 092-631-2055